「特別の教科　道徳」設置前後の道徳教育に関する全国調査

（コロナ禍における道徳教育の実態調査を含む）

（2017年度～2020年度調査）

2022年3月31日

武庫川女子大学　教育研究所

押谷由夫

はじめに

戦後の教育は、道徳教育をどのように進めるかが大きな課題でした。戦後の教育改革において、道徳教育は常に注目され、重視されてきましたが、その道のりは、厳しいものでした。大きな流れとしては、社会科を中心とした全教育活動を通しての道徳教育から、道徳の時間を要とする全教育活動を通しての道徳教育へと進み、そして、2015（平成27）年に「特別の教科　道徳」が設置されました。教科書を使用する「特別の教科　道徳」を要とする道徳教育は、小学校は2018（平成30）年度から、中学校は2019（令和元）年度から全面実施されました。この改革は、戦後の道徳教育改革の一応の帰結と言えるものであり、極めてエポックメイキングなものと捉えられます。

学校現場では、この改革に対してどのように対応しているのでしょうか。また、「特別の教科　道徳」についてどのような意識や不安、悩み、課題を感じておられるのか。そのような意識がどのように変化しているのか。このような学校現場の実態や声を、全国調査し、これからの道徳教育の改善・充実に生かしたいと考えました。

そして、『特別の教科　道徳」が実施される前後の、2017（平成29）年度から2019（令和元）年度までの3年間、継続的に調査研究を計画しました。本冊子は、その3年間の調査の結果をまとめたものです。

実は、本調査は、3年間の計画でしたが、3年目の年度末にコロナ禍が発生し、学校現場は、休校になるなど、大変な混乱をもたらしました。まさに道徳教育が問われる事態に直面したわけです。このような状況において、各学校は、『特別の教科　道徳」の設置とかかわって、道徳教育に熱心に取り組んできたことをどう感じておられるのか、実際どのように影響したのか、また、コロナ禍において、引き続き道徳教育が熱心に取り組まれているのか。といったことを聞いてみる必要があると考え、継続して調査することにしました。その結果も収録しています。

また、これらの調査結果の理解を深めていただくために、関係する拙稿を掲載しています。それらも併せて読んでいただくことで、調査結果をより深く理解し、これからの道徳教育の充実に生かしていただきたいと願う次第です。

なお、この調査は毎年同じ学校に調査をお願いしました。そのことによって経年分析がより正確に行えると判断したからです。調査に協力いただいた学校の皆様に心より感謝申し上げます。また、調査の分析等に協力いただいた大学院生の皆様や、貴重なご意見をいただいた皆様にも感謝申し上げます。

押谷由夫

★ 本研究は科研研究（１７Ｈ０２７０６）の一部です。

目次（収録している論文）

1　学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（１）
　　―2017年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―
　（武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』第49号　2019.3　pp.63-94）

2　学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（２）
　　―2018年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―
　（武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』第50号　2020.3　pp.87-120）

3　学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（３）
　　―2019年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―
　（武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』第51号　2021.3　pp.87-125）

4　コロナ禍における道徳教育の実態に関する全国調査の結果と分析
　　―2020年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―
　（武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』第49号　2022.3）

5　「第11章　『特別の教科　道徳』設立までの道のり」
　（日本道徳教育学会編『新道徳教育全集』（全5巻）学文社　2021　『第1巻　道徳教育の変遷・展開・展望』 pp.69-78）

6　「悩んでいる、きみへ―悩みに向き合うことで、きみは大きく成長する―」
（滋賀県教育委員会『令和元年度　滋賀県道徳教育振興だより』2020.3　p.1）

7　「『特別の教科　道徳』の目標を深く読み解こう」
（滋賀県教育委員会『令和元年度　滋賀県道徳教育振興だより』2020.3　pp.2-3）

8　「コロナ禍を生きる、きみへ
　　―新しい生き方と社会を創っていくのはきみたち一人一人―」
（滋賀県教育委員会『令和3年度　滋賀県道徳教育振興だより』2022.3　p.1）

9　「コロナ禍をどう生きるかを一緒に考えてみましょう」
（滋賀県教育委員会『令和3年度　滋賀県道徳教育振興だより』2022.3　pp.2-3）

学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（１）

―2017年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―

Research on actuality of correspondence to moral education reform in schools and teacher's consciousness (1)
－Focusing on statistical analysis and free description analysis in surveys for schools across the country－

押谷 由夫*・矢作　　信行**・齋藤　　道子** 木崎　　ちのぶ**・谷山　　優子**・小山　　久子***

OSHITANI, Yoshio, YAHAGI, Nobuyuki, SAITO, Michiko
KIZAKI, Chinobu, TANIYAMA, Yuko & KOYAMA, Hisako

目次

Ⅰ．本研究の目的と方法
Ⅱ．統計的分析
Ⅲ．全国調査の自由記述の分析

*　武庫川女子大学教育研究所・副所長、教授
** 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程
*** 大阪芸術大学・特任教授

研究の動機

現在文部科学省では、道徳教育の抜本的改善・充実を掲げて、道徳教育の充実を図っている。その中核に「特別の教科 道徳」の設置がある。小学校は昨年度から、中学校は今年度から、全面実施されている。

学校現場では、その対応に様々に取り組んでいるが、このような道徳教育改革にどのような意識をもっているのだろうか。行政的取組は、学校現場からは強制されるという意識をもたれがちである。行政的取組は、学校現場の教育をより充実させるためのものであり、そのことにかかわって慎重に検討して決定されたものである。

しかし、どれだけ慎重に検討されたものであっても、それを実行する側の捉え方が，やらされるといった受動的認識であったり、しなければいけないからするといった受動的な対応であったりしていては、効果は期待できない。行政的な施策に対して、自分たちの学校や目の前の子どもたちの実態と関わらせて捉え、具体化していくことが求められる。

そこで、道徳教育の抜本的改善・充実の柱となる「特別の教科 道徳」が全面実施されるこの時期に，学校現場の対応の実態や教師の意見を調査し、目的とされる本来の効果を上げるための対策を考えていくことが、極めて重要であると考える。

Ⅰ．本研究の目的と方法

１．本研究の目的

本研究は、まず、小学校で全面実施に入る前の 2018 年 3 月現在において、小学校、中学校現場の状況を把握すべく、全国調査を行い、学校現場の教師の道徳教育及び「特別の教科 道徳」関する意識と道徳教育や道徳授業の実際の取組み等について明らかにする。そして、その結果を基に、学校現場の教職員がより主体的、意欲的に道徳教育改善 ・ 充実に取り組んでいただけるようにするための方策を考え、提案していくことを目的とする。

なお、本研究は継続的に行うことを計画している。

２．本研究の方法

調査対象校の選定は『全国学校総覧　2017 年度』（原書房）より、全国 47 都道府県の全部の小学校・中学校から、およそ 1 割の学校を無作為に抽出し、アンケート用紙を送付するという方法を取った。

発送学校数は、3,336 校。回収学校数は、981 校。回収率は、29,4％である。

表 0　学校種別、地域別の回答数

Ⅰ－3　学校の種類					Ⅰ－4　地域									
全体	小学校	中学校	小中一貫校・義務教育学校	不明	全体	北海道・東北	関東	甲信越	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	不明
981	663	313	4	1	981	178	196	54	36	101	157	85	46	127	1
100	67.6	31.9	0.4	0.1	100	18.1	20	5.5	3.7	10.3	16	8.7	4.7	12.9	0.1

（押谷由夫）

Ⅱ．統計的分析

１．各校の道徳教育への対応

(1)　道徳教育推進教師の特徴

推進教師は、「ベテラン」と「中堅」の教師が約 85%　担当している。地域別で比較すると、同じ傾向にあるものの、「北海道・東北」は若手が少なく、「中国・四国」は若手が多い。

表 1

道徳教育推進教師（道徳主任）はどのような先生がなられていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
ベテランの先生	341	245	96	85	46	75	79	50	47	50	40
	35%	37%	31%	37%	34%	42%	32%	37%	31%	38%	32%
中堅の先生	479	311	168	107	73	87	128	64	77	51	72
	49%	47%	54%	46%	55%	49%	52%	47%	50%	39%	57%
若手の先生	148	101	47	39	14	15	40	21	28	29	15
	15%	15%	15%	17%	10%	9%	16%	15%	18%	22%	12%
複数の先生	4	3	1	0	1	0	1	1	1	1	0
	0%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	1%	1%	1%	0%
合計	972	660	312	231	134	177	248	136	153	131	127

(2)　道徳教育を重視している学校の割合

学校経営において、9 割の学校が道徳教育を重視している。小規模校（「200 人以下」）より大規模校（「701 人以上」）に道徳教育重視の傾向がある。

表 2

学校経営において道徳教育が重視されていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
重視されている	370	281	89	96	49	75	94	42	55	46	58
	38%	43%	28%	42%	37%	42%	38%	31%	36%	35%	46%
まあまあ重視されている	487	317	170	119	60	91	114	81	76	65	60
	50%	48%	54%	52%	45%	51%	46%	60%	49%	50%	47%
あまり重視されていない	110	60	50	16	24	11	37	13	21	20	8
	11%	9%	16%	7%	18%	6%	15%	10%	14%	15%	6%
重視されていない	6	2	4	0	1	0	3	0	2	0	1
	1%	0%	1%	0%	1%	0%	1%	0%	1%	0%	1%
合計	973	660	313	231	134	177	248	136	154	131	127

(3) 道徳教育を推進させるための組織をつくっている割合

道徳教育に組織をつくって取り組んでいる学校が、6 割近くある。小学校・中学校の校種別での差はみられない。大規模校（「701 人以上」）は組織的に取り組む学校が多く、小規模校（「200 人以下」）と 30ポイントの差がある。小規模校では、必然的に学校全体で取り組む体制ができているとも考えられる。

表 3

学校全体で道徳教育を推進するための組織を作っていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
作っている	540	369	171	95	93	89	156	50	107	64	74
	57%	58%	56%	42%	72%	51%	64%	39%	71%	50%	61%
来年度作る予定である	70	46	24	14	4	16	20	12	9	8	5
	7%	7%	8%	6%	3%	9%	8%	9%	6%	6%	4%
作っていない	336	223	113	117	32	68	68	66	35	56	43
	36%	35%	37%	52%	25%	39%	28%	52%	23%	44%	35%
合計	946	638	308	226	129	173	244	128	151	128	122

2．全体計画について

(1) 全体計画に行動目標を入れているか

全体計画に行動目標を入れている学校は半分程度である。具体的な目標を入れていこうとする傾向は読み取ることができる。

表 4

全体計画の中に、行動目標をどの程度入れていますか

全体	多く入れている	まあまあ入れている	あまり入れていない	ほとんど入れていない	不明
981	57	349	316	200	59
100%	6%	36%	32%	20%	6%

(2) 全体計画に書かれている内容

全体計画に入れていない学校が多いのは、「近接の学校や幼児教育施設との連携について」、「道徳教育の研修計画について」、「情報化、国際化、への対応」や「環境問題、福祉問題への対応」があげられる。また「子どもたち一人一人への対応」や「環境整備について」も明記していない学校が多い。小学校・中学校の比較では、あまり大きな差はなく、小・中学校ともに考えられる課題であると言える。

表 5

全体計画に入れている内容

	回　答								
	具体的に入れている			基本方針として入れている			入れていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．子どもたち一人一人への心の安定や道徳的対応について	231 24%	151 23%	80 26%	526 54%	350 53%	176 57%	211 22%	156 24%	55 18%
2．環境の整備について	233 24%	164 25%	69 22%	492 51%	328 50%	164 53%	241 25%	166 25%	75 24%
3．学級における道徳教育の取り組みについて	410 42%	268 41%	142 46%	403 42%	281 43%	122 39%	159 16%	112 17%	47 15%
4．学年（学年段階）における道徳教育の取り組みについて	533 55%	354 54%	179 58%	392 40%	278 42%	114 37%	45 5%	29 4%	16 5%
5．重点的取り組みの実施計画について	502 52%	353 54%	149 48%	365 38%	235 36%	130 42%	102 11%	71 11%	31 10%
6．国際化への対応について	141 15%	98 15%	43 14%	490 51%	328 50%	162 52%	336 35%	231 35%	105 34%
7．情報化への対応について	132 14%	84 13%	48 15%	479 49%	321 49%	158 51%	358 37%	253 38%	105 34%
8．環境問題への対応について	145 15%	102 16%	43 14%	471 49%	313 48%	158 51%	352 36%	242 37%	110 35%
9．福祉問題への対応について	175 18%	121 18%	54 18%	467 48%	299 46%	168 54%	324 34%	237 36%	87 28%
10．近接の学校や幼児教育施設との連携について	195 20%	143 22%	52 17%	383 40%	278 42%	105 34%	390 40%	238 36%	152 49%
11．道徳教育の研修計画について	288 30%	196 30%	92 30%	303 31%	208 32%	95 31%	374 39%	251 38%	123 40%

(3) 計画で示したことが各教育活動の中に生かされているか

全体計画で示していることが、それぞれの教育活動の中でどの程度生かされているかを見ると、あまり生かされていないと判断された項目には、「各教科の指導計画」「特別活動や学級活動の指導計画」「総合的な学習の時間の指導計画」「家庭との連携」があげられ る。いずれも 2 割から 3 割近くの学校で生かされていないと判断している。その中で、小・中学校の差が顕著なのは、「学級の道徳教育」と「各教科の指導計画」への生かされ方である。

表 6

全体計画で生かされている項目

	回　答					
	生かされている			生かされていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.道徳の時間（「特別の教科 道徳」）の年間指導計画に生かされている	865 89%	606 92%	259 83%	104 11%	52 8%	52 17%
2.各学年の道徳教育に生かされている	880 91%	611 93%	269 87%	89 9%	47 7%	42 14%
3.各学級の道徳教育に生かされている	832 86%	584 89%	248 80%	135 14%	73 11%	62 20%
4.各教科の指導計画に生かされている	664 69%	500 76%	164 53%	305 32%	158 24%	147 47%
5.特別活動の指導計画に生かされている	727 75%	509 77%	218 70%	242 25%	149 23%	93 30%
6.学級活動の指導計画に生かされている	733 76%	513 78%	220 71%	236 24%	145 22%	91 29%
7.総合的な学習の時間の指導計画に生かされている	674 70%	475 72%	199 64%	293 30%	182 28%	111 36%
8.日常生活の指導に生かされている	821 85%	572 87%	249 80%	148 15%	86 13%	62 20%
9.家庭との連携に生かされている	655 68%	477 73%	178 57%	314 32%	181 28%	133 43%
10.地域との連携に生かされている	589 61%	438 67%	151 49%	377 39%	218 33%	159 51%

(4)　別葉の作成の有無

別葉を作成している学校は、63%　である。来年度作成する予定であるが　17%で、合計8割になる。定着してきているとみることができる。

表 7

道徳の指導内容項目と関連づけた別葉の作成有無

全体	作成している	来年度作成する予定である	作成していない	不明
981 100%	622 63%	165 17%	158 16%	36 4%

(5)　重点目標について指導計画を具体的に示しているかどうか

重点目標について指導計画を具体的に示している学校は、小学校が 35%、中学校においては 18%　程度である。地域別では、中国・四国が　43%と他の地域より抜き出ている。来年度、具体的に示そうとしている学校は、小中、地域別すべてにおいて 3 割程度である。重点目標を設定するだけではなく、具体的にどう取り組むかについて計画を示していこうとする傾向が、全国的に進められていると捉えられる。その傾向が、小学校において、また中国・四国においてより顕著であるといえる。

表 8

重点目標などを「特別の教科 道徳」（道徳の時間）を要として関連する教育活動や日常生活とかかわらせて指導していく必要がありますが、そのような指導計画について示していますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
具体的な計画を示している	273 29%	219 35%	54 18%	65 29%	43 34%	51 30%	61 26%	35 26%	36 25%	54 43%	36 29%
来年度に具体的な計画を示そうと考えている	295 31%	198 31%	97 32%	85 38%	28 22%	59 35%	72 30%	43 32%	43 29%	40 32%	38 30%
具体的な計画は示していないが基本的方針は示している	321 34%	196 31%	125 41%	59 27%	53 41%	53 31%	88 37%	45 34%	63 43%	25 20%	47 38%
基本的方針も具体的計画も示していない	53 6%	22 4%	31 10%	14 6%	4 3%	8 5%	18 8%	10 8%	5 3%	8 6%	4 3%
合計	942	635	307	223	128	171	239	133	147	127	125

(6) 家庭や地域との連携の内容について

「家庭への学校だよりの配布」については、積極的に取り組まれており、9 割にのぼる。「地域への学校だより」、地域の人や保護者に協力いただく「催し」「授業」「話し合う機 会」「道徳授業の公開」もよく行われている。しかし、6 項目中 2 ～ 6 の 5 項目については、小学校に比べて中学校は 20ポイントほど「行っていない」が上回っている。全体では「行っていない」という小・中学校が 4 分の 1 ほどあり、今後の課題であるといえる。

表 9

家庭や地域との連携について

	回　答					
	行っている			行っていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.家庭への学校だよりの配布	925 95%	639 96%	286 91%	51 5%	24 4%	27 9%
2.地域への学校だよりの配布	742 76%	557 84%	185 59%	230 24%	103 16%	127 41%
3.地域の人たちも参加いただく催し	742 76%	557 84%	185 59%	230 24%	103 16%	127 41%
4.保護者や地域の人たちに協力いただく授業	712 73%	548 83%	164 53%	261 27%	113 17%	148 47%
5.保護者や地域の人たちと一緒に話し合える機会	655 68%	488 74%	167 54%	316 33%	172 26%	144 46%
6.道徳授業の地域の人たちの公開	558 58%	425 64%	133 43%	412 43%	235 36%	177 57%

(7) 今年度に行った道徳教育の研修計画の回数

平成 28 年度中に行われた道徳教育の研修計画の回数は、半分の学校が 1 ～ 2 回である。行っていない学校も 1 割ある。中学校では 2 割である。

表 10

今年度の道徳教育の研修計画を行った回数

	全体	校種別	
		小学校	中学校
行っていない	104	44	60
	11%	7%	19%
1～2回行った	511	350	161
	53%	53%	52%
3～4回行った	233	172	61
	24%	26%	20%
5～9回行った	76	56	20
	8%	9%	7%
11回以上行った	47	39	8
	5%	6%	3%
合計	971	661	310

3．年間指導計画について

(1) 年間指導計画に書いている内容

全体で見ると「基本的発問」を入れている学校が 55%、「事前の指導」は 49%、「事後の指導」は 50%と、半数以上の学校において押さえられている。「板書計画」は 24%であり、中学校の方が 9ポイント高くなっている。また、「家庭との連携」「地域との連携」ついては、ほぼ半数が入れている。

表 11

家庭や地域との連携について

	回答					
	入れている			入れていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.基本的発問	528	371	157	438	288	150
	55%	56%	51%	45%	44%	49%
2.板書計画	229	137	92	737	521	216
	24%	21%	30%	76%	79%	70%
3.事前の指導に関すること	472	320	152	494	338	156
	49%	49%	49%	51%	51%	51%
4.事後の指導に関すること	480	331	149	486	327	159
	50%	50%	48%	50%	50%	52%
5.家庭との連携に関すること	510	373	137	455	284	171
	53%	57%	45%	47%	43%	56%
6.地域との連携に関すること	483	357	126	483	301	182
	50%	54%	41%	50%	46%	59%

(2) 郷土資料や学校独自に開発した教材の活用数

郷土教材や学校独自に開発した教材を取り入れていない学校が全体で 27%ある。また、取り入れている場合も、半数の学校が 1 ～ 2 教材である。

表 12

郷土教材や学校独自に開発した教材を取り入れた教材数

	全体	校種別	
		小学校	中学校
入れていない	266 27%	170 26%	96 31%
1～2教材入れている	496 51%	357 54%	139 45%
3～5教材入れている	165 17%	103 16%	62 20%
6～10教材入れている	35 4%	27 4%	8 3%
11教材以上入れている	10 1%	4 1%	6 2%
合計	972	661	311

(3) 道徳の時間全体を振り返る時間を年間指導計画に設けているか

「設けている」学校が 2 割程度である。3 割程度の学校が「来年度設けようと思っている」。半数の学校が、振り返りの時間を年間指導計画に位置付けようとしていることが分かる。

表 13

道徳の授業全体を振り返る時間の有無

全体	設けている	来年度は設けようと思っている	設けていない	不明
981 100%	177 18%	275 28%	524 53%	5 1%

(4) 道徳の授業と関連する教育活動を明記しているか

「全部の授業で明記している」学校が 2 割程度である。「明記していない」学校が 4 分の 1 以上ある。

表 14

「特別の教科 道徳」の各授業と関連する教育活動の明記の有無

全体	全部の授業に明記している	多くの授業に明記している	少しの授業に明記している	明記していない	不明
981 100%	177 18%	287 29%	250 26%	259 26%	8 1%

(5) 学校全体で道徳の授業に取り組む体制ができているか

学校全体で道徳の授業に取り組む体制が「できている」「だいたいできている」学校 は、7 割である。「できている」と回答した学校の割合を小・中学校で比較すると、14ﾎﾟｲﾝﾄ小学校が多い。「できている」と回答した比率を地域別で比較すると、中国・四国が低くなっている。一番高い九州・沖縄とは、11ﾎﾟｲﾝﾄの差がある。

「できていない」と回答した学校は、小学校が 4%、中学校が 8%である。地域別では、北海道・東北と北陸・中部が少なく 2%である。

表 15

学校全体で道徳の授業に取り組む体制ができていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
できている	337	259	78	73	45	64	82	48	56	38	50
	35%	39%	25%	32%	34%	37%	33%	35%	36%	29%	40%
だいたいできている	346	236	110	86	47	58	96	50	46	48	47
	36%	36%	35%	38%	35%	33%	39%	37%	30%	37%	37%
少しできている	239	141	98	62	34	49	52	36	45	35	22
	25%	21%	32%	27%	25%	28%	21%	26%	29%	27%	18%
できていない	48	23	25	8	8	4	18	3	7	9	7
	5%	4%	8%	4%	6%	2%	7%	2%	5%	7%	6%
合計	970	659	311	229	134	175	248	137	154	130	126

4．道徳の授業について

(1) 今年度行った道徳授業研修回数

平成 28 年度に道徳の授業研修を「行っていない」学校が 18% である。学校種別では中学校が 10ﾎﾟｲﾝﾄ高くなっている。「1~3 回行った」が 63% であり、小学校・中学校の差はほとんどない。

表 16

今年度に学校全体で道徳授業の研修を行った回数

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
行っていない	170	94	76	45	20	36	53	22	22	18	19
	18%	14%	24%	20%	15%	21%	21%	16%	14%	14%	15%
1～3回行った	616	418	198	157	80	114	146	88	102	86	79
	63%	63%	64%	68%	60%	65%	59%	65%	67%	66%	62%
4～6回行った	113	87	26	18	20	12	35	16	18	15	17
	12%	13%	8%	8%	15%	7%	14%	12%	12%	12%	13%
7～10回行った	38	33	5	5	7	6	7	5	9	6	5
	4%	5%	2%	2%	5%	3%	3%	4%	6%	5%	4%
10回以上行った	35	29	6	6	7	8	8	5	2	6	7
	4%	4%	2%	3%	5%	5%	3%	4%	1%	5%	6%
合計	972	661	311	231	134	176	249	136	153	131	127

(2) 先生が集まっての道徳の話し合いの頻度

先生方が集まって道徳授業の話をすることがある学校は「よく行われている」「ときどき行われている」を合せると 6 割になっている。「ほとんど行われていない」と回答した

学校も 1 割近くある。

表 17

各学年や学年段階で先生方が集まられての道徳授業の話し合いは行われていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
よく行われている	135	81	54	27	23	14	28	17	27	21	29
	14%	12%	17%	12%	17%	8%	11%	13%	18%	16%	23%
ときどき行われている	454	307	147	99	65	68	118	69	79	62	57
	47%	47%	47%	43%	49%	39%	48%	51%	51%	48%	45%
あまり行われていない	289	216	73	72	36	70	75	39	36	32	37
	30%	33%	24%	31%	27%	40%	31%	29%	23%	25%	29%
ほとんど行われていない	89	53	36	31	9	23	24	11	12	15	4
	9%	8%	12%	14%	7%	13%	10%	8%	8%	12%	3%
合計	967	657	310	229	133	175	245	136	154	130	127

(3) 今年度の授業で変わったと思うこと

肯定的回答と否定的回答がそれぞれの項目にわたって半々であるものが多い。その中で肯定的回答が多いのは、「導入の工夫」「教材提示の工夫」「展開の工夫」「終末の工夫」「子どもたちへの対応」があげられる。確実に授業が改善されていることがうかがえる。「板書の工夫」「子どもたちへの対応」「授業の評価」については、小・中学校差がみられる。小学校の方がそれぞれにおいて肯定的回答が高くなっている。

表 18

今年度の道徳授業の変化

	回答					
	変わってきている			変わっていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.低学年の道徳授業（中学校では1年）	508	346	162	455	305	150
	53%	53%	52%	47%	47%	48%
2、中学年の道徳授業（中学校では2年）	503	353	150	460	297	163
	52%	54%	48%	48%	46%	52%
3、高学年の道徳授業（中学校では3年）	504	368	136	459	282	177
	52%	57%	44%	48%	43%	57%
4、事前の指導の工夫	402	279	123	564	374	190
	42%	43%	39%	58%	57%	61%
5、導入の工夫	532	365	167	433	288	145
	55%	56%	54%	45%	44%	47%
6、教材提示の工夫	545	367	178	420	285	135
	57%	56%	57%	44%	44%	43%
7、展開の工夫	575	403	172	391	250	141
	60%	62%	55%	41%	38%	45%
8、終末の工夫	515	359	156	451	294	157
	53%	55%	50%	47%	45%	50%
9、教材の多様性	478	302	176	487	350	137
	50%	46%	56%	51%	54%	44%
10、事後の指導の工夫	375	269	106	591	384	207
	39%	41%	34%	61%	59%	66%
11、板書の工夫	508	376	132	457	276	181
	53%	58%	42%	47%	42%	58%
12、子どもたちへの対応	567	399	168	399	254	145
	59%	61%	54%	41%	39%	46%
13、授業の評価	464	349	115	495	301	194
	48%	54%	37%	52%	46%	63%

(4) 道徳ノートや道徳ファイルを使っている割合

道徳ノートを「ほとんどのクラスで持たせている」学校が 22%あるが、「持たせていな

い」学校が半数近くある。小・中学校を比較すると小学校の方が 17ポイント多く持たせている。

道徳ファイルは、「ほとんどのクラスで持たせている」学校を小学校と中学校で比較すると、小学校が 19%、中学校が 52%と大きな開きがある。「持たせていない」学校は全体で 36% ある。

表 19

道徳ノートを持たせているか

1．道徳ノート	全体	校種別	
		小学校	中学校
ほとんどのクラスで持たせている	217 22%	145 22%	72 23%
多くのクラスで持たせている	91 9%	76 12%	15 5%
少しのクラスで持たせている	194 20%	155 24%	39 13%
持たせていない	469 48%	283 43%	186 60%
合計	971	659	312

表 20

道徳ファイルを持たせているか

2．道徳ファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
ほとんどのクラスで持たせている	286 29%	122 19%	164 52%
多くのクラスで持たせている	141 15%	110 17%	31 10%
少しのクラスで持たせている	201 21%	175 27%	26 8%
持たせていない	346 36%	254 38%	92 29%
合計	974	661	313

(5) 提案されている道徳授業の効果について

現在提案されている「登場人物への自我関与中心の授業」や「問題解決的な授業」、「道徳的行為に関する体験的な授業」については 9 割以上の学校で「効果的だと思う」と捉えている。また、「学級活動との関連」や「学級経営との連携」、「日常生活との関連を重視した授業」も 9 割以上の学校において「効果的」だと捉えている。

小・中学校で比較すると、「自我関与中心の授業」は小学校が効果的だととらえている学校が多い。「各教科との関連を重視した授業」も小学校が 12ポイントも高い。そのほかは、小・中学校同様の傾向を指摘できる。

表 21

道徳の授業の改善について

	回　答					
	効果的だと思う			効果的だとは思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.登場人物への自我関与中心の授業	859 89%	595 90%	264 85%	112 12%	65 10%	47 15%
2.問題解決的な授業	898 93%	606 92%	292 94%	73 8%	53 8%	20 6%
3.道徳的行為に関する体験的な授業	897 92%	612 93%	285 91%	77 8%	49 7%	28 9%
4.各教科との関連を重視した授業	758 78%	540 82%	218 70%	216 22%	121 18%	95 30%
5.学級活動との関連を明確にした授業	886 91%	606 92%	280 90%	89 9%	56 9%	33 11%
6.総合の時間との関連を明確にした授業	812 84%	560 85%	252 81%	161 17%	101 15%	60 19%
7.学級経営との連携を重視した授業	907 93%	622 94%	285 91%	68 7%	40 6%	28 9%
8.日常生活との関連を重視した授業	934 96%	633 96%	301 96%	40 4%	28 4%	12 4%

(6) 今年度の道徳の授業で使用した教材

『私たちの道徳』は、9 割以上の学校で何らかの方法で使われている。教育委員会等で開発された「道徳教材や資料」は 7 割近くの学校で使われている。民間の『副読本』も 8 割近くが何らかの形で使われている。「学校が独自に開発した教材」は約 3 割の学校で使われている。

表 22

今年度の道徳の授業で使用した教材

	回　答								
	使った			使っていない			そのようなものはない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.文部科学省発行の『私たちの道徳』	891	625	266	74	33	41	6	0	6
	92%	95%	85%	8%	5%	13%	1%	0%	2%
2.都道府県や市町村などで開発された「道徳教材資料」	690	503	187	216	125	91	67	32	35
	71%	76%	60%	22%	19%	29%	7%	5%	11%
3.民間が発行する副読本	771	526	245	117	73	44	83	59	24
	79%	80%	78%	12%	11%	14%	9%	9%	8%
4.学校が独自に開発した教材	295	147	148	235	179	56	440	331	109
	30%	22%	47%	24%	27%	18%	45%	50%	35%

(7) 今年度、民間の副読本を使っている状況

平成 28 年度で民間の『副読本』が使われた状況を調べてみると、「公費で購入し全員にも足せて使った」学校が 11%、「保護者に私費で購入してもらい全員で使った」学校が27%であり、個人持ちにして使っている学校が 4 割ほどであると捉えられる。

表 23

民間の副読本の使用有無

	全体	校種別	
		小学校	中学校
公費で購入し全員に持たせて使った	93	62	31
	11%	10%	11%
公費で購入し学級ごとに保管して使った	110	78	32
	12%	13%	11%
公費で購入し学校に保管して使った	162	129	33
	18%	22%	12%
保護者に私費で購入してもらい全員で使った	235	147	88
	27%	25%	31%
購入していない	285	182	103
	32%	30%	36%
合計	885	598	287

5．道徳教育に関する先生方の意識

(1) 道徳教育に対する先生方の意識

「道徳教育の大切さについて理解している」に肯定的に答えた学校が、95% である。「特別の教科　道徳』の大切さの理解」も、肯定的に答えた学校が 9 割近くになってい

る。ただ、「道徳教育の目標の理解」や「『特別の教科　道徳』の目標の理解」となると、80 ～ 85% になっている。また、指導方法や評価になると、7 割から 5 割程度になる。さらに、「道徳教育に熱心に取り組んでいる教師が多い」と肯定的に答えた学校は、7割近く、「道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い」と肯定的に答えた学校が、6割、「道徳授業を楽しんでいる教員が多い」と回答した学校が、45%　程度となっている。

小・中学校を比較すると、「特別の教科 道徳」の理解度、「指導方法」「評価」「「道徳教育への熱心さ」「道徳の授業への熱心さ」「道徳教育を自分自身のことでもあると考えている教師が多い」において、1 割～ 2 割程度小学校が高くなっている。「道徳の授業を楽しんでいる人が多い」については、小・中学校差はあまりないといえる。

表 24

道徳教育に対する先生の理解度

	回　答					
	そう思う			そう思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.道徳教育の大切さについて理解している	921 95%	633 96%	288 92%	53 5%	28 4%	25 8%
2.道徳教育の目標について理解している	821 84%	581 88%	240 77%	153 16%	80 12%	73 23%
3.「特別の教科 道徳」の大切さについて理解している	854 88%	601 91%	253 81%	119 12%	60 9%	59 19%
4.「特別の教科 道徳」の目標について理解している	761 78%	552 84%	209 67%	213 22%	109 17%	104 33%
5.「特別の教科 道徳」の指導方法について理解している	686 71%	495 75%	191 61%	287 30%	165 25%	122 39%
6.「特別の教科 道徳」の評価について理解している	530 55%	395 60%	135 43%	443 46%	265 40%	178 57%
7.道徳教育に熱心な教師が多い	669 69%	472 72%	197 63%	303 31%	187 28%	116 37%
8.道徳の授業に熱心な教師が多い	627 65%	442 67%	185 59%	345 36%	217 33%	128 41%
9.道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い	584 61%	412 63%	172 55%	381 40%	241 37%	140 45%
10.道徳授業を楽しんでいる教師が多い	433 45%	302 46%	131 42%	537 55%	355 54%	182 58%

(2)　教師から見た家庭や地域の人々への意識

教師から見た家庭や地域の人々への意識においては、「子どもの道徳教育に熱心な保護者が多い」と肯定的に答えた学校は　　45%。これは、「子どもの道徳教育に熱心な地域の人々が多い」と肯定的に答えた学校の割合とほとんど同じである。また「地域の協力が得られている」と肯定的に答えた学校は、65%、「保護者の協力が得られている」は　7　割近くになっている。

表 25
道徳教育に対する先生の理解度

	回　答					
	そう思う			そう思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.子どもの道徳教育について熱心な保護者が多い	430 45%	308 47%	122 39%	537 56%	347 53%	190 61%
2.子どもの道徳教育について熱心な地域の人々が多い	431 45%	326 50%	105 34%	537 56%	330 50%	207 66%
3.地域の協力が得られている	626 65%	483 74%	143 46%	343 35%	174 27%	169 54%
4.保護者の協力が得られている	669 69%	488 74%	181 58%	301 31%	170 26%	131 42%

(3)　教師の道徳教育に対する意識

最も肯定的な回答が多かったのが「道徳の授業を積み重ねていけば子どもたちの道徳性は高められる」であり、9 割である。また、「いじめなどの子どもたちの問題行動は道徳教育を充実させることである程度改善される」についても、9 割近くの教師が肯定的に答えている。さらに「教師はもっと自分の生き方を話すべきだ」と肯定的に答えている教師が、77%　　と高くなっている。学力の向上との関係も肯定的に捉えている教師が多く、先生方は全体的に道徳教育の効果を高く評価していると捉えることができる。なお、道徳の時間が「特別の教科道徳」になったことに賛成だと肯定的にとらえた教師は、55%になっている。

表 26
道徳教育に対する先生の意見

	回　答					
	そう思う			そう思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.道徳の授業を積み重ねていけば子どもたちの道徳性は高められる	879 90%	602 91%	277 89%	94 10%	58 9%	36 12%
2.教師は自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	744 77%	505 77%	239 76%	229 24%	155 24%	74 24%
3.道徳教育は他律的な道徳性の育成が根幹にあって自律的な道徳性がはぐくまれる	681 71%	477 73%	204 66%	279 29%	175 27%	104 34%
4.どのような子どもたちも学校に来ればしっかりと成長できる	603 62%	427 65%	176 56%	366 38%	229 35%	137 44%
5.学力の育成は道徳教育を充実させることで高まる	692 72%	486 74%	206 66%	275 28%	169 26%	106 34%
6.体力の育成は道徳教育を充実させることで高まる	441 46%	319 49%	122 39%	527 54%	337 51%	190 61%
7.いじめなどの子どもたちの問題行動は道徳教育を充実させることである程度改善される	860 89%	592 90%	268 86%	108 11%	64 10%	44 14%
8.道徳教育を充実させることで家庭との連携が深まる	670 69%	475 72%	195 63%	299 31%	182 28%	117 38%
9.道徳教育を充実させることで地域との連携が深まる	604 62%	435 66%	169 54%	364 38%	221 34%	143 46%
10.「特別の教科 道徳」の時間を40時数くらいにするともっと多様な授業が工夫できる	195 20%	134 20%	61 20%	775 80%	524 80%	251 80%
11.教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	627 65%	401 61%	226 73%	340 35%	255 39%	85 27%
12.道徳の時間が「特別の教科道徳」になったことに賛成であ	539 56%	388 59%	151 49%	425 44%	265 41%	160 51%

小・中学校で比較してみると、差がみられるのは、「地域との連携」の効果で、中学校が12ポイント低くなっている。また、「教員養成課程の充実」に関しては、中学校教員の方が、要望が高い。さらに「特別の教科　道徳」になったことに対する肯定的回答は中学校が10ポイント低くなっている。

(4)　これからの道徳教育充実への要望

これからの道徳教育への要望については、道徳教育や「特別の教科 道徳」の進め方に関する資料要望が高い。また特別予算への要望や研究機会を多くすることにも高い要望がある。

表 27

道徳教育に対する先生の意見

	回　答					
	そう思う			そう思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.道徳教育を充実させるための特別予算がほしい	660 68%	461 70%	199 64%	307 32%	194 30%	113 36%
2.道徳教育の指定校を多くしてほしい	301 31%	201 31%	100 32%	665 69%	452 69%	213 68%
3.道徳の専門教師を加配してほしい	582 60%	366 56%	216 69%	386 40%	289 44%	97 31%
4.道徳教育研修の機会を多くしてほしい	788 81%	538 82%	250 80%	181 19%	119 18%	62 20%
5.文部科学省は道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	788 81%	545 83%	243 78%	182 19%	113 17%	69 22%
6.文部科学省は「特別の教科 道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	822 85%	565 86%	257 82%	147 15%	91 14%	56 18%

6．教師の道徳教育に対する意識の傾向性（因子分析による検討）

教師の道徳教育に対する意識（表　26）について、因子分析による検討を行った。回答している教員が 12 項目の意見についてどう思うか、主因子法による因子分析を行った。3 因子構造が妥当であると考えられ、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。明確な 3 つの因子が得られた。累積寄与率は、43.71 であった。

取り出した 3 因子について、次のように解釈された。第 1 因子は、「道徳教育を充実させれば、学校教育を高めたり育むことができる」と考えているため、「道徳教育有効性因子」と名付けた。第 2 因子は、「道徳教育を充実させることで、家庭との連携が深まる。地域との連携が深まる」と考えていることから、「連携因子」とした。第 3 因子は、「道徳の時間が『特別の教科 道徳』になったことに賛成である」「教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにして充実を図るべきだ」と考えていることから、「制度化充実因子」とした。

これらの 3 つの因子が、教師の道徳教育に対する意識の傾向性の背景にあることが明らかになった。

（文責：木崎ちのぶ）

表 28　回転後の因子行列

	因子		
	1	2	3
5．学力の育成は道徳教育を充実させることで高まる	.540	.280	.324
3．道徳教育は他律的な道徳性の育成が根幹にあって自律的な道徳性がはぐくまれる	.537	.096	.111
4．どのような子どもたちも学校に来ればしっかりと成長できる	.533	.130	.074
6．体力の育成は道徳教育を充実させることで高まる	.517	.281	.255
1．道徳の授業を積み重ねていけば子どもたちの道徳性は高められる	.461	.206	.339
2．教師は自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	.441	.147	.128
8．道徳教育を充実させることで家庭との連携が深まる	.267	.833	.251
9．道徳教育を充実させることで地域との連携が深まる	.286	.804	.223
12. 道徳の時間が「特別の教科道徳」になったことに賛成である	.139	.146	.732
11. 教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	.140	.131	.547
7. いじめなどの子どもたちの問題行動は道徳教育を充実させることである程度改善される	.362	.354	.373
10. 「特別の教科道徳」の時数を 40 時間くらいにするともっと多様な授業が工夫できる	.245	.205	.354

因子抽出法 : 主因子法
　回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法[a]
a. 5 回の反復で回転が収束した。

Ⅲ．全国調査の自由記述の分析

アンケートには自己記述欄を設けたが。そこに、「ぜひ伝えたいこと」「要望」「意見」「その他」の４つのスペースを確保した、それぞれの箇所に書かれた内容について、以下分析する。

１．「ぜひ伝えたいこと」「要望」の分析

ここでは、まず、全国調査の自由記述部分の「ぜひ伝えたいこと」と「要望」の 2 項目について分析する。

(1)「ぜひ伝えたいこと」について

「ぜひ伝えたいこと」についての結果は、図 1 の通りである。

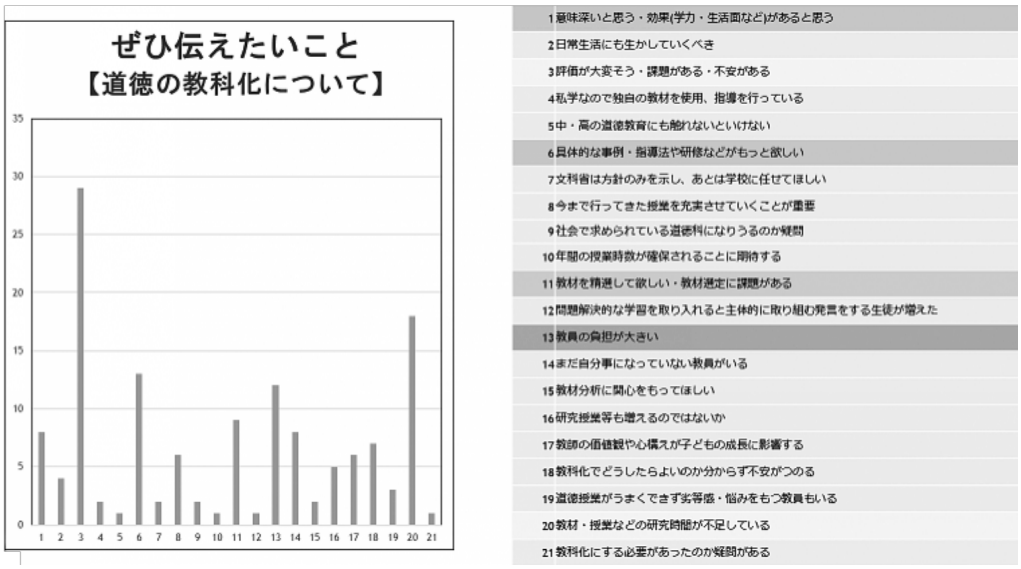

図 1　ぜひ伝えたいこと

数値の高かったものについて、検討してみたい。まず、3 の評価に関することが一番多かった。不安がある、大変そうであるという記述が多い。これは、全面実施を控えこれまでなかった評価に対する不安が伺われる。20　の教材・授業などの研究時間が不足しているは、実際に現在困っていることであと言える。教員の一日は実に多忙であり、じっくり教材研究に取り組む時間がない。そのことが、「特別の教科 道徳」の発足にあたって十分研究できていないという不安を強めているように思える。6 の具体的な事例がほしいというのは、望まれる授業や評価のイメージがつかめていないことが原因と考えられる。評価については、これまでの「道徳の時間」では評価をしてこなかった。新たに評価することへの不安、特に評価する手順が見えていないのが教員にとって不安なのであると考えられる。

13 の教員の負担が大きいと感じるは、現実的に何をすればよいかがよく掴めていない

ことも大きな要因であると考えられる。授業に関しての負担はこれまでとあまり変わらないと考えられる。記述の評価に関しても、今までもワークシートやノートへのコメントは行っており、経験を積めばそんなに負担にならないように思える。教師の観察だけではなく、児童・生徒の自己評価も加味しながら評価文を考えることもできる。実質的な作業内容より、未知のことに対する不安が大きいように推察される。

11 では、教材の選定に関しての意見がみられる。これまでの道徳の時間おいては、資料の選定は、年間指導計画の作成などにおいて担任の意見が反映されていたといえる。しかし、教科書が使用されることにより教材の選定に関して担任の意見が反映されなくなるのではないかという不安が大きいのではないかと考えられる。

1 は「特別の教科　道徳」に対する意味や効果についての記述である。ここからは、「特別の教科 道徳」への期待感が伺える。教科として道徳が発足することに対しての期待感が伝わってくる。道徳性の育成だけでなく、学力面、生活面の両方での効果への期待が伺える。反面、14 のまだ自分ごととして捉えていない教員が多数いることも事実である。調査を実施した段階においては、全面実施される前であるため、自分ごととしての実感が少なかったのであろうと推察される。

次に、「ぜひ伝えたいこと」の中の「その他」で顕著なものについて考察してみる。

6 の数値が非常に高いのは、各学校が「特別の教科 道徳」を開始するにあたり何らかの準備を始めたことが伺える。好意的に捉えているか、否定的に捉えているかは十分読み取れないが、準備をしなければいけないという意識は明らかに高まったといえる。特に、研修会等これまでよりも多く行われていると推察される。

9 の道徳の専門機関が必要、5 の指導者サイドの見解が一致しない、12 の価値の押し付けにならないか等から考えられるのは、全体的に不安を抱いている学校や教員が多いことが伺える。文科省、県教委、市教委とも言っていることは同じであるはずだが、受け止める側には違って伝わっているのだろうか。

道徳の専門教員を確保するという考え方もあるが、学級経営を基盤にするとなかなか難しい。中学校では、ローテーションで行う実践もみられるようになってきた。

また、価値の押し付けにならないか心配だという意見もある。教科書の使用からの意識とも考えられるが、「特別な教科 道徳」の趣旨では押しつけにならないようにと繰り返し述べられているものの、不安を抱えている教師が多いのは明らかである。押し付け的な道徳の授業にならないように、一層の研修が求められる。

(2)「要望」について

次に「要望」についての記述について考察をしてみる。図 3 が結果である。まず、8 からわかるように、要望においても評価の在り方が教員の一番の関心事であることが伺える。具体的にどのようにすればよいのか非常に不安であることが伺える。多くの研修会等でワークショップや具体的な研修が行われており、実際にスタートし評価を一度経験してみると不安はかなり減少するのではないだろうか。

「道徳の教科化」について不安が多く出されており、このことに関しても追跡調査をしていく必要がある。

2 の研修会の増加、4 の教員の負担減、11 の道徳の専門教師、教員の研修や勤務に関わる内容についての意見は、道徳の教科化によって、今も忙しいのに、これ以上の負担増はなしにしてほしいという切実なる訴えであると捉えられる。教員の働き方改革が進められているが、学校教育全体の改善が求められる。

新しいことに取り組むのでどうしても負担がかかるのはいたし方がないにしても、できるだけ負担を少なくする方策をみんなで考えたい。そのためにも、よき実践例を多く紹介しあえるとよい。

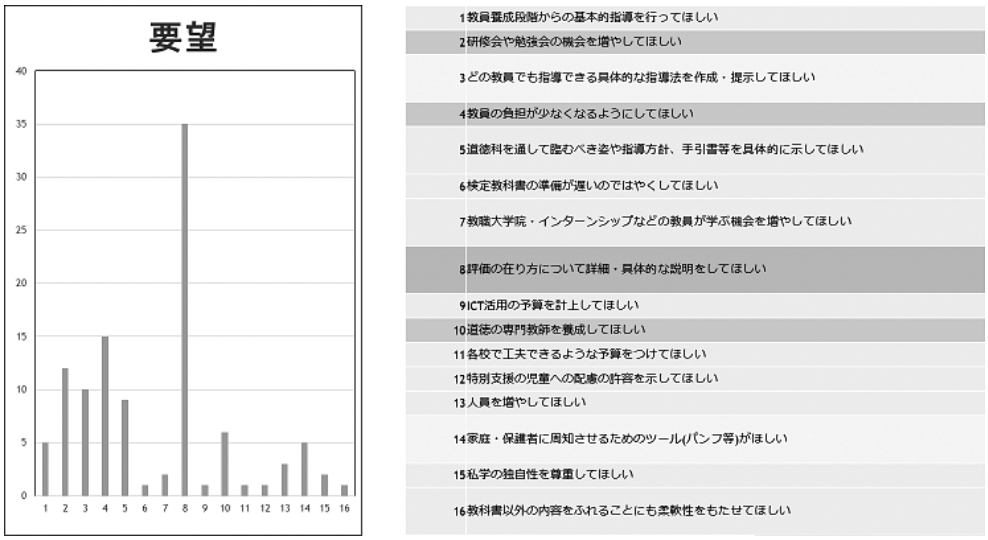

図 3　要望

3 の具体的な指導法の作成、14 の保護者用パンレット等啓発に関する要望は、現在、具体的な指導例が多く発表されている。今後も積極的に提供されると思われる。文科省や県教委・市教委等から多くの参考例が出されるが、それがかえって指導の弾力化を硬直させる場合もある。学校現場の柔軟な対応が求められる。保護者への啓発は、文科省や県教委、市教委等の資料を参考に、各学校において積極的、継続的に行っていく必要がある。また、道徳の授業参観を行っている学校も多くある。これらを活用して保護者や地域の理解を得ていくことが必要になろう。

「ぜひ伝えたいこと」「要望」についての自由記述について分析・考察してきたが、全体として評価に対しての不安が非常に多いことが伺える。自由記述だとどうしても主観的な記述が多くなるが、どのように客観性を担保するのか、保護者に受け入れられるのか、といったことも不安の背景にあるように思える。アンケート実施時点では、まだ、全面実施されていなかったが、現在、小学校では全面実施し、中学校においても平成 31 年度より全面実施となる。今後これらの動向を継続的に調査していく必要がある。

二つ目には、道徳の教科化に期待をしている反面、教員への負担が増えるのではないかといった「伝えたいこと」や「要望」のアンケート記述の中で多くみられた。「道徳の時間」が特設されて以来の道徳教育に関する大きな改革である。各小・中学校がスムーズに

実施できるように応援したい。教員・児童生徒・保護者等の不安をできるだけ取り除き、今回の改善の目的が果たされる過程をしっかり把握して具体的な応援方策を提案していきたいと考える。学校現場では具体的な実践を通して、PDCA サイクルに則り、さらに評価・改善を図っていくことが大切である。

また、その都度生じる問題点については、状況を的確に把握し改善の見通しをもち、臨機応変に対応し共有していく必要がある。

このアンケート結果からは、「特別の教科 道徳」実施によって、何がどのように変わるのかが十分理解できていないことによる不安が多くみられる。今後の実践で児童・生 徒、教師もそして保護者も楽しく取り組める「特別の教科 道徳」を期待し、調査を継続していく予定である。

（矢作信行）

２．「意見」「その他」の分析

1　「意見」について

図４「意見」について

上記の図は、「意見」に寄せられた内容である。これを見ると、第一位に３の「「特別の教科 道徳」における評価に課題がある・疑問点がある」という意見が 32%と圧倒的に多い。この理由は、本調査が「特別の教科 道徳」の全面実施前の 3 月に行われているため、教員の「特別の教科 道徳」の評価に対するイメージや理解が、まだ十分になされていないためと思われる。事実、本調査の「要望」においても「評価の在り方について詳細・具体的な説明をしてほしい」という意見が 35%と圧倒的に多く、これに次いで「研修会や勉強家の機会を増やしてほしい」・「どの教員でもしどうできる具体的な指導法を作成・提示してほしい」等の意見もあり、教員の「特別の教科 道徳」の評価に対する不安感や疑念が大きいことが伺える。

第二位に 11 の「教員の仕事量をもっと考慮してほしい」という意見が 11%ある。この点も「要望」の第二位に「教員の負担が少なくなるようにしてほしい」という意見が 15%あり、道徳が教科化になることで、教員が自分の仕事がこれまで以上に増えるのではないかと懸念していることが伺える。

この負担感の要因としては、大きく次の 2 点が考えられる。その一つは、「意見」の中に「教育課程・内容のスクラップ＆ビルドのバランスを考えてほしい」という意見が 3%あることから、様々な教育課題に対する教育、例えば「キャリア教育」・「消費者教育」・「食教育」・「健康教育」等が、学校教育の中に盛り込まれ、授業時数が増えているという実態に因る教員の負担感である。

また、二つ目には、こうした学校の現状に加えて、これまでの「道徳の時間」とは授業時間数は年間 35 時間と変わらないが、教科となったことで、今後は「原則的に教科書を使用して、年間指導計画に基づいてきちんと授業をしなければならない」点や、評価を行うために、「指導と評価の一体化を図る必要があり、児童生徒の学習状況を毎時間記録し蓄積していく必要がある」といった点に因る教員の負担感である。事実、同じ「意見」の中に「文科省で専門家を集めて使える教科書を作成する・詳細な説明をする等を行い、あまりにも現場任せにしないで欲しい」という意見が 5%ある。

しかし、この点については、同「意見」の中に「道徳がなによりも大切な教科だと思う」という意見や、「道徳教育についてしっかりと学んでいきたい」という意見があることから、これまでの「道徳の時間」における教員の意識と取組の差が影響していると推察され、あまり意図して取り組んでこなかった教員にとっては、より大きな負担感となっていることが推察される。

第三位に、8 の「道徳の教材に課題があると思う・疑問がある」という意見が 7%ある。おそらくこれは、新学習指導要領や道徳の教科書が、学校現場に配布される前の移行期間に、道徳の教科化に向けて「考え・議論する道徳」を念頭に、様々な授業改善に取り組んだ学校の教員から出てきた意見ではないかと思われる。なぜならば、当初は「考え・議論する道徳」を意識するあまり、ディベート型の道徳の授業や二項対立型の道徳の授業が多数見られ、その実践から教材や授業づくりの在り方に疑問や混乱を感じる傾向があるのではないかとも考えられるからである。

つまり、この意見の背景には、新学習指導要領の主旨に基づく「特別の教科 道徳」の授業とはどうあるべきかが、新たに問い直されたとともに、果たして従来の教材がその主旨にマッチするのかといった疑問が生じたためではないかと推察される。

上記を踏まえ、今後は、以下の点において具体的な改善を図っていく必要があると受け止める。

1）教員研修や勉強会に参加できる機会を増やし、新学習指導要領の主旨や新たな学力観や、それに基づく「特別の教科 道徳」についての理解を深めるようにする。

2）1）を基に「特別の教科 道徳」における授業づくり、及び道徳教育と道徳の授業との効果的連携を図ったカリキュラム・マネジメントについて、実践を通しながら改善を図っていく必要がある。

2　「その他」について

次に「その他の自由記述」について考察する。次の図は、「意見」に寄せられた内容である。

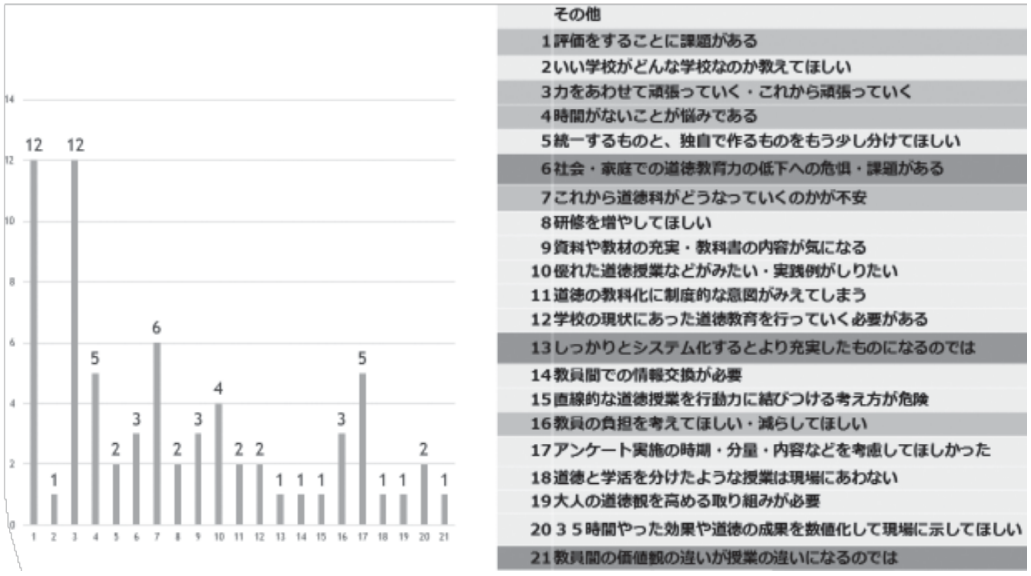

図５　「その他」について

第一位に、１の「評価をすることに課題がある」という意見が 12%ある。おそらくこれは、「児童・生徒の道徳性を教員が一体どう評価するのか」・「道徳性を評価することなどできない」といった素朴な疑問に基づく意見と推察できる。教科化に鑑み当初、新聞やテレビ等でもこうした視点から「「特別の教科 道徳」における評価」＝「道徳性全体に対する評価」と受け止められ、懸念される面もあった。

しかし、「特別の教科 道徳」で行う評価は、道徳性全体に対する評価ではなく、道徳の授業における児童・生徒の具体的な取組状況についての評価であり、それを大きく次の3つの「評価の視点」即ち、①「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」・②「道徳的価値の理解を自分自身と関わりの中で深めているか」・③「子供の成長が感じられたり、認められたりしているか」を基にしながら短期的・長期的・複合的に見取っていくものであるとされている。

この 4 月より、この趣旨に基づいて各小学校においては「特別の教科 道徳」の評価が記述式で行われた。筆者の勤務する学校では、大方肯定的な意見を得ることができた。今後、評価の仕方や見取り方については、さらなる研究を要するが、少なくともその視点はぶれないようにする必要がある。

第二位に、３の「力を合わせて頑張っていく」という意見が第一位と同様、12%ある。この意図については、その他の記述の中に「優れた道徳授業を見たい・実践例が知りたい」・「研修を増やしてほしい」・「大人の道徳観を高める取り組みが必要」といった前向きな意見もあることから、新たな視点に基づく道徳教育及び道徳の授業づくりに意欲的に取り組

んでいこうとする姿も認められる。

しかし、その一方で、1%、2%の多様な意見が寄せられており、「直線的な道徳授業を行動力に結びつける考え方が危険」「・「道徳の教科化に制度的な意図が見えてしまう」・「道徳と学活を分けたような授業は現場に合わない」等の意見も見られ、道徳の授業に対する様々な教員の捉え方があることが見て取れる。

その他の意見として、「社会・家庭での道徳教育力の低下への危惧・課題がある」とする意見や「これから「特別の教科 道徳」がどうなっていくのかが不安」といった意見もある。これについては、現在、児童・生徒を取り巻く社会や家庭環境が急速に変化し、様々な教育課題が次々と出てきている現状を踏まえ、今後、児童・生徒にどのような道徳性を培っていくことが必要なのか、また、そのためにどのような取組が有効なのか等について、各教員が、道徳性の発達や育成方法等に広く、そして深く学び、実態と理論との融合を図ったさらなる研究を進めていく必要があるといえよう。

（齋藤道子）

Ⅳ．テキストマイニングを用いた全国調査アンケートの自由記述の分析

ここでは、当該アンケートの自由記述について、文書や文字列を統計学的に計量化する技法として注目されているテキストマイニングを用いて分析する。テキストマイニングは、アンケートの自由記述、顧客サービスセンターにおける問い合わせ内容およびクチコミ評価の分析などで広く利用されており、従来の主観的な判断ではなく、より客観性の高い分析結果をもたらすと考えられている。

この技法は、統計学・情報処理（自然言語処理[(1)]）技術を応用して文書（テキスト）を単語（名詞、動詞、形容詞など）に分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析し、文書に含まれる有益な情報を計量的に抽出するものである。[(1)] 最近、経済学、経営学、社会学、看護学分野などを中心に教育学分野、特に大学教育の授業改善に関わる大規模な調査分析（アンケート調査）に適用されている。[(2)]

近年、多くの研究者・技術者に支持され、しかもフリーソフトとして信頼性の高いものに、樋口耕一氏によって 2001 年 10 月に公開された KHCoder[(3)] および石田基広氏の RMeCab[(4)] などがある。今回は、多くの OS に対応し最も適用実績があり、使いやすいとされる KHCoder を用いて、主に 4 種類の基本的な分析を行う。それは、①抽出語リスト、②本文から検索して「語」の使われ方を確認する KWIC コンコーダンス、③抽出語間および外部変数との関連性と強さを表現できる共起ネットワーク、そして④関連語検索である。[(5)] 「共起」とは、自然言語処理の分野において、任意の文章で、ある語とある語が同時に出現することであり、いわゆる語や言葉どうしが何らかの関連を有していると考えられている。なお、KHCoder の教育学分野を含む各分野での活用論文・報告事例などは、当該 URL[(6)] に詳細な説明がなされている。

(1) 抽出語リスト（上位 10 語、降順）から読み取れること ※網掛け部分は共通抽出語どのような語が抽出されているのか、出現回数は何回かを確認する。次に、抽出された 上

位 10 語がアンケートの各質問項目でどのような意味をもつのかについて推察する。(一例として「1. ぜひ伝えたいこと」の抽出語リストを図 6 に示す)。

1. ぜひ伝えたいこと

「道徳」「授業」「思う」「教育」「教科」「評価」「考える」「教師」「学校」「時間」

2. 要望

「道徳」「評価」「授業」「思う」「具体」「指導」「例」「示す」「研修」「時間」

3. 意見

「道徳」「評価」「思う」「教育」「教科」「授業」「考える」「現場」「教員」「学校」

4. その他

「道徳」「思う」「授業」「教育」「評価」「学校」「教科」「考える」「子ども」「先生」

「1. ぜひ伝えたいこと」における上位 10 語と他の質問項目の上位 10 語とを比較すると、共通抽出語が「2. 要望」では 5 語、「3. 意見」では 8 語、「4. その他」でも 8 語存在する。換言するならば、「2. 要望」独自に存在する抽出語は 5 語、「3. 意見」では 2 語、「4. その他」では 2 語である。「質問項目ごとになぜ共通(独自)の語か存在するのだろうか ?」について KWIC コンコーダンスで検索をすると、「1. ぜひ伝えたいこと」に属する文には、「道徳」に関わって小学校で平成 30 年度、中学校で平成 31 年度から本格実施の『特別の教科 道徳』への現場の思いや考えが網羅されていると考えられる。

例えば「教科化されることで授業方法等について真剣に考え、研究授業等も増えることで、授業の質が高まっていく」という授業改善の契機となること、「授業と子どもの実態がかけ離れない工夫」という子ども理解を踏まえた授業展開の必要性、「体験活動を活かし授業で自省することでさらに道徳的思考を深める」という道徳教育と「特別の教科 道

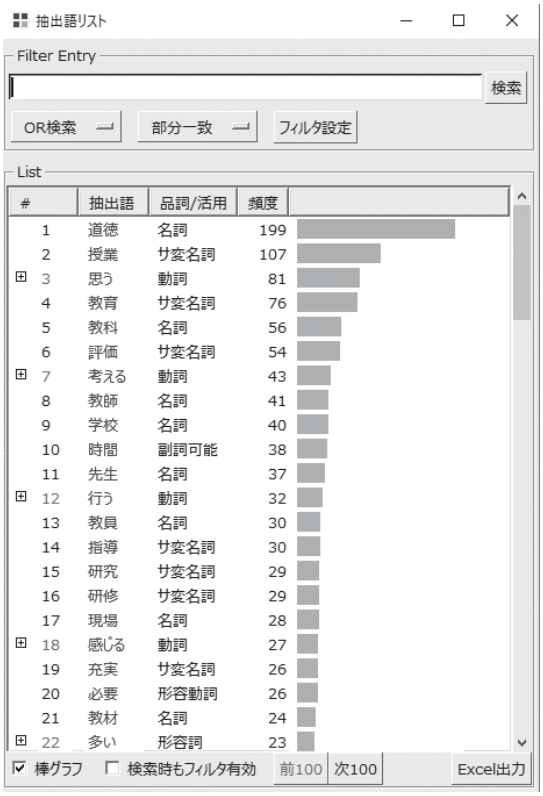

図 6　抽出語リスト（1．ぜひ伝えたいこと）

徳」の関わりの中で展開される授業のあり方等、「こんな授業でいいよ、まずやってみましょう、みたいな授業例を示してほしい」「文科省の HP にあるような授業をもっと見られるとイメージがわく」（原文のまま）という授業づくりに積極的に取り組もうとする思いと戸惑いの混在が読み取れる。これは、「2. 要望」の分析結果とも重複している。

「2. 要望」では「具体」「指導」「例」「示す」「研修」が独自の抽出語であり、文字通り現場における要望を表す語として抽出され、KWIC コンコーダンスで検索すると、それぞれの語が属する文には、変化への不安・推進のための支援への要望と、評価等新しい取り組みによる負担感等、現場の強い思いが表現されているものと考えられる。

以下、紙面の都合上、分析の中心は、「1. ぜひ伝えたいこと」に関わる記述内容に留めるが、その検討を進める中で、他の内容項目にも若干触れることとする。

(2) 共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れること

『1. ぜひ伝えたいこと』のデータにおいて全体像を把握するため、共起ネットワーク分析を活用した。一般に、共起ネットワーク図では、抽出語数・抽出語間の関連性の強さを円弧の大小、ネットワーク線の太さで可視化できる。本例では、図 7 に示すように、概ね 6 種類の内容項目に関わる回答内容で構成されていることがわかる。それは、①「道徳教育、「特別の教科 道徳」推進についての概観」②「特別の教科道徳の評価」③「特別の教科道徳の推進による負担感」④「特別の教科道徳、その推進のための研修」⑤特別の教科道徳、その充実のための教材研究」⑥中学校での全面実施に向けて」である。この共起ネットワークで、

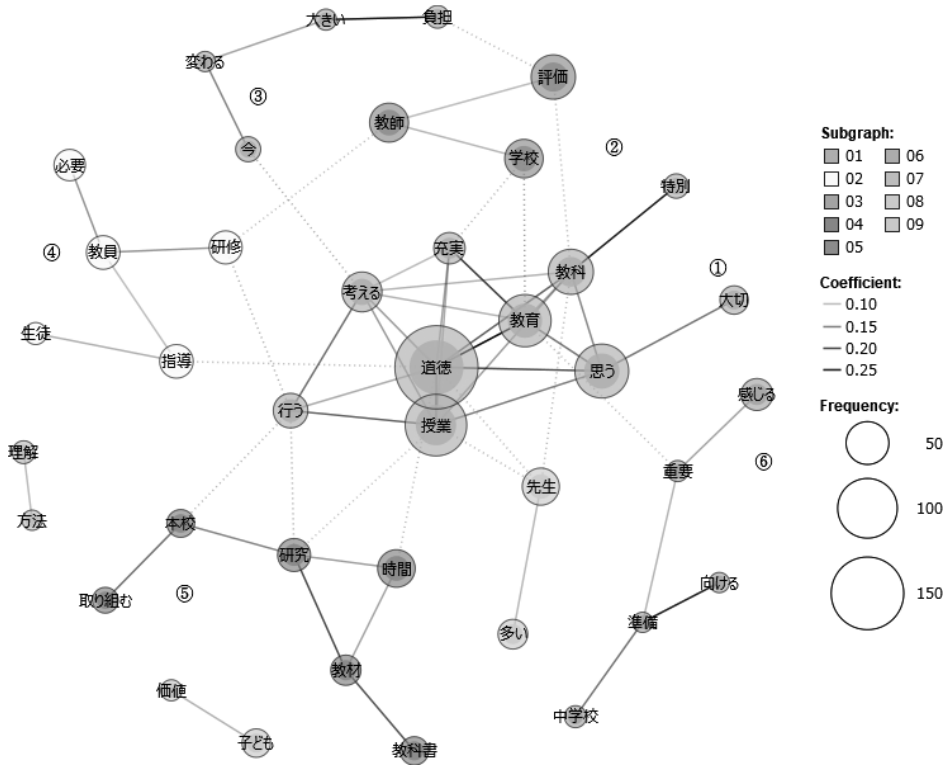

図 7　共起ネットワーク（1. ぜひ伝えたいこと）

「道徳」は、①「・・・概観」を中心に、その周りに具体的内容として②「・・・評価」③「・・・負担感」④「・・・研修」⑤「・・・教材研究」⑥「中学校での全面実施・・・」が位置付けられている。

次に、①「道徳教育、「特別の教科　道徳」推進についての概観」において中心となる「道徳」に一番強く直結している「授業」について関連語検索を行い回答内容の把握を試みた。その結果、「授業」に関わって、主に 5 種類の回答内容が見られた。（図 8）

ア．授業の充実に向けて

体験的な活動と道徳との関わり、多面的多角的で深い学びのあり方の検討。さらに、教科書の活用は当然ながら体験的な活動との関わりも取り入れながら、パターン化されない多様な授業の展開を工夫する必要性。

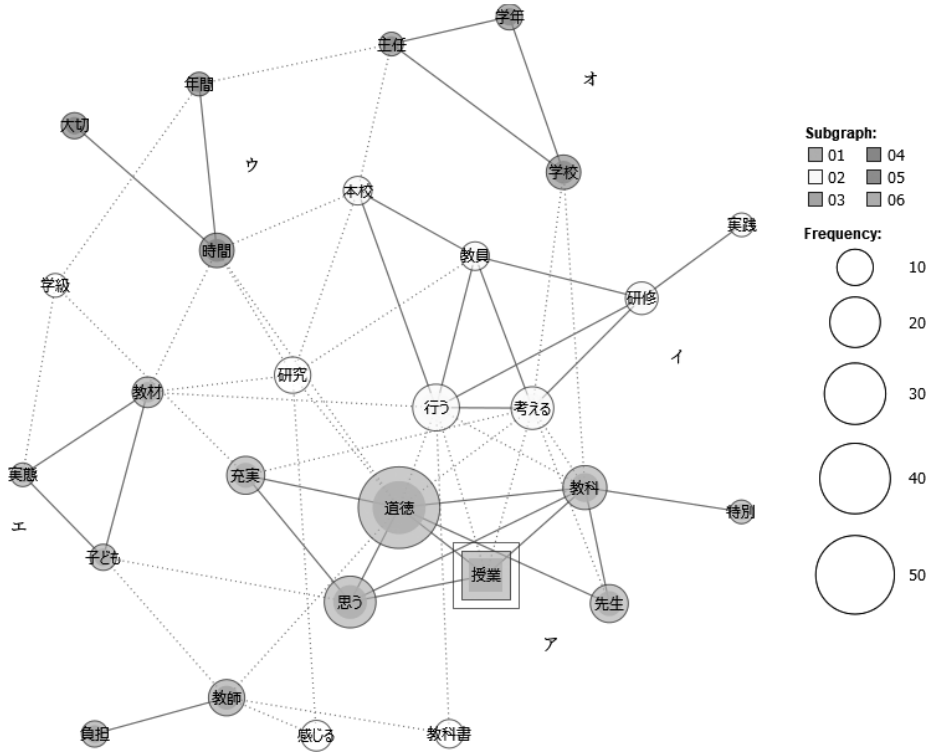

図 8 共起ネットワーク（1．ぜひ伝えたいこと・関連語検索「授業」）

イ．研修のあり方

「校内研修を道徳で行うが授業はもちろん評価と記述（通知表）が中心」と研修内容に関すること、「全教科の中で道徳教育を行うべきそのためにも道徳教育の教科化は意味あるもの」と道徳教育の中での授業の位置づけ（カリキュラム・マネジメント）に関すること、「ローテーション道徳の推進授業研究校での発表、何より大切なことは授業をどんどんやっていきたいという教員を育てていくことが道徳教育推進の課題」とあり、大学における道徳授業ができる教員養成にまで言及する記述があった。

ウ．教師一人一人が学ぶ機会と時間の確保

ベテランも若い先生も研修に行ったり、実際の授業を見たりして新しい道徳の授業のあり方を学びたい、学ばせたいと考えている。そのための時間が必要であり、研修会でもよい授業を見るだけではなく、参加型の授業づくりができるとよいという要望。

エ．教材研究や授業展開の工夫

授業を進めるにあたって、子どもの実態に応じた教材づくり・教材さがしや展開の工夫について時間を確保して研究したいという願い。

オ．組織としての取組み

学校、学年でチームとしての取り組みを進めている学校、進めようとしている学校がある。「週に 1 度道徳部会で情報交換」と組織で取り組み、年間を通じて取り組むことによって変化するという前向きな取り組み。

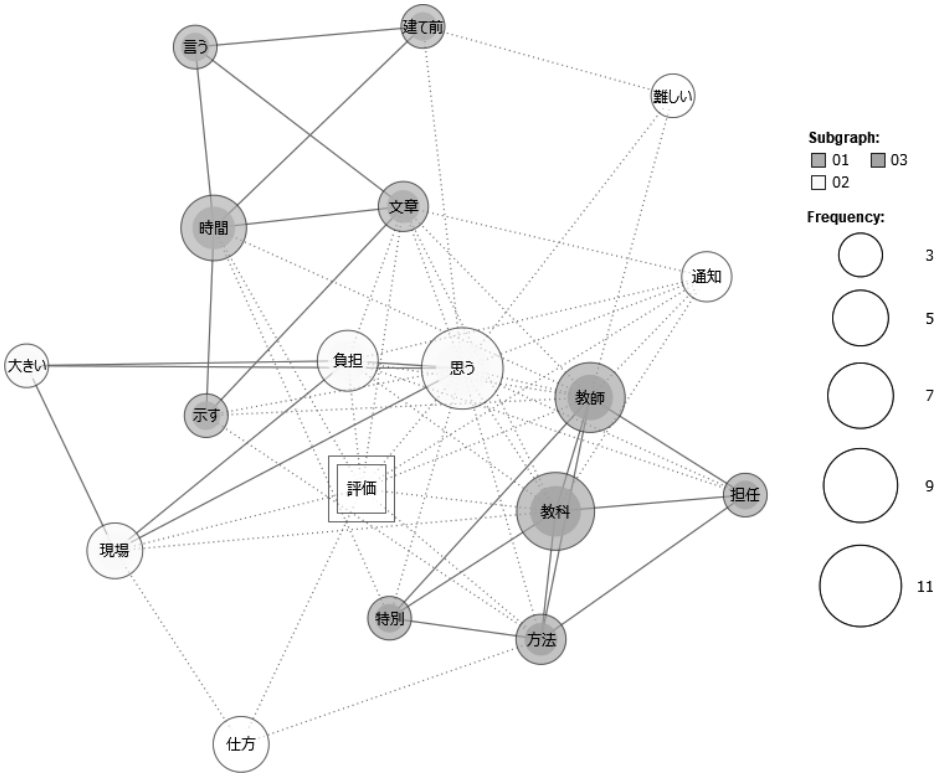

図 9　共起ネットワーク（ 1．ぜひ伝えたいこと・関連語検索「評価」）

次に、①と同様に当該共起ネットワークにおいて②「特別の教科道徳の評価」について考察する。（図 7 参照）

質問項目の抽出語リストを見ると、「評価」は、どの項目においても多く抽出される語である。そこで「評価」について関連語検索すると、図 9　に示すように、「教師」、「担任」は、特別の「教科」と強く共起し、「評価」は、（特別の）教科と共起しているものの前述の語ほどでもない。「現場」は、若干、共起関係が見られるが、「授業」とは、共起関係が見られない。本来、（特別の）教科道徳の授業あってこその評価であり、その評価を授業にフィードバックするのが、評価の基本的な在り方である。したがって、これは、今の状況では、「授業」に対して現場の意識が十分とはいえず、本来の評価には至っていないと思われる。一方、「評価」について関連語検索すると、やはり「授業」とは共起関係が見られず、「思う」と共起する。そこで、「思う」を関連語検索すると、例えば下記のような文が抽出された。（図は省略）

a）評価に対する負担感

「不安に思っていることは、特別の教科道徳の評価をどうするかいうこと」「教科化されたことで評価が必要となり現場はますます多忙化」「道徳を教科化し授業の充実を図ることは大切なこと、それにともなって通知表に別枠で文章による評価をすることは、教師の負担になる」

b）保護者への説明

「家庭への啓発の手立てを考えていかないといけない」

c）子どもへの懸念

「評価を良くすることだけを思って、感想を書くようなことにならないように、思ったこと、考えたことがどのように行動にうつせたか、またうつしたか、ふりかえりを毎時間行う」「建て前でもそう考えられれば、いい、という意見も聞くのです、実行、実践できなければ、意味がないと思うのですが…評価は難しいな」

d）評価のあり方試行錯誤

「経験が少ない教師が分かる道徳の手引や評価の方法を示したものをまとめていただけると 31 年度からも安心してスタートできる」「評価方法などばかり研修会で話題に出ますが、生徒を目の前にしている学級担任などの教師が年間 35 時間、試行錯誤しているのは道徳の効果的な指導方法」「あまり事例をだすと事例とは言え、制約になってしまう」「研修を重ねて少しずつ積み上げていくことが大切」「評価のための道徳教育に なってはならない」

(3) 共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）について

「(2) 共起ネットワーク（から読み取れること」においては、『1. ぜひ伝えたいこと』のデータにおける全体像を把握するため、抽出語間の共起ネットワーク分析を用いた。次に、共起ネットワークによる分析において、外部変数の活用として第一ステップでは「サンプル No.1、回答者の立場、地域など)」を変数とする分析を行うことができる。本節では、参考までに外部変数として「回答者の立場」のみを例示する。それは、『1. ぜひ伝えたいこと』において、道徳に関する抽出語に、回答者の立場がどのように関連しているのか、換言すると、回答者の立場（1 校長 2 副校長（教頭） 3 道徳教育推進教師（道徳主任） 4 教務主任、研究主任 5 それら以外）による道徳に関する意識の違いが抽出語にどのように反映されるのかについて知りたいためである。

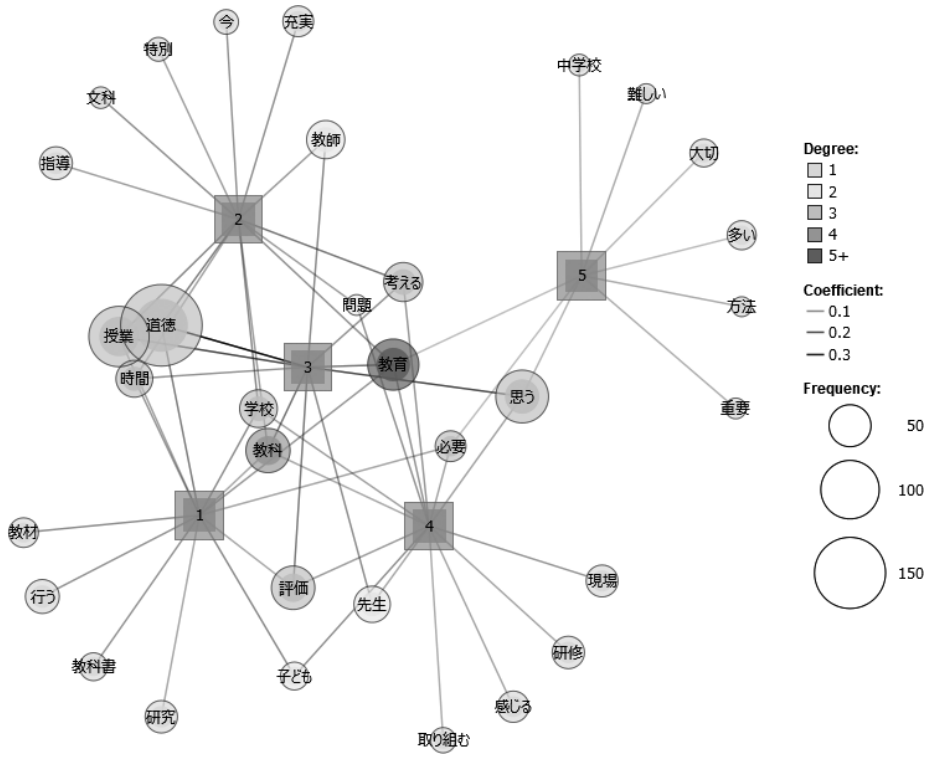

図 10　共起ネットワーク（1．ぜひ伝えたいこと）「外部変数：回答者の立場」

本分析例（図 10）において、回答者の立場 1、2、3 は、共起関係に類似性が見られ、立場 4 と 5 とは異なっている。当然のことではあるが、道徳教育推進教員（道徳主任）は「道徳」との共起関係をはじめ、「授業」「評価」等、どの抽出語とも共起関係が強く道徳教育推進の役割を果たすべく学校組織の中心に位置して取り組んでいることが分かる。

(4)　まとめ

本論では、当該アンケート調査の自由記述文について、（抽出語リストと共起ネット ワーク）を用いてテキストマイニングの分析結果と考察の一部を提示した。上記の考察 は、前章までのクロス集計等から得られた自由記述の分析結果と大きく異なるものではない。今後は、さらに、テキストマイニングによる分析項目を増やし、より客観的な分析を試みたいと考えている。

（文責　小山久子）

（注）

(1)　自然言語処理やテキストマイニングについては、例えば、次の文献・インターネットホーム

ページ（URL）を参照。

・「KHCoder: 計量テキスト分析・テキストマイニングのためのフリーソフトウェア」（URL）http://khcoder.net/、2019 年 3 月 1 日取得。

・樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―』ナカニシア出版、pp.1-16、31-100、101-202、217-234。

・樋口耕一（2015）「フリーソフトウェア［KHCoder］による計量テキスト分析：手軽なマウス操作による分析からプラグイン作成まで」『情報処理学会研究報』Vol.2015-CH-107No.9、日本情報処理学会、pp.1-2。

・牛澤賢二（2018）『やってみようテキストマイニング自由回答アンケートの分析に挑戦！』朝倉書店、pp.15-35。

・石田基広（2017）『R によるテキストマイニング入門』森北出版，pp.72-124。

・平井明代（2018）『教育・心理・言語研究のためのデータ分析　研究の幅を広げる統計手法（第 10 章テキストマイニング）』東京書籍。

(2) 授業アンケートや道徳教育関連などの研究におけるテキストマイニングの活用状況については、例えば、次の文献を参照。

・小山久子（2019）「資格科目［道徳指導法］における履修者の授業感想文の変化と授業改善について－テキストマイニングによる分析と考察－」『芸術と教育』第 3 号、大阪芸術大学。（研究ノートとして掲載可）

・斉藤想能美（2018）「主体的・対話的で深い学びを目指した道徳科の実践」『鳴門教育大学大学院学校教育研究科紀要』第 32 号、池田誠喜、鳴門教育大学、pp.61-69。

・森健一郎（2015）「道徳の教科化に向けての論点整理－中央教育審議会道徳教育専門部会［審議のまとめ（案）］に係る意見募集の結果（概要）から－」『北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要』第 5 号、北海道教育大学、pp.85-92。

・星裕（2017）「道徳の授業に対する学生の意識の分析―［道徳の指導法］の実施に向けた課題の検討―」『北海道教育大学釧路校研究紀要』第 49 号、福岡真理子・梅本宏之・越川茂樹、北海道教育大学、pp.53-63。

(3) KHCoder については、 注（1） の KHCoder の URL（2019 年 3 月 1 日取得 ）、 樋口耕一（2014）、樋口耕一（2015）、牛澤賢二（2018）、平井明代（2018）の文献を参照。

(4) RMeCab については、注（1）の石田基広（2017）の文献を参照。

(5) 共起ネットワーク・KWIC コンコーダンスの活用については、注（1）の KHCoder の URL（2019 年 3 月 1 日取得）、樋口耕一（2014）、樋口耕一（2015）、牛澤賢二（2018）、牛澤賢二（2018）、平井明代（2018）の文献を参照

(6) KHCoder のさまざまな分野への適用については、注（1）の KHCoder の URL（2019 年 3 月 1 日取得）を参照。

※　本研究は、科研研究（課題番号 17H02706）の成果の一部である。

学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（２）

―2018 年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―

Research on Actuality of Correspondence to Moral Education Reform in Schools and Teacher's Consciousness (2): Focusing on Statistical Analysis and Free Description Analysis in Surveys for Schools across Japan

押谷由夫 *・矢作信行 **・齋藤道子 **
木崎ちのぶ **・谷山優子 **
小山久子 ***・醍醐身奈 ****

OSHITANI,Yoshio, YAHAGI,Nobuyuki, SAITO,Michiko
KIZAKI,Chinobu, TANIYAMA,Yuko
KOYAMA,Hisako, & DAIGO,Mina

目次

研究の動機
Ⅰ．本研究の目的と方法
Ⅱ．調査結果の統計的分析
Ⅲ．全国調査の自由記述の分析
Ⅳ．テキストマイニングを用いた全国調査自由記述の分析
注

*　武庫川女子大学教育研究所・副所長、教授
** 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程
*** 大阪芸術大学・特任教授
****目白大学・専任講師

研究の動機

文部科学省は、新教育課程に先駆け、道徳教育の抜本的改善・充実に取り組んでいる。その中核に「特別の教科 道徳」の設置があり、小学校では 2018 年度から、中学校では 2019 年度から全面実施されている。学校現場では、その対応に様々に取り組んでいるが、このような道徳教育改革にどのような意識をもっているのだろうか。行政的取組みは、学校現場に強制されるという意識をもたれがちである。どのような行政的取組みでも、学校教育をより充実させるためのものであり、そのことにかかわって慎重に検討して決定される。しかし、どれだけ慎重に検討されたものであっても、それを実行する側の捉え方が、やらされるといった受動的認識であれば、効果は期待できないし、誤って理解していたのでは、逆効果の実践に陥ってしまうことにもなりかねない。

そこで、新しい道徳教育への移行期にあるこの時期に、学校現場の教師の意見や具体的取組について調査し、教師がその意義を理解し、各学校が主体的に取り組み、意図される効果を上げられるようにするための対策を、積極的に探究することが求められる。

Ⅰ．本研究の目的と方法

１．本研究の目的

本研究チームでは、小学校、中学校で「特別の教科 道徳」の設置が決定し、小学校で全面実施に入る前の 2018 年３月時点において、学校現場の状況を把握すべく、第１回の全国調査を行い、学校現場の教師の意識と実際の取組み等について分析した[1]。今回は、2019 年３月時点において、調査対象を同じ学校として、どのような取組がなされ、どのような意識の変化や取組の変化が見られるかを明らかにし分析する。そして、その結果を基に、学校現場の教職員がより主体的、意欲的に道徳教育改善・充実に取り組んでいただけるようにするための提案を行うことを目的とする。

なお、第３回目の調査を 2020 年３月に行い、小学校、中学校において「特別の教科 道徳」が全面実施された 2019 年度の実態を明らかにし、第１～３回までの調査を総合的に分析することを計画している。

２．調査の方法

2018 年３月に行った第１回調査においては、調査対象校の選定は『全国学校総覧 2017 年度』（原書房）より、全国 47 都道府県の全部の小学校・中学校から、およそ１割の学校を無作為に抽出し、アンケート用紙を送付するという方法を取った。今年度も、昨年度対象とした学校をそのまま調査対象校とした。

発送学校数は、3,331 校（第１回調査と同様の学校に発送したが５校から宛先不明で

帰ってきた。統廃校の対象になった学校と思われる)。回収学校数は、1,004 校。回収率は、30.1%。回答者の学校種別地域別、回答者の職種別、年齢別の状況は、次の表の通りである。

表1　学校の種類、地域、回答者の職階、年齢

学校の種類

全体	小学校	中学校	小、中一貫校	不明
1004	633	352	18	1
100.0	63.0	35.1	1.8	0.1

学校の地域

全体	北海道・東北	関東	甲信越	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	不明
1004	175	225	62	29	103	154	84	47	125	0
100.0	17.4	22.4	6.2	2.9	10.3	15.3	8.4	4.7	12.5	0.0

回答者の職階

全体	校長	副校長（教頭）	教務主任、研究主任（道徳教育推進教師）	それら以外	不明
1004	104	189	598	85	27	1
100.0	10.4	18.8	59.6	8.5	2.7	0.1

回答者の年齢

全体	29歳以下	30～34歳	35～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61歳以上	不明
1004	56	92	131	132	165	224	182	20	2
100.0	5.6	9.2	13.0	13.1	16.4	22.3	18.1	2.0	0.2

（上段：実数、下段：%）

3．調査の内容

アンケートでは、大きく次のような内容について尋ねている。

1 学校教育全体で取り組む道徳教育について
2「特別の教科 道徳」（中学校は道徳の時間）の年間指導計画について
3 道徳の授業について
4 自分の勤める学校の先生方の道徳教育に対する様子について
5 回答いただいた教師の道徳教育に関する意識について
6　具体的要望について
7 自由記述（道徳教育の充実に関して、ぜひ伝えたいことや、要望、意見などについて）

（小学校のみ）

1 教科書を使うようになって、道徳の授業はしやすくなったか
2 教科書を活用した程度について
3 「特別の教科　道徳」の評価について

（押谷由夫）

Ⅱ．調査結果の統計的分析

アンケートの質問項目にしたがって、その結果について統計的分析を行う。なお、フェースシートを活用したクロス分析や、特定項目の因子分析、2017 年度に行った第 1 回調査との比較分析も適宜行うことにする。

1．各校の道徳教育への対応

（1）道徳教育推進教師の特徴

まず、道徳教育推進教師は、どのような教師が割り当てられているかを見てみたい。「ベテラン」と「中堅」の教師が、全体の 85% を占める。これは、2017 年度も同様であった。地域別では、「北海道・東北」が 92%と高い。「近畿」は若手教師が 19%で、他地域より高い。

表 2

道徳教育推進教師（道徳主任）はどのような先生がなられていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
ベテランの先生	357	248	109	98	50	78	101	47	51	50	38
	36%	39%	31%	43%	38%	45%	36%	36%	33%	38%	31%
中堅の先生	480	298	182	93	65	82	142	62	74	59	71
	49%	47%	52%	41%	50%	47%	50%	47%	48%	45%	57%
若手の先生	143	83	60	37	16	15	40	23	29	22	15
	15%	13%	17%	16%	12%	9%	14%	17%	19%	17%	12%

（2）道徳教育を重視している学校の割合

勤務する学校で道徳教育が「重視されている」、「まあまあ重視されている」と回答した割合は、小学校は 95%、中学校が 84%で、11ポイントの開きがある。小規模校（「200 人以下」）も大規模校（「701 人以上」）もほぼ同じ 9 割前後であるが、小規模校の方がより重視されている。地域別でみると、「中国・四国」が 95%となり、2017 年度の 85%から10ポイント伸びている。

表 3

学校経営において道徳教育が重視されていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
重視されている	372	284	88	94	46	73	107	44	53	51	49
	38%	45%	25%	41%	35%	42%	37%	33%	34%	39%	40%
まあまあ重視されている	521	315	206	113	70	89	151	71	83	73	64
	53%	50%	59%	50%	53%	51%	53%	54%	54%	56%	52%
あまり重視されていない	85	32	53	19	15	12	28	17	18	7	7
	9%	5%	15%	8%	11%	7%	10%	13%	12%	5%	6%
重視されていない	5	0	5	2	1	1	0	0	0	0	4
	1%	0%	1%	1%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	3%

（3）道徳教育を推進させるための組織を作っている学校の割合

道徳教育推進のための組織を作っている学校は、全体で 65%。2017 年度と同様である。大規模校（「701 名以上」）の組織づくりの方が進んでおり、小規模校（「200 人以下」）との差は 21ﾎﾟｲﾝﾄとなっている。小規模校は、学校全体で取組んでいる割合が高いと考えられる。地域別で比較すると、「北海道・東北」や「中国・四国」での組織づくりが低い。小規模校が多いことが原因とも考えられる。

表4

学校全体で道徳教育を推進するための組織を作っていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
前から作っている	564	359	205	102	88	95	182	58	110	58	70
	59%	59%	60%	46%	67%	55%	66%	46%	73%	46%	58%
今年度から作った	59	32	27	14	8	8	20	13	8	9	6
	6%	5%	8%	6%	6%	5%	7%	10%	5%	7%	5%
作っていない	332	220	112	104	35	70	75	54	32	60	45
	35%	36%	33%	47%	27%	41%	27%	43%	21%	47%	37%

2．全体計画について

（1）全体計画に書かれている内容

質問した項目は、今まであまり書かれなかったもので、これからの全体計画に是非入れてほしい項目を挙げている。「入れていない」を見ると、「近隣の学校や幼児教育施設との連携」が 48%、「道徳教育の研修計画」が 36%である。全体計画に書かれていないから行っていないというわけではないと思われるが、これから特に求められるチーム学校やカリキュラム・マネジメントの観点からも、早急に検討し、全体計画に明記し、実施する必要がある。

表5

全体計画に入れている内容

	回答								
	具体的に入れている			基本方針として入れている			入れていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．子どもたち一人一人への心の安定や道徳的対応について	249	161	88	521	323	198	207	143	64
	26%	26%	25%	53%	52%	57%	21%	23%	18%
2．環境の整備について	240	169	71	483	308	175	258	154	104
	25%	27%	20%	49%	49%	50%	26%	24%	30%
3．学級における道徳教育の取り組みについて	443	305	138	436	265	171	105	62	43
	45%	48%	39%	44%	42%	49%	11%	10%	12%
4．近接の学校や幼児教育施設との連携について	162	123	39	346	235	111	475	274	201
	17%	20%	11%	35%	37%	32%	48%	43%	57%
5．道徳教育の研修計画について	274	188	86	357	217	140	349	227	122
	28%	30%	25%	36%	34%	40%	36%	36%	35%

（2）全体計画に書かれている内容の達成度

次に尋ねた項目は、一般的に求められるものであり、ほとんどの学校において全体計画に示されている。そのことが、どの程度達成されているかを尋ねると、「だいたい達成されている」「まあまあ達成されている」に回答した学校が、90 ～ 51%になっており、項目間で開きがある。「あまり達成されていない」「見直しが必要である」と回答した学校が多いのは、「地域との連携による道徳教育」が 44%、「家庭との連携による道徳教育」が40%である。「各教科における道徳教育」も 31%、「総合的な学習の時間における道徳教育」29%になっている。いずれも中学校が高い。これらの項目は、これからの道徳教育の充実においてポイントになることでもあり、内容の明記が求められる。

表6

全体計画に書かれていることがどの程度達成されていると評価できるでしょうか

	回　答														
	だいたい達成されている			まあまあ達成されている			あまり達成されていない			見直しが必要である			全体計画に示していない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．道徳の時間（「特別の教科 道徳」）の指導	442	336	106	438	265	173	59	20	39	28	6	22	15	5	10
	45%	53%	30%	45%	42%	49%	6%	3%	11%	3%	1%	6%	2%	1%	3%
2．各学年の道徳教育	356	263	93	518	325	193	67	29	38	24	4	20	19	12	7
	36%	42%	27%	53%	51%	55%	7%	5%	11%	2%	1%	6%	2%	2%	2%
3．各学級の道徳教育	339	248	91	510	326	184	65	27	38	26	9	17	42	22	20
	35%	39%	26%	52%	52%	53%	7%	4%	11%	3%	1%	5%	4%	4%	6%
4．各教科の特質に応じた道徳教育	127	96	31	526	383	143	253	126	127	52	18	34	26	10	16
	13%	15%	9%	54%	61%	41%	26%	20%	36%	5%	3%	10%	3%	2%	5%
5．特別活動における道徳教育	160	115	45	571	387	184	180	100	80	55	19	36	18	12	6
	16%	18%	13%	58%	61%	52%	18%	16%	23%	6%	3%	10%	2%	2%	2%
6．総合的な学習の時間における道徳教育	124	83	41	547	381	166	230	131	99	59	24	35	23	14	9
	13%	13%	12%	56%	60%	47%	23%	21%	28%	6%	4%	10%	2%	2%	3%
7．日常生活における道徳教育	234	169	65	581	381	200	107	56	51	32	7	25	30	20	10
	24%	27%	19%	59%	60%	57%	11%	9%	15%	3%	1%	7%	3%	3%	3%
8．家庭との連携による道徳教育	106	85	21	443	313	130	302	174	128	84	33	51	48	27	21
	11%	13%	6%	45%	50%	37%	31%	28%	37%	9%	5%	15%	5%	4%	6%
9．地域との連携による道徳教育	98	78	20	379	260	119	328	204	124	111	53	58	68	38	30
	10%	12%	6%	39%	41%	34%	33%	32%	35%	11%	8%	17%	7%	6%	9%
10．重点目標の指導	266	207	59	542	356	186	115	46	69	40	13	27	16	8	8
	27%	33%	17%	55%	57%	53%	12%	7%	20%	4%	2%	8%	2%	1%	2%

（3）家庭や地域連携の効果

家庭や地域との連携について、具体的に取り組んでいることの効果を尋ねると、「家庭への学校だよりの配布」が 97%の学校で行っており、92%の学校で効果的と答えている。学校規模による違いはあまり見られない。地域や家庭との連携に関する取組は、ほとんどの学校が効果的であったと答えている。「保護者や地域の人たちに協力いただく授　業」は、2017 年度の 73%から 87%になり、14ポイント上がっている。道徳授業の地域公開も86%の学校で取り組んでおり、75%の学校で効果的であると答えている。

表7

家庭や地域との連携につい

	回　答																			
	効果的である					あまり効果があるとは思えない					見直しが必要である					行っていない				
	全体	200人以下	201人～500人	501人～700人	701人以上	全体	200人以下	201人～500人	501人～700人	701人以上	全体	200人以下	201人～500人	501人～700人	701人以上	全体	200人以下	201人～500人	501人～700人	701人以上
1.家庭への学校だよりの配布	917	213	400	178	126	45	8	25	9	3	7	1	4	2	0	28	5	15	5	3
	92%	94%	90%	92%	96%	5%	4%	6%	5%	2%	1%	0%	1%	1%	0%	3%	2%	3%	3%	2%
2.地域への学校だよりの配布	796	193	346	151	106	80	13	38	19	10	9	3	3	3	0	113	19	56	21	17
	80%	85%	78%	78%	80%	8%	6%	9%	10%	8%	1%	1%	1%	2%	0%	11%	8%	13%	11%	13%
3.地域の人たちも参加いただく催し	848	203	369	157	119	64	17	26	17	4	10	1	5	3	1	75	7	42	17	9
	85%	89%	84%	81%	90%	6%	8%	6%	9%	3%	1%	0%	1%	2%	1%	8%	3%	10%	9%	7%
4.保護者や地域の人たちに協力いただく授業	868	203	385	160	120	44	10	17	12	5	12	2	6	3	1	74	13	35	19	7
	87%	89%	87%	83%	90%	4%	4%	4%	6%	4%	1%	1%	1%	2%	1%	7%	6%	8%	10%	5%
5.保護者や地域の人たちと一緒に話し合える	795	192	356	144	103	72	11	32	19	10	17	1	5	8	3	114	24	51	22	17
	80%	84%	80%	75%	77%	7%	5%	7%	10%	8%	2%	0%	1%	4%	2%	11%	11%	12%	11%	13%
6.道徳授業の地域の人たちの公開	748	178	334	140	96	94	19	45	20	10	14	4	2	5	3	143	27	63	29	24
	75%	78%	75%	72%	72%	9%	8%	10%	10%	8%	1%	2%	1%	3%	2%	14%	12%	14%	15%	18%

（4）全体計画の変更の度合い（2017 年度の全体計画に対して）

本調査で尋ねているのは、2018 年度の実態であり、「特別の教科 道徳」が小学校で全面実施され、中学校では来年度からというときである。そこで、2018 年度の全体計画を 2017 年度の全体計画に対してどの程度変更したかについて、小学校と中学校を比較してみると、「大幅に変えている」「ある程度変えている」が小学校 67%、中学校 56%であった。小学校では、7 割近い学校が変えているが、中学校も新しい道徳教育に合せて改善を図っているとみることができる。

表8　今年度の全体計画はどの程度変更しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
大幅に変えている	117	82	35
	13%	14%	11%
ある程度は変えている	466	317	149
	50%	53%	45%
あまり変えていない	308	186	122
	33%	31%	37%
変えていない	36	12	24
	4%	2%	7%

（5）全体計画の実施や見直しに関する研修

道徳教育の全体計画の実施や見直しに関する研修は、小学校と中学校を比較すると、「行っていない」が小学校 15%、中学校 23%であった。ただし、中学校は「3～4 回行った」が、小学校より多く 20%である。中学校が、2019 年度に向けての準備段階として取り組んでいることがうかがえる。

表9

今年度、道徳教育の全体計画の実施や見直し等について研修はどの程度行いましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
行っていない	144	79	65
	18%	15%	23%
1～2 回行った	485	341	144
	61%	67%	51%
3～4 回行った	131	75	56
	16%	15%	20%
5～9 回行った	24	13	11
	3%	3%	4%
10 回以上行った	13	5	8
	2%	1%	3%

3．年間指導計画について

（1）年間指導計画に書いている内容の効果

年間指導計画に「基本的発問」を書いて効果的であるとしたのは、全体で 74%であっ

た。小学校を見ると、2017 年度は 56%、2018 年度は 78% で 20ポイント上がっている。ただし、「書いていない」学校が 18%あり、今後の課題である。「板書計画」を書いている学校が、2017 年度は全体で 24%であったのが、2018 年度は 58%になっている。特に小学校で比較すると、2017 年度の 21%が 63%に伸びている。板書は、授業全体を分かりやすく示すことができ、具体的な授業について検討されていると捉えられる。

なお、事前指導や事後指導については、「書いていない」学校が、小学校で 31%、中学校で 24%と多い。取り組んでいるところは、効果的であると答えた学校が多く、今後の課題である。また、「地域との連携」は、2017 年度とほぼ同じであるが、更に効果を上げる取組が求められる。

表 10

年間指導計画に書かれていることがどの程度効果を上げていますか

	回答											
	効果的である			あまり効果的ではない			見直しが必要である			書いていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．基本的発問	718	491	227	50	27	23	32	11	21	170	98	72
	74%	78%	66%	5%	4%	7%	3%	2%	6%	18%	16%	21%
2．板書計画	563	398	165	78	41	37	34	11	23	296	178	118
	58%	63%	48%	8%	7%	11%	4%	2%	7%	31%	28%	34%
3．事前の指導に関すること	604	413	191	88	54	34	43	19	24	235	142	93
	62%	66%	56%	9%	9%	10%	4%	3%	7%	24%	23%	27%
4．事後の指導に関すること	619	426	193	86	50	36	42	16	26	222	135	87
	64%	68%	56%	9%	8%	11%	4%	3%	8%	23%	22%	25%
5．家庭との連携に関すること	515	380	135	171	104	67	78	34	44	206	110	96
	53%	61%	40%	18%	17%	20%	8%	5%	13%	21%	18%	28%
6．地域との連携に関すること	468	345	123	189	124	65	85	37	48	228	122	106
	48%	55%	36%	20%	20%	19%	9%	6%	14%	24%	19%	31%
7．各教科等との関連に関すること	641	476	165	157	75	82	84	33	51	88	43	45
	66%	76%	48%	16%	12%	24%	9%	5%	15%	9%	7%	13%

（2）郷土教材や学校独自教材の活用

郷土教材や学校独自の教材を「入れていない」とする回答について、小学校で 2017 年度と比較してみると、2017 年度は 29%、2018 年度は 32%であった。「1～2 教材入れている」を見ると、2017 年度 54%、2018 年度 51%であった。「入れていない」は、少し増えて、32%の学校が回答している。小学校で「特別の教科 道徳」が全面実施され、教科書が使用されるようになったが、郷土教材や学校独自の教材は、数は減っているものの、7 割の学校で使用されている。

表11

郷土教材や学校独自に開発した教材をどの程度入れていますか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
入れていない	283	199	84
	29%	32%	24%
1～2 教材入れている	473	319	154
	48%	51%	44%
3～5 教材入れている	171	90	81
	18%	14%	23%
6～10教材入れている	35	18	17
	4%	3%	5%
11教材以上入れている	17	4	13
	2%	1%	4%

（3）一定期間の道徳授業を振り返る授業の効果

2018 年3月の調査で、振り返りの時間を「設けている」学校は、全体で 18%あった

表12

道徳の全体授業を振り返る時間を設けていますか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
効果的である	157 16%	98 16%	59 17%
ある程度効果的である	325 33%	223 35%	102 29%
あまり効果的ではない	19 2%	13 2%	6 2%
設けていない	479 49%	298 47%	181 52%

が、「来年度設けたい」としたのは 28%であった。2019 年3月の調査では、51%の学校が振り返りの時間を設けており、ほとんどの学校が「効果的である」「ある程度効果的である」と答えている。

（4）重点的に指導した内容の効果

重点的に指導する内容については、「計画的に取り組み効果も感じられた」学校が 45%、「計画的には取り組めなかったが効果的であった」が 23%で、68%の学校で「効果的だった」としている。僅差であるが、小規模校ほど効果を感じている。さらに、より効果的な重点的指導の工夫が求められる。

表13

重点的に指導する内容項目について

	全体	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上
計画的に取組み効果も感じられた	438 45%	106 47%	193 45%	81 42%	58 44%
計画的に取り組んだがあまり効果的ではなかった	218 22%	40 18%	97 23%	51 26%	30 23%
計画的には取り組めなかったが効果的だった	222 23%	55 24%	92 21%	44 23%	31 23%
計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった	107 11%	26 12%	50 12%	17 9%	14 11%

（5）年間指導計画の見直し

2018 年度に年間指導計画を見直したかどうかを、小学校と中学校で比較してみると、「見直さなかった」のは、小学校が 23%、中学校が 32%であった。「3回以上見直した」

のは、中学校の方が小学校の２倍に当たる 13%であった。中学校では、2019 年度からの「特別の教科 道徳」の全面実施に向けて、年間指導計画の検討がなされていることがうかがえる。

表 14

今年度、どの程度年間指導計画の見直しを行いましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
見直さなかった	255	144	111
	26%	23%	32%
1回見直した	504	368	136
	52%	58%	39%
2回見直した	138	81	57
	14%	13%	16%
3回以上見直した	82	38	44
	8%	6%	13%

（木崎ちのぶ）

４．道徳の授業について

（１）学校全体で道徳授業に取り組める体制について

2017 年度は、「学校全体で取り組む体制ができているか」の問いに 95%が肯定的に回答していた。2018 年度はそれが機能したかどうかを尋ねると、肯定的な回答が 80%であった。「体制ができていない」との回答は、小学校で１%、中学校で４%と、ほとんどの学校において、学校全体で体制を作って道徳の授業に取り組んでいることがうかがえ る。

表 15

今年度、学校全体で道徳の授業に取り組もうとする体制は機能しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
機能したと思う	298	223	75
	30%	35%	22%
だいたい機能したと思う	488	319	169
	50%	51%	49%
あまり機能しなかったと思う	116	54	62
	12%	9%	18%
来年度見直したい	53	27	26
	5%	4%	8%
体制ができていない	24	9	15
	3%	1%	4%

（２）学校全体での道徳授業研修

学校全体での研修を「行っていない」学校が、小学校で 10%、中学校が 16%ある。学年ごとの研修を行っているとも考えられるが、どの学校でも学校全体での研修が大切である。「１ ～ ３回行った」が、小・中いずれも３分の２近くの 66% であった。「７回以上行った」が小学校で 10%であり、全面実施１年目の意気込みも感じられる。

表 16

今年度、学校全体で道徳授業の研修をどの程度行いましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
行っていない	120	64	56
	12%	10%	16%
1〜3回行った	648	418	230
	66%	66%	66%
4〜6回行った	133	88	45
	14%	14%	13%
7回以上行った	78	61	17
	8%	10%	5%

（3）道徳授業についての普段の話し合い

2018 年度は、道徳授業の話し合いが普段に「よく行われている」17%、「ときどき行われている」が 57%で、合計が 74%（2017 年度は 61%）であり、2017 年度と比べて 13ポイント上昇している。小学校、中学校ともに同様の傾向にある。地域の実態を 2017 年度と比べてみると、九州・沖縄が 68% から 20ポイント、北海道が 47% から 18ポイント伸びている。道徳の授業について職員室でも話題になることが多くなっていると予測できる。

表 17

道徳授業の話し合いはどの程度行われていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
よく行われている	164	96	68	24	26	17	46	21	32	23	27
	17%	15%	20%	11%	20%	10%	16%	16%	21%	18%	22%
ときどき行われている	558	369	189	112	84	97	168	74	82	66	82
	57%	59%	54%	49%	64%	55%	59%	57%	55%	51%	66%
あまり行われていない	195	131	64	65	18	44	56	27	29	29	12
	20%	21%	18%	29%	14%	25%	20%	21%	19%	22%	10%
ほとんど行われていない	61	34	27	26	3	17	15	9	7	12	4
	6%	5%	8%	12%	2%	10%	5%	7%	5%	9%	3%

（4）道徳授業の変化

全体にわたって、「ほとんど変わらない」としている学校は、３%程度であり、道徳の授業においては、全学年にわたって、「かなり変わってきている」「だいぶん変わってきている」と回答した学校が、70%以上である。

「子どもたちへの対応」では、「かなり変わってきている」15%、「だいぶん変わってきている」57%となっており、変わってきていると答えた学校が 72%である。「授業の評価」は 74%であり、昨年と比較すると 26ポイント上昇している。学校現場の努力がうかがえる。「あまり変わっていない」とする項目を見ると、事後の指導、事前の指導が高く、

47%と 44%である。小学校と中学校を比較すると、小学校の方が教材の多様性以外の項目はすべて高いし、大きな差も指摘できる。ここに挙げられている項目は、授業を充実させるためのポイントであり、さらに変化を実感できるように取り組む必要がある。特に中学校においては、「特別の教科 道徳」の全面実施を控えていっそうの対応が求められる。

表 18

年間指導計画に書かれていることがどの程度効果を上げていますか

	回答											
	かなり変わってきている			だいぶ変わってきている			あまり変わっていない			ほどんど変わっていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．低学年の道徳授業	159	104	55	556	393	163	231	122	109	29	8	21
（中学校では1年）	16%	17%	16%	57%	63%	47%	24%	20%	31%	3%	1%	6%
2．中学年の道徳授業	141	99	42	554	396	158	249	126	123	32	7	25
（中学校では2年）	14%	16%	12%	57%	63%	45%	26%	20%	35%	3%	1%	7%
3．高学年の道徳授業	134	93	41	545	394	151	263	130	133	33	10	23
（中学校では3年）	14%	15%	12%	56%	63%	43%	27%	21%	38%	3%	2%	7%
4．事前の指導の工夫	90	58	32	404	274	130	429	273	156	51	23	28
	9%	9%	9%	42%	44%	38%	44%	44%	45%	5%	4%	8%
5．導入の工夫	140	98	42	520	350	170	291	172	119	26	9	17
	14%	16%	12%	53%	56%	49%	30%	27%	34%	3%	1%	5%
6．教材提示の工夫	139	94	45	530	366	164	278	157	121	30	12	18
	14%	15%	13%	54%	58%	47%	29%	25%	35%	3%	2%	5%
7．展開の工夫	178	126	52	575	393	182	204	104	100	21	6	15
	18%	20%	15%	59%	63%	52%	21%	17%	29%	2%	1%	4%
8．終末の工夫	145	103	42	530	365	165	273	152	121	27	9	18
	15%	16%	12%	54%	58%	48%	28%	24%	35%	3%	1%	5%
9．教材の多様性	121	68	53	443	295	148	369	242	127	42	22	20
	12%	11%	15%	45%	47%	43%	38%	39%	37%	4%	4%	6%
10．事後の指導の工夫	65	50	15	402	278	124	456	276	180	50	23	27
	7%	8%	4%	41%	44%	36%	47%	44%	52%	5%	4%	8%
11．板書の工夫	156	120	36	480	354	126	307	147	160	33	8	25
	16%	19%	10%	49%	56%	36%	32%	23%	46%	3%	1%	7%
12．子どもたちへの対応	145	102	43	551	380	171	253	138	115	27	8	19
	15%	16%	12%	57%	61%	49%	26%	22%	33%	3%	1%	6%
13．授業の評価	308	248	60	424	304	120	209	73	136	29	1	28
	32%	40%	17%	44%	49%	35%	22%	12%	40%	3%	0%	8%

（5）道徳ノート、道徳ファイルの効果

道徳ノートが「効果的であった」としている学校が 57%、道徳ファイルが「効果的であった」としている学校は 63%であった。一方、「道徳ノートを持たせていない」学校は、全体で 38%（中学校が 55%）であり、2017 年度は、38.3%であった。「道徳ファイルを持たせていない」学校は、全体で 31%、2017 年度は 30.5%であった。

表 19

道徳ノートは効果的でしたか

1．道徳ノート	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	146	128	18
	15%	20%	5%
ある程度効果的であった	318	230	88
	33%	37%	26%
少しは効果的であった	91	60	31
	9%	10%	9%
改善を必要とする	42	26	16
	4%	4%	5%
持たせていない	372	182	190
	38%	29%	55%

道徳ファイルは効果的でしたか

2．道徳ファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	131	97	34
	14%	16%	10%
ある程度効果的であった	345	216	129
	36%	35%	37%
少しは効果的であった	127	68	59
	13%	11%	17%
改善を必要とする	67	27	40
	7%	4%	12%
持たせていない	301	216	85
	31%	35%	25%

（6）道徳授業改革がどのようになされているか

現在提案されている「登場人物への自我関与が中心の授業」は 93%、「問題解決的な授業」は 74%の学校が「行っている」と答えている。「学級活動との関連を重視した授業」67%、「学級経営との関連を重視した授業」78%も高く、学級づくりの基盤になっていることがうかがえる。「日常生活との関連を重視した授業」も 87%と高い。「各教科との関連を重視した授業」は「それほど行っていない」が 60%で、特に教科担任制である中学校は 73%である。また、「総合的な学習の時間との関連を重視した授業」について、「それほど行っていない」が小学校、中学校ともに 49%となっている。「総合的な学習の時間」は、道徳の授業と関連させて問題（課題）探究的な道徳学習を展開することができ る。もっと積極的に関連を図る必要がある「道徳的行為に関する体験的な授業」は、「それほど行っていない」と答えた学校が、小学校で 41%、中学校で 54%になっている。

表 20

次のような道徳の授業をどの程度行っていますか

	回　答								
	行っている			それほど行っていない			行っていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．登場人物への自我関与が中心の授業	908	604	304	59	21	38	9	2	7
	93%	96%	87%	6%	3%	11%	1%	0%	2%
2．問題解決的な授業	725	497	228	241	126	115	12	6	6
	74%	79%	65%	25%	20%	33%	1%	1%	2%
3．道徳的行為に関する体験的な授業	508	362	146	445	257	188	24	9	15
	52%	58%	42%	46%	41%	54%	3%	1%	4%
4．各教科との関連を重視した授業	356	288	68	588	335	253	35	7	28
	36%	46%	20%	60%	53%	73%	4%	1%	8%
5．学級活動との関連を重視した授業	655	436	219	314	191	123	9	3	6
	67%	69%	63%	32%	30%	35%	1%	1%	2%
6．総合的な学習の時間との関連を重視した授業	476	311	165	479	311	168	24	8	16
	49%	49%	47%	49%	49%	48%	3%	1%	5%
7．学級経営との関連を重視した授業	761	519	242	205	105	100	11	5	6
	78%	83%	70%	21%	17%	29%	1%	1%	2%
8．日常生活との関連を重視した授業	855	569	286	120	60	60	4	1	3
	87%	90%	82%	12%	10%	17%	0%	0%	1%
9．家庭との関連を重視した授業	434	332	102	509	287	222	35	10	25
	44%	53%	29%	52%	46%	64%	4%	2%	7%

（7）多様な教材の活用

『私たちの道徳』については、教科書がなかった 2017 年度調査で、小学校で 95%が使用されていた。教科書が使用された 2018 年度は、「よく使った」と「まあまあ使った」をあわせて 62%であった。中学校は、2017 年度も 2018 年度もまだ教科書がない状態で、2017 年度は 85%、今年度は 80%であった。小学校については、2017 年度の「都道府県や市町村などの開発教材」が、「よく使った」と「まあまあ使った」を合わせて 76%であったのが 62%に、「民間発行の副読本」が 80%から 44%に、「学校独自開発教材」が22%から 21%になっている。教科書を使いつつ多様な教材が使われていることがわかる。

表21

今年度、道徳授業で次のものを学校全体としてどの程度使いましたか

	回　答											
	よく使った			まあまあ使った			ほとんど使っていない			そのようなものはない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．文部科学省発行の『私たちの道徳』	195 20%	157 25%	38 11%	471 48%	231 37%	240 69%	265 27%	200 32%	65 19%	50 5%	43 7%	7 2%
2．都道府県や市町村などで開発された「道徳教材資料」	89 9%	44 7%	45 13%	505 51%	345 55%	160 46%	296 30%	187 30%	109 31%	92 9%	57 9%	35 10%
3．民間が発行する副読本の教材	257 26%	105 17%	152 44%	265 27%	163 26%	102 29%	284 29%	230 36%	54 16%	175 18%	134 21%	41 12%
4．学校が独自に開発した教材	39 4%	11 2%	28 8%	277 28%	119 19%	158 45%	229 23%	175 28%	54 16%	434 44%	326 52%	108 31%

5．道徳教育に関する先生方の意識

（1）道徳教育に対する先生方の意識

道徳教育の大切さ、道徳教育の目標、「特別の教科 道徳」の大切さについては、「理解していると思う」「だいたい理解していると思う」を合わせるといずれも９割になる。「特別の教科 道徳」の目標が 85%、指導方法が 81%、評価が 75%である。

「道徳教育や道徳の授業に熱心な教師が多い」という問いに、「そう思う」「だいたいそう思う」を合わせると 70%になる。しかし、「道徳の授業を楽しんでいる教師が多い」では、「あまり思わない」という回答をした学校が 49%。中学校は 55%である。「道徳教育は自分自身のことであると思っている教師が多い」に対して、「そう思う」16%、「だいたいそう思う」49%、合わせて 65%になっている。自分も一緒に楽しみながら、子どもたちとともに成長しようとする意識を高められるようにすることが求められていると言えよう。

表 22

道徳教育に対する先生の理解度

	回　答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．道徳教育の大切さについて理解している	516 52%	350 55%	166 47%	430 44%	270 43%	160 46%	32 3%	11 2%	21 6%	6 1%	1 0%	5 1%
2．道徳教育の目標について理解している	338 34%	243 38%	95 27%	532 54%	331 52%	201 57%	101 10%	54 9%	47 13%	13 1%	4 1%	9 3%
3．「特別の教科 道徳」の大切さについて理解している	426 43%	302 48%	124 35%	473 48%	296 47%	177 50%	78 8%	33 5%	45 13%	7 1%	1 0%	6 2%
4．「特別の教科 道徳」の目標について理解している	297 30%	219 35%	78 22%	544 55%	350 55%	194 55%	129 13%	60 10%	69 20%	14 1%	3 1%	11 3%
5．「特別の教科 道徳」の指導方法について理解している	190 19%	134 21%	56 16%	606 62%	414 66%	192 55%	175 18%	82 13%	93 27%	12 1%	2 0%	10 3%
6．「特別の教科 道徳」の評価について理解している	173 18%	129 20%	44 13%	561 57%	394 62%	167 48%	221 23%	101 16%	120 34%	28 3%	8 1%	20 6%
7．道徳教育に熱心な教師が多い	176 18%	115 18%	61 17%	529 54%	368 58%	161 46%	260 26%	142 23%	118 34%	19 2%	7 1%	12 3%
8．道徳の授業に熱心な教師が多い	173 18%	119 19%	54 15%	490 50%	350 56%	140 40%	296 30%	154 24%	142 41%	22 2%	8 1%	14 4%
9．道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い	152 16%	102 16%	50 14%	477 49%	325 52%	152 43%	326 33%	195 31%	131 37%	26 3%	8 1%	18 5%
10．道徳の授業を楽しんでいる教師が多い	72 7%	41 7%	31 9%	395 40%	292 46%	103 29%	477 49%	285 45%	192 55%	39 4%	13 2%	26 7%

（2）教師から見た家庭や地域の人々への意識

教師から見た家庭や地域の人々の意識について「子どもの道徳教育に熱心な保護者が多

い」では「そう思わない」という回答が 62%（特に中学校は 7 割を超える）。2017 年度（全体 56%、小学校 53%、中学校 61%）と比べると若干低くなっている。「地域の人たちの協力が得られている」や「保護者の協力が得られている」については、5 ～ 6 割である。更なる対応が求められる。そのためには、地域や保護者と情報交換を更に密にする必要がある。その際、子どもの道徳の評価（子どものよさや子どもの心の成長）を媒介することで、より効果を上げることができると考えられる。

表 23

先生から見て、家庭や地域の様子はいかがですか

	回　答					
	そう思う			そう思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．子どもの道徳教育について熱心な保護者が多い	375 38%	277 44%	98 28%	601 62%	352 56%	249 72%
2．子どもの道徳教育について熱心な地域の人たちが多い	362 37%	276 44%	86 25%	613 63%	352 56%	261 75%
3．地域の人たちの協力が得られている	526 54%	392 62%	134 38%	453 46%	237 38%	216 62%
4．保護者の協力が得られている	590 60%	430 69%	160 46%	388 40%	198 32%	190 54%

（3）教師の道徳教育に対する意識

道徳教育に関する教師の意識は、ほぼ 2017 年度と同様であった。特に高いのが「道徳の授業を積み重ねていけば子どもたちの道徳性は高められる」で、9 割を超えるのも 2017 年度と同様である。いじめの抑止に関しては、2017 年度は 89%、2018 年度は 85%が肯定的であった。回答者に注目して分析すると、特に教頭（副校長）88%、教務主任（研究主任）89%と高い。道徳教育と体力との関連については、5 割以上が「そう思わない」と回答している。心の健康と体の健康の関連についての認識が、意外と低いと捉えられる。

「道徳の授業を年間 40 時間する」というのは、否定的意見が圧倒的に多い。深まりのある 2 時間続きの授業などが柔軟に指導できるというメリットがあるが、学校現場では 35 時間をこなすだけで精一杯であるといった実態も想像できる。また、「教員養成の時点から道徳教育を充実する」ことについては、肯定的回答が 6 割以上になっている。

道徳の時間が「特別の教科 道徳」になったことについては、約 6 割が肯定的に捉えている。昨年と比較して 2 ポイントほど増えている。道徳教育推進教師と教務主任・研究主任とを比較すると、8 ポイント教務主任・研究主任の方が高い。ここにも課題と可能性を指摘できる。

表 24
道徳教育に対する先生の意見

	回答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任
1．道徳の授業を積み重ねていけば子どもたちの道徳性は高められる	884 91%	94 90%	168 89%	549 92%	73 86%	92 9%	10 10%	21 11%	49 8%	12 14%
2．教師は自分の生き方を子どもたちにもっと語すべきだ	720 74%	83 80%	146 77%	433 72%	58 68%	256 26%	21 20%	43 23%	165 28%	27 32%
3．道徳教育は他律的な道徳性の育成が根幹にあって自律的な道徳性がはぐくまれる	705 73%	72 70%	136 72%	436 74%	61 74%	260 27%	31 30%	53 28%	154 26%	22 27%
4．どのような子どもたちも学校に来ればしっかりと成長できる	619 64%	76 73%	126 67%	370 62%	47 56%	353 36%	28 27%	63 33%	225 38%	37 44%
5．学力の育成は道徳教育を充実させることで高められる	687 71%	78 75%	136 72%	417 70%	56 67%	286 29%	26 25%	53 28%	179 30%	28 33%
6．体力の育成は道徳教育を充実させることで高められる	444 46%	48 46%	88 47%	275 46%	33 39%	529 54%	56 54%	101 53%	321 54%	51 61%
7．いじめなどの子どもたちの問題行動は道徳教育を充実させることである程度改善される	829 85%	89 86%	167 88%	498 84%	75 89%	144 15%	15 14%	22 12%	98 16%	9 11%
8．道徳教育を充実させることで家庭との連携が深まる	639 66%	73 70%	122 65%	382 64%	62 74%	334 34%	31 30%	67 35%	214 36%	22 26%
9．道徳教育を充実させることで地域との連携が深まる	562 58%	73 70%	110 58%	329 55%	50 60%	411 42%	31 30%	79 42%	267 45%	34 41%
10．「特別の教科 道徳」の授業時数を40時間くらいにするともっと多様な授業ができる	176 18%	19 18%	39 21%	104 17%	14 17%	799 82%	85 82%	150 79%	493 83%	71 84%
11．教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	580 60%	59 57%	109 58%	364 61%	48 57%	395 41%	45 43%	80 42%	233 39%	37 44%
12．道徳の時間が「特別の教科 道徳」になったことに賛成である	565 58%	61 59%	117 62%	333 56%	54 64%	407 42%	42 41%	71 38%	263 44%	31 37%

（4）道徳教育に対する要望

これからの道徳教育に対する要望としては、2018 年 3 月調査同様、「道徳教育や「特別の教科 道徳」の授業の進め方についての資料が欲しい」ということと、「研修の機会を多くしてほしい」が 8 割近くの学校で「そう思う」としている。その要望は、校長や副校長（教頭）よりも、道徳教育推進教師や教務主任が高い。

「特別予算が欲しい」は、「そう思う」が 62%で、思ったよりも低い。すでに予算がつけられているところもあるのではないか。また、「道徳教育の指定校を多くしてほしい」という要望に対しては、校長や道徳教育推進教師が少し高いものの、全体では 26%になっている。「教務主任」が低いのが気になるところである。学校全体で道徳教育を充実させるためには、指定校の認定を受けることは効果的だと思えるが、多忙になることを意識しているようにも捉えられる。

表 25
道徳教育に対する先生の意見

	回　答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任
1．道徳教育を充実させるための特別予算がほしい	605 62%	65 63%	113 60%	371 62%	56 66%	369 38%	39 38%	76 40%	225 38%	29 34%
2．道徳教育の指定校を多くしてほしい	258 26%	31 30%	44 23%	168 28%	15 18%	718 74%	73 70%	145 77%	430 72%	70 82%
3．道徳教育の専門教師を加配してほしい	569 58%	48 46%	100 53%	374 63%	47 55%	406 42%	56 54%	89 47%	223 37%	38 45%
4．道徳教育研修の機会を多くしてほしい	765 79%	74 71%	128 68%	497 83%	66 78%	210 22%	30 29%	60 32%	101 17%	19 22%
5．文部科学省は道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	739 76%	67 64%	125 66%	480 80%	67 80%	236 24%	37 36%	64 34%	118 20%	17 20%
6．文部科学省は「特別の教科 道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	766 79%	74 71%	133 70%	489 82%	70 83%	208 21%	30 29%	56 30%	108 18%	14 17%

6．教科書を使った授業について（小学校のみ）

今年度から小学校において「特別の教科　道徳」が全面実施され教科書が無料配布され、評価も指導要録に記入するようになった。そのことについて、小学校のみに次のような質問をすることにした。

（1）授業のしやすさ

まず、「教科書を使った授業のしやすさ」について尋ねた。肯定的な回答が 71％であった。45％が「とてもしやすくなった」と答えている。

表 26
教科書の使用による道徳授業のしやすさ

	回　答							
	全体	大変 しやすくなったと思う	だいぶん しやすくなったと思う	まあまあ しやすくなったと思う	あまり 変わらないと思う	少し しにくくなったと思う	だいぶん しにくくなったと思う	かなり しにくくなったと思う
小学校	577 100%	67 12%	193 33%	147 26%	126 22%	35 6%	7 1%	2 0%

（2）教科書の活用状況

教科書の活用状況は、「そのまま活用した」のは「教材」が 65％、「ねらい」56％である。「主題配列」や「授業の進め方」、「重点指導」では５割以上の学校で「ある程度変えた」り「だいぶん変えた」りしている。教科書やその教師用指導書を中心にしつつも、学校の実態や子どもの実態等によって柔軟に対応していることがうかがえる。

表 27

教科書の活用状況

	回　答				
	全体	そのまま活用した	少し変えた	ある程度変えた	だいぶん変えた
1．主題配列（指導の順番が教科書通りであったかどうか）	632 100%	180 29%	291 46%	103 16%	58 9%
2．教材	631 100%	407 65%	193 31%	27 4%	4 1%
3．ねらい	632 100%	354 56%	238 38%	31 5%	9 1%
4．授業の進め方	632 100%	121 19%	352 56%	133 21%	26 4%
5．重点的指導	632 100%	202 32%	330 52%	82 13%	18 3%

（3）「特別の教科 道徳」の評価の時期について

「特別の教科 道徳」の評価は、「各学期」ごとに行っている学校が半数である。「特別の教科 道徳」が小学校で全面実施されて初めての年であり、教員間や保護者の理解をもとに慎重に進められている実態も想像できる。ただ、通知票を毎学期出している場合は、そこに「特別の教科 道徳」の評価も書くべきである。道徳の評価は、よりよく生きようとする心に関わって成長している一人一人の「よいところ」を見取り、勇気づける記述をするものであることから、学期ごとに評価し、子どもたちを勇気づけることが大切である。

表 28

今年度の『特別の教科 道徳』を評価した時期

	回　答			
	全体	各学期ごとに行った	年度末にまとめて行った	その他
小学校	579 100%	289 50%	245 42%	45 8%

（谷山優子）

7．教師の道徳教育に対する意識の傾向性（因子分析による検討）

教師の道徳教育に対する意識について、因子分析による検討を行った。回答している教員が、12 項目の意見について回答した結果に対して、主因子法による因子分析を行った。4 因子構造が妥当であると考えられ、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。明確な 4 つの因子が得られた。累積寄与率は、38.89 であった。取り出した 4 因子について、次のように解釈した。

第 1 因子は、「道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる。家庭との連携が

深まる」と考えていることから、「学校・家庭・地域連携因子」とした。

第２因子は、「道徳教育を充実させれば、体力や学力を高められる」と考えているた め、「徳・知・体有効因子」とした。

第３因子は、「教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにして充実を図るべきだ」「道徳の時間が『特別の教科 道徳』になったことに賛成である」と考えていることから、「道徳教育充実期待因子」とした。

第４因子は、「道徳教育を積み重ねていけば、道徳性が高められる。いじめ行動が改善される」と考えていることから、「道徳教育信頼因子」とした。

これら４つの因子が、教師の道徳教育に対する意識の傾向性の背景にあると考えられる。

表 29 教員の道徳意識の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

	因子			
	I	II	III	IV
9．道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる	.871	.002	-.011	-.041
8．道徳教育を充実させることで、家庭との連携が深まる	.860	-.028	-.001	.059
6．体力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	.058	.724	.067	-.147
5．学力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	-.001	.617	.113	.043
4．どのような子どもたちも、学校に来ればしっかりと成長できる	-.028	.420	-.109	.105
3．道徳教育は、他律的な道徳性の育成が根幹にあって、自律的な道徳性がはぐくまれる	-.05	.385	-.115	.202
2．教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	-.021	.301	.017	.149
11. 教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべき	-.050	-.081	.734	-.017
12. 道徳の時間が「特別の教科　道徳」になったことに賛成である	.014	-.048	.502	.202
10. 「特別の教科　道徳」の授業時数を 40 時間くらいにすると、もっと多様な授業ができる	.046	.084	.393	-.085
1．道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる	-.048	.099	-.004	.516
7．いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである	.127	.083	.026	.484
程度改善される				

（木崎ちのぶ）

Ⅲ．全国調査の自由記述の分析

アンケート調査の内容に、今回も自由記述欄を設けている。一応書きやすいように、「ぜひ伝えたいこと」「要望」「意見」「その他」の項目を設けて記入してもらうようにし た。重なりもあるがそれぞれの記述の内容について分析したい。

１．「ぜひ伝えたいこと」「要望」の分析

まず、自由記述部分の「ぜひ伝えたいこと」と「要望」の２項目について分析する。

（１）「ぜひ伝えたいこと」について

「ぜひ伝えたいこと」についての結果は、次の通りである。

数値の高かったものについて、検討してみたい。まず、実際に評価を行ってみて、「難しかった、評価には課題がある。」という意見が 28 件あった。これは、昨年度は評価に対する不安であったが、今年度は、実際に評価を行ってみて、難しかったと捉えた教員が多かったと言える。

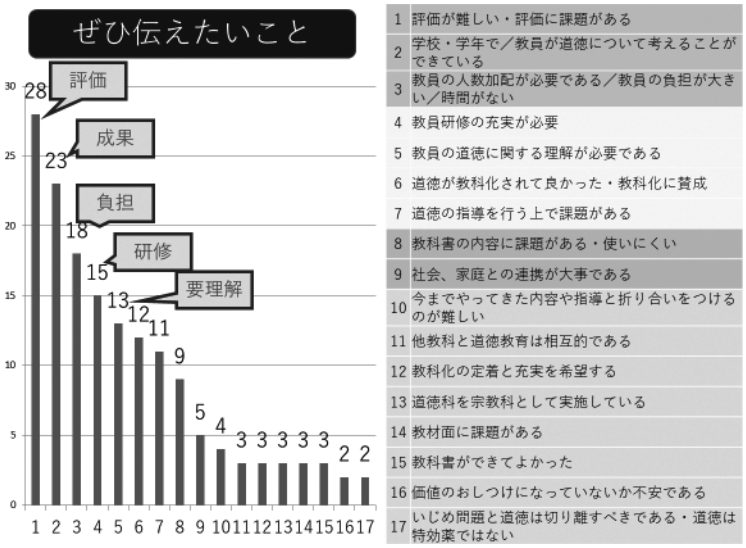

図１ 「ぜひ伝えたいこと」の内容

次に多かったのは、「学校・学年で教員が道徳について考えるようになった。」という記述である。これは、校内研修が積極的に行われるようになったこと、学年会等で話題になることが多くなったこと等があると考えられる。

３番目は、教員の負担の増加である。特に意見として多かったのは、「加配教員を増やしてほしい。」という声である。専門的に道徳教育や「特別の教科 道徳」の授業について指導できる教員を確保してほしいという願いであると捉えられる。また、どの教室にも配慮を要する子どもたちが存在し、その対応にも教員の補助が欲しいという実態も考えられる。

４番目に多かった研修は、２番目とも関係するが、実際に「特別の教科 道徳」が始まり、研修が一層重要であることを実感したと言えよう。

５番目は、「『特別の教科 道徳』に対する理解が教員にとって必要である。」と捉えている教員が多いと言える。

また、６番目の教科化されてよかったという意見は、アンケート項目とも関連させて捉えると、概ね教科化が肯定的に受け止められていると捉えられる。今までの道徳の時間の指導にかかわってきた教師が、「特別の教科 道徳」になり、その対応が難しいと捉えている教員もいる。特に、これまで意欲的に道徳の時間に取り組んできた教員ほど悩んでいるのではないかとも考えられる。

これらをまとめてみると、次のようになる。

・2017 年度同様に評価に対して不安や戸惑いをもつ教員が多く見られる。

・各学校での理解が進み、道徳について教員間の理解が進んでいることがうかがえる。
・実際に授業をするに当たって、加配等の教員の増加を求める声が多い。これは、2017 年度に比べて増えているが、実際にスタートしてみてより強く感じていると捉えられる。
・教員の研修や道徳に対する理解を更に深める必要であると捉えている教員が多い。

（2）「要望」について

次に「要望」についての記述について考察する。全体的な「要望」は次の図のようにまとめられる。一番多かったのは、「是非伝えたいこと」と同様に評価に関することであ る。特に、文科省や教育員会から統一的な見解や指導資料を要望している。これはアン ケートの結果と同様である。

２番目には、「特別の教科 道徳」に関して、教材研究をする時間を確保してほしいというものである。教員の負担を軽減し、課題研究に取り組める環境をつくってほしいということとも関連する。働き方改革ともかかわって早急に対応する必要がある。

３番目は、研修の時間をもっと増やしてほしいというものである。２番、３番とも道徳に対してもっと研究したい、そのための環境をつくってほしいという前向きな要望である。「ぜひ伝えたいこと」でも多く出てきた内容である。

４番目としては、道徳の専門的な教員が校内にほしいという要望である。年に数回の研修ではなく、日常的に質問したり、指導をお願いしたりできる加配を要望していると捉えられる。これも、「ぜひ伝えたいこと」でも多く出てきた内容である。

５番目、６番目は、教材に関することである。実際に教科書を使ってみての様々な問題がみられた結果であると考えられる。この点については、随時改善が望まれるところである。また、文科省に対しても随時情報を発信してほしいという要望があった。

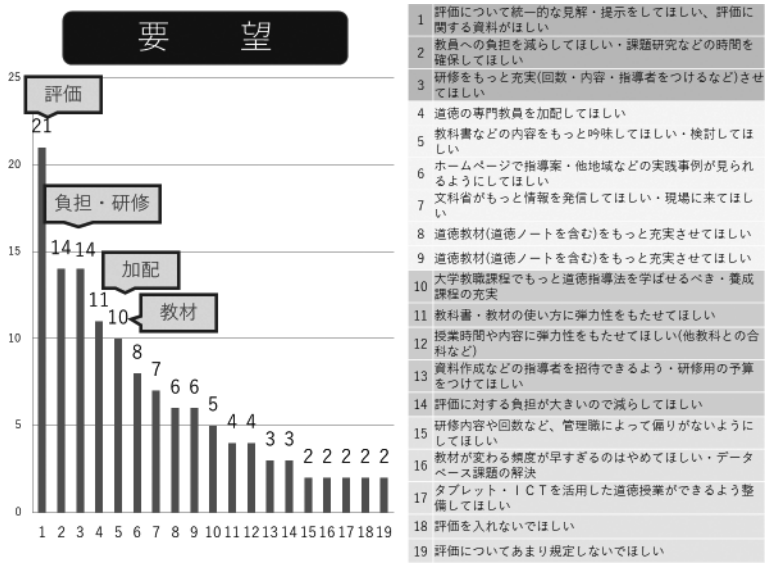

図２「要望」の内容

少数ではあるが、今後増えることが予想される ICT に向けて、「特別の教科　道徳」の授業においても準備する必要があるという要望もみられる。

「要望」についてまとめて見ると

・「要望」においても、評価に関するものが「ぜひ伝えたいこと」と同様に多い。ま　た、その内容は、2017 年度の調査と同様、評価の問題への指摘が多い。
・教員研修の充実を求める声が多い。研修回数の増加を求めている。また、指導方法についても研修をしたい意向が強い。そのこととともかかわらせて、専門的な教員の加配を求めている。
・教職員の負担軽減の視点から、加配やアシスタントティーチャーの増員を求める声が多い。
・2018 年度の特色としては、小学校で教科書が使用されたことから、教科書の内容をよく吟味してほしいという意見も多く記述されている。

小学校において「特別の教科 道徳」が全面実施されての「伝えたいこと」や「要望」であるが、この記述からは、評価や研修に関して教員の関心が高いことがうかがえる。そして、意見からは、積極的に「特別の教科　道徳」の設置を受け止め、よりよい授業を創っていきたいという意欲と願いがうかがえる。アンケートの結果を裏づけていると言える。

（矢作信行）

2．「意見」「その他」の分析

次に、「意見」と「その他」の内容を見ていきたい。

（1）「意見」について

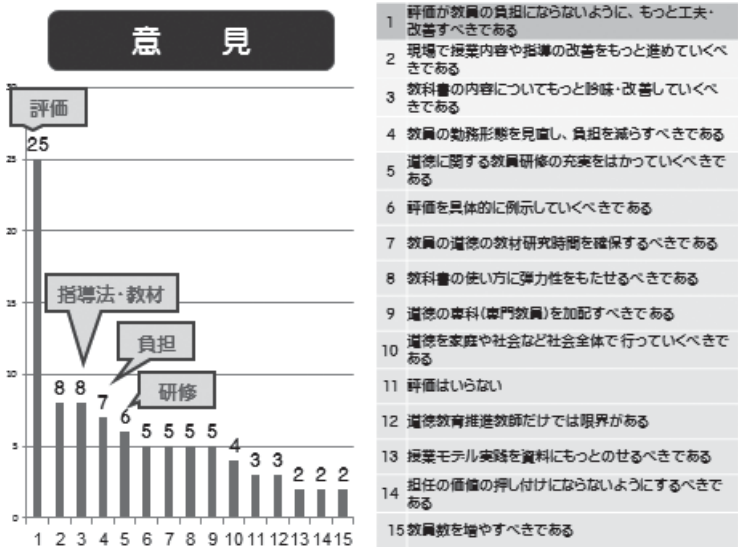

図 3 「意見」の内容

2018 年 3 月の調査結果は、小学校において 4 月から「特別の教科 道徳」が実施となる直前のものであり、2019 年 3 月の調査結果は、実施後 1 年間を経過した後のものである。

双方共に「評価」に対する関心が一番高い。しかし、その記述を見ると 2018 年３月調査では、「評価に課題がある・疑問点がある」という内容であり、2019 年３月調査では、「評価が教員の負担にならないように、もっと工夫・改善すべきである」という内容となっている。

これらを、他の意見と関連付けて詳しく見てみると、実施前は、「特別の教科 道徳」における評価が教員にとって初めてのことであり、「評価すべきなのか」や「どのようにするのか」といったことに加えて、「仕事量が増えることへの負担感」をもっていることが見て取れる。これに対して、小学校で実施された後の 2019 年３月調査では、文章による記述評価や評価そのものに対する「負担感」や「評価の仕方に対する具体的な工夫」を求める意見が寄せられており、教員が、「評価内容や評価方法等の具体的な改善・工夫」について高い関心をもっていることが見て取れる。

また、2018 年３月調査では、「道徳は大事」だとする意見や、「教材や指導方法についての研修会の充実」を求める意見が見られ、2019 年３月調査では、「教材や授業内容について改善を図る必要性」や、そのために「教員研修の充実」や「実践事例の参照」、さらには「道徳の専門教員の加配」を求める意見が見られる。

これらのことから、今後は、「評価方法」・「指導内容や方法」・「負担軽減」について工夫・改善を図る必要があり、そのために「教員研修会」や「指導体制」のさらなる改善・充実が求められる。

（２）「その他」について

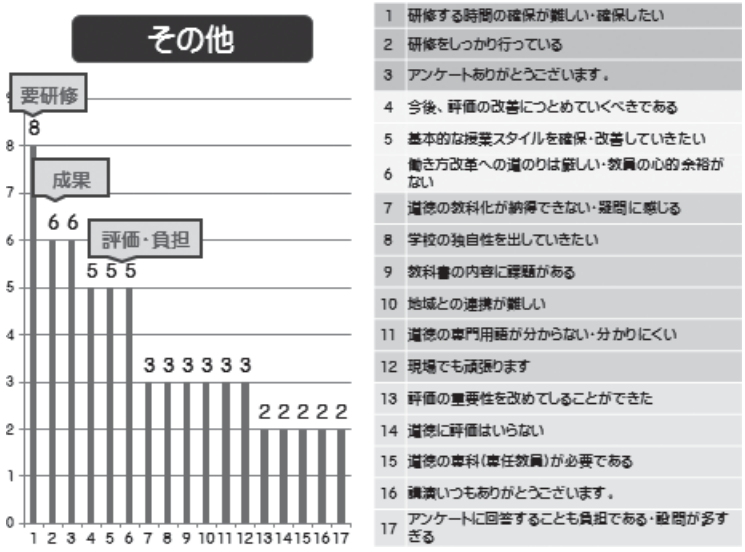

図４ 「その他」の内容

「その他」を見ると、2018 年３月調査では、「評価をすることに課題がある」と「力を合わせてこれから頑張る」が共に高い。また、それに続いて「『特別の教科 道徳』がどうなっていくのか不安」、「時間がないのが悩み」、「優れた授業を見たい」「実践例を知りたい」といった記述が見られた。

一方、2019 年３月調査では、第１位に「研修時間の確保が難しい」（８件）、次いで第

２位に「研修をしっかり行っている」（６件）とある。また、第３位に「評価改善」・「指導方法の改善」・「働き方改善」（５件）についての記述が見られる。その他、個人的な率直な少数の意見が寄せられている。

これらのことから、2018 年３月調査では、道徳の教科化を受け、教員が評価や指導方法や仕事量の負担等に対して不安や課題と感じながらも、一方でしっかりと取り組みたい・知りたいといった意欲をもち、授業実践事例や評価等に関わる研究会や研修会の充実を求めていることがうかがえる。

2019 年３月調査では、研修の時間の確保が難しいとする教員と、しっかり研修をしているという教員がいることが見て取れる。また、前向きに取り組んでいこうとする教員と、やや消極的な教員がいることもうかがえ、個人や学校間の取組に差があることが予測できる。従って、今後は、教員の各種研究会や研修会への参加の機会、及び内容の充実をより図る必要があり、それによって具体的な指導方法や評価方法、並びに道徳の指導に係る学校体制の工夫・改善を図っていく必要がある。このような自由記述の内容は、アンケートの結果と関連している。

（齋藤道子）

Ⅳ．テキストマイニングを用いた全国調査自由記述の分析

ここでは、2019 年３月調査の自由記述について、文書や文字列を統計学的に計量化する技法として注目されているテキストマイニング(2)を用いて分析する。この技法は、統計学・情報処理（自然言語処理）技術を応用して文書（テキスト）を単語（名詞、動詞、形容詞など）に分割し、それらの出現度数や相関関係を分析し、文書に含まれる有益な情報を計量的に抽出するものである。

テキストマイニングには、近年、多くの研究者・技術者に支持され、しかもフリーソフトとして信頼性の高いKH Coder(3)（立命館大学産業社会学部　樋口耕一准教授によって開発・公開）を用いている。本研究では、以下の５種類の基本的な分析を行う。

①アンケートから抽出した語の「抽出語リスト」

②「語」と「語」の関連性と強さを表す「共起ネットワーク」

③元の原文を検索して「抽出語」の使われ方を確認する「KWIC コンコーダンス」

④注目する「抽出語」に視点をあてて分析する「関連語検索」

⑤抽出語間の関連性と強さ、外部変数との関連性と強さを表わす「共起ネットワーク」

である。ここでは、主として質問項目「１．ぜひ伝えたいこと」を取り上げる。

１．「１ぜひ伝えたいこと」における抽出語リスト（上位 10 語）から読み取れること

アンケート自由記述の各質問項目において出現度数の上位 10 語を比較すると、どの質問項目にも共通する語「道徳」「教育」「教科」「授業」「評価」があった。また、第１回目の 2018 年３月調査と比較して、2019 年３月調査には、新しく抽出語リストの上位 10 語中に「研修」「感じる」があった。「研修」が含まれる原文を検索すると、例えば「前向きに研修

で学び、考える道徳を目指して授業に色々な活動を取り入れてきた。子どもたちは道徳の授業を楽しみにしている。」等、多くは小学校において研修の必要性と効果性が述べられていた。悩みながらも一歩一歩取り組みを進めている成果としての記述が多くあった。中学校においても「今年は「特別の教科 道徳」の研修も多かった。」と全面実施を迎える準備がなされていた様子が理解できる。「さらに、道徳教育の研究に関する発表会や研修の場があるとよい」と充実に向けた意識も見られる（図５）。

図５　抽出語リスト「1 ぜひ伝えたいこと」

２．「1ぜひ伝えたいこと」における共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れること

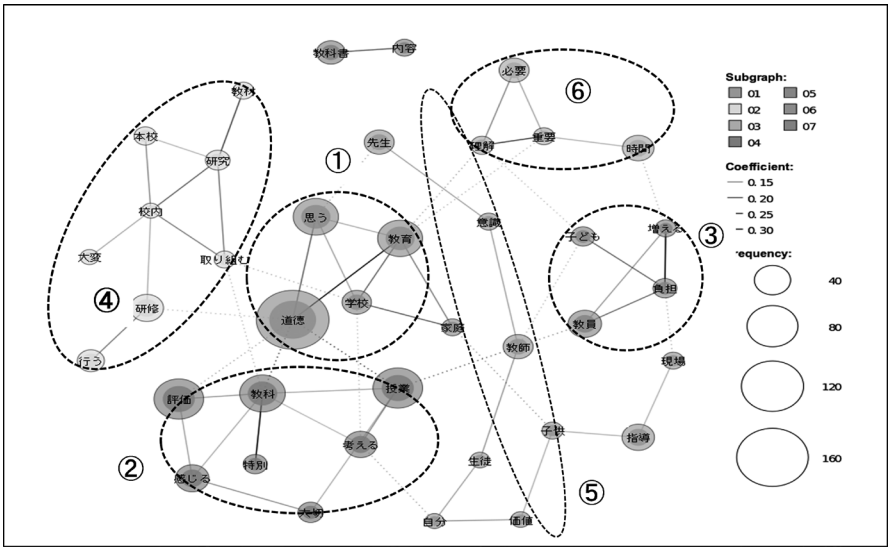

図６「ぜひ伝えたいこと」共起ネットワーク

質問項目「1. ぜひ伝えたいこと」のデータにおいて全体像を把握するため、共起ネットワークを活用した。ここでは、大きく６つの語のグループが見られた。テーマを付けるならば、以下の通りである（図６）。

①「道徳教育、「特別の教科　道徳」推進についての概観」

②「評価」

③「負担感」

④「研修及び教材研究」

⑤「これからのあり方」

⑥「道徳教育（「特別の教科　道徳」）の必要性」

②③は負担感・煩雑感・効果はあるのかという不安・不満感、④⑤⑥はそれでも一歩一歩推進しているということ、特に⑤を見ると、「価値」「意識」と関わって「子ども」「生徒」「教師」「指導」「自分」という抽出語が見られる。

それぞれ原文を検索すると、「価値の押し付けを懸念」「管理職の意識改革が必要」等の記述がある一方、これからの「教師」の「指導」のあり方として、「授業の中で意見交換の場を設定し、子どもたちに他者理解を促し、ものの見方・考え方に幅を持たせ、自分ならどうすると考える場を提供することの必要性」という記述が複数見られた。「評価」については、「内面の評価の難しさ、外国語と総合との評価等現場での煩雑さ」は大きな課題であり、「効果はあまり感じられない」というマイナス評価にしか捉えられない現場の負担感も多くあることが読み取れる。

３．「１ぜひ伝えたいこと」における関連語検索「授業」から読み取れること

出現度数が高い『授業』や『評価』を視点として関連語検索を行い、回答内容の把握を試みた。大きく３つの語群（語のグループ）があり、テーマを付けるならば以下のようである。

①は、『授業』との関わりの中における「教師」と「生徒」のかかわり

②は、「特別の教科　道徳」の『授業』のあり方

③は、①②を教師としてどう受け止めるかという『授業』にかかわる現場の思い

が見られた。

②の「授業のあり方」の特に『多様』に注目すると、「生徒の多様性を大切にしたい」「生徒に考えを押し付けたくない」「評価方法ばかりに捉われることを懸念」「子どもの多様な考えに出会えておもしろいと再確認」等の記述が見られた。授業改善として子どもの「多様性」を大切にしようと 取り組みを進めている、子どもともっと関わりたい、評価等多忙で時間が取れず徹底してできないという不満感、負担感、やりたくてもできない葛藤がうかがわれる（図７）。

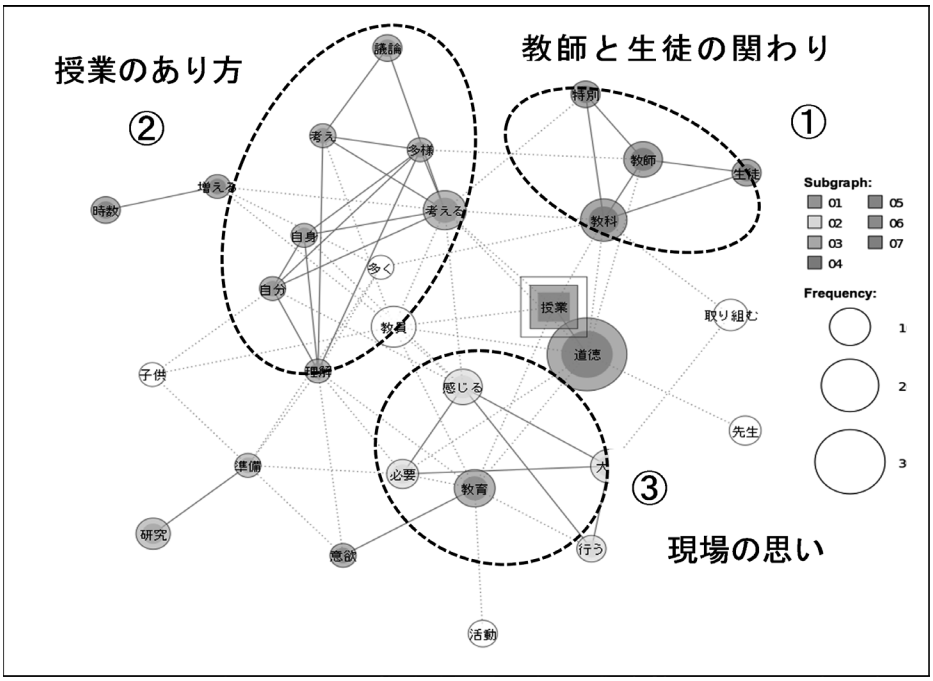

図７ 「ぜひ伝えたいこと」関連語検索「授業」

４．「１ぜひ伝えたいこと」における関連語検索「評価」から読み取れること

各質問項目の抽出語リストを見ると、「評価」は、どの質問項目においても多く抽出された。「１ぜひ伝えたいこと」の「評価」に関わる「難しい」「感じる」に注目し、元の原文を検索した。

「難しい」については、内面を評価することの難しさ・多大な煩雑さ・具体的評価方法がわからないが、「感じる」については、「負担感、煩雑さ（外国語、総合、道徳、所見）の中で、『特別の教科 道徳』の効果まで感じられない」「仕事が増えた事に対するうんざり感」等、ネガティヴな面が多かった。その中でも「授業のみならず、道徳教育全体の大切さを感じ、意欲的に研究に取り組んでいる」「子どもの変容に喜びを感じる」というポジティブな回答も見られた。道徳の授業の必要性は理解できるが、「評価」の必要性までは感じられないという反応も読み取れる（図８）。

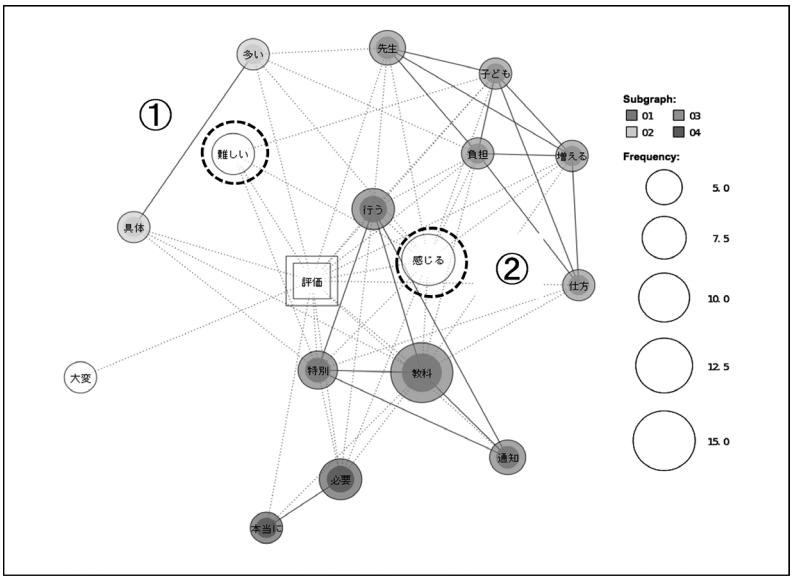

図８　関連語検索（評価）の共起ネットワーク

５．「１ぜひ伝えたいこと」における関連語検索「研修」から読み取れること

「研修」については、「授業づくりと評価の仕方についての校内研修が効果をあげてい る」「道徳教育についての研修は多くあったが、評価に関する具体的な研修がほぼなく、そこが知りたいと思う教員は多かった」「研修はしているが評価についての理解は深まっていない」等、子どもに寄り添って授業を展開することによって、子ども理解が深まるという喜びを実感する一方、評価の研修をしても理解は深まらない、負担感が残ると感じている教員もいることがわかる。関連語検索「研修」において、「行う」という語に着目すると、「文章で行う評価の必要性が感じられない」「評価の書き方がうまく伝わっていな い」と書かれていた。通知表における子どもの評価のみが多く意識されているが、授業改善のための「評価」があまり意識されていないことが読み取れる（図９）。

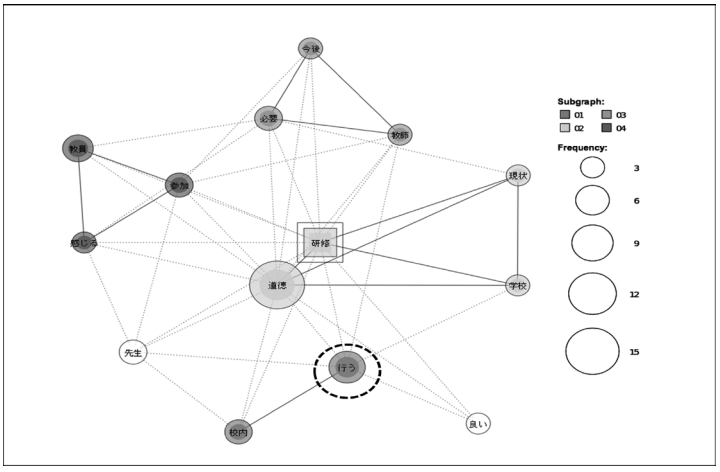

図９　関連語検索（研修）共起ネットワーク

6．「１ぜひ伝えたいこと」における共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）から読み取れること

それぞれの職階における回答者の意識を抽出語から、或いは抽出語どうしの関わりから検討した。また、それによって学校の動きについても探った。

１は校長 ２副校長（教頭） ３道徳教育推進教師（道徳主任） ４ 教務主任、研究主任 ５それら以外を表す（図 10）。

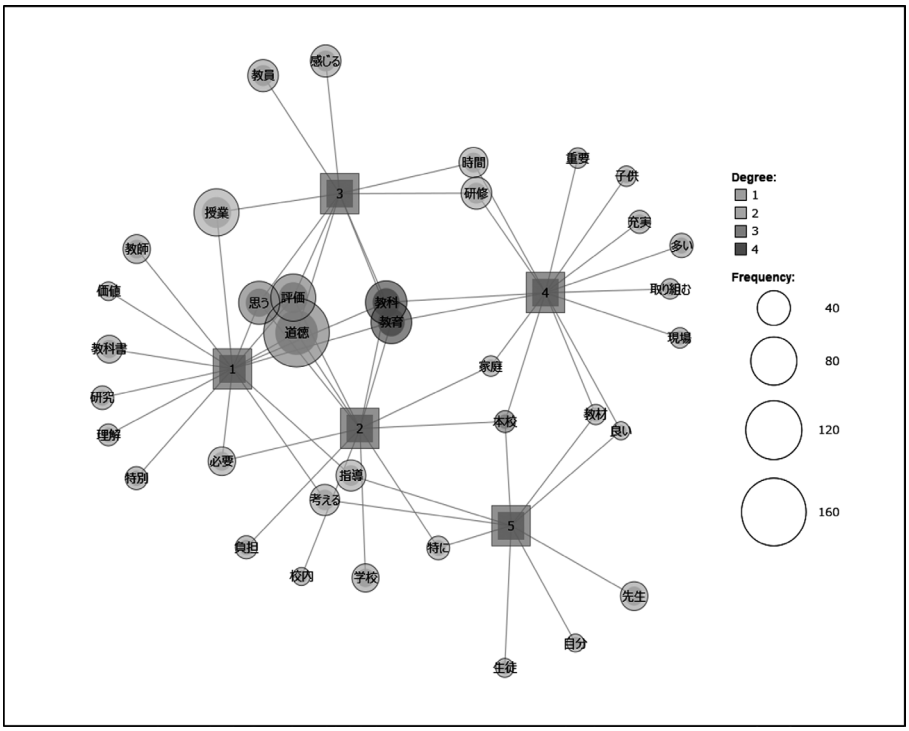

図 10 抽出語と外部変数（回答者の職階）との共起ネットワーク

① 職階間で共通する抽出語から読み取れること

「３道徳教育推進教師（道徳主任）」と「４教務主任、研究主任」は、実質的に授業に関わって担任などの職員と日々つながって牽引している立場である。２者の間に強く関わる抽出語に「研修」「時間」がある。原文に戻ると、「時間」においては、「道徳教育によく取り組み成果も出ているが、時間が不足」「熱心な先生程、（子どもの変容する姿を見て）喜びは大きいが評価にかける時間が増えている」「教科化は 35 時間確保に結びついている」とあり、「特別の教科 道徳」推進に関わって時間の確保や担任等への支援に努める

「３道徳教育推進教師（道徳主任）」や「４教務主任、研究主任」の姿が読み取れる。また、「研修」においては、その成果として「研修内容・方法の充実の為の校内研修の積み重ねで効果が出ている」「小中連携で、若い先生や中学校の先生が道徳に関心をもって前向きに研修に参加」などと述べている。さらに、「意識改革につながる研修、評価に関する具体的

研修、道徳教育の研究に関する発表や交流の場が必要」と今後の研修のあり方についても言及されていた。

② 学校としての動きが読み取れること

共通する抽出語を見ると、職務内容に重なりがある所で、協力的に取組んでいることが理解できる。上述の「３道徳教育推進教師（道徳主任）」と「４教務主任、研究主任」においても協力的な取組みが見られたが、「３道徳教育推進教師（道徳主任）」の動きに関しては、「１校長」との間にも共通する抽出語がある。言い換えると、「３道徳教育推進教師（道徳主任）」と「１校長」が「授業」について、よく関わり、取組みを進めている学校が多くあるといえる。他の職階と共通する抽出語が見られない「２副校長（教頭）」は、道徳教育推進について特にリーダーシップ的な抽出語は見られないが、全体としての認識を共有しながら、道徳教育推進においては、他職階のサポート役であると考えられる。１～５の職階がビジョンと課題を共有しながら進めている学校もあるということが、共通する抽出語とその原文から判断できる。

以上、KH Coder における上記の機能を用いて、本アンケート調査の自由記述について分析した。まとめると以下のとおりである。

抽出語リストを検討すると、2018 年３月調査においては、抽出語の上位 10 語に「評価」が含まれていた。「特別の教科 道徳」において、「”評価 ” は難しい」という取組み前の不安、漠然とした負担感の高まりが伺われる。2019 年３月調査においては、中学校では実施準備期間中であったが、小学校ではすでに実施されている中、抽出語リストに は、「評価」と新たに「研修」「感じる」が上位 10 語に含まれていた。抽出語リストと関連語検索による分析とを合わせて検討すると、授業実施に伴う「負担感」は、具体的内容を伴って現われてきていることが読み取れる。現場の教員にとっては、評価を行ったことによる効果の実感とともに、研修をしたものの評価に関する不適切な記述など、研修自体の効果が実感できないという現実があることを示している。

一方、授業改善を進めることによって「子どもの多様な考えに出会えた」「他の教育活動の中で子どもが道徳とのつながりを見つけ、補充・進化・統合して、より理解が深まって行くような手応えがあった」など子どもの変容を受けとめていること、そして、「もっと充実した研修を受けたい」と思っていることなども見受けられた。

結果的に、次のことが課題であるといえる。

先ず、教育現場が求める「評価」は、通知表を用いて、保護者・子どもに個々のよさを如何に伝達するのかということであり、それについて、現在、教員は、一定の情報を得ることができる状況にある。今後は、評価の積み重ねから個々の子どものよさを教員の主観だけに頼ることなく表現できるような方法の確立と工夫が必要となる。さらに、教育現場の「過剰負担」と「時間の確保」を念頭に置きながら、本来の授業改善にも繋がる評価方法についての研究が求められる。

次に、これからの道徳教育・「特別の教科 道徳」の推進においては、学校現場が求める充実した内容の研修会の開催や現場での授業のサポートが重要である。それには、よりよい道徳教育・「特別の教科 道徳」推進のための実践研究を通して、校長及び道徳教育

推進教師等が明確なビジョンを示せるように、共に自校における道徳教育充実の方策を考えていく必要がある。（小山久子）

注

（1）押谷由夫、矢作信行、齋藤道子、木崎ちのぶ、谷山優子、小山久子（2019）「学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（1）―全国調査の統計分析と自由記述分析を中心としてー」『武庫川女子大学教育研究所 研究レポート』第 49 号 pp.63-94

（2）テキストマイニングについては、次の文献を参照。

・「KH Coder: 計量テキスト分析・テキストマイニングのためのフリーソフトウェア」（URL）http://khcoder.net/（2020 年 3 月 1 日取得）

・樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して - 第 2 版』ナカニシヤ出版

・牛澤賢二（2018）『やってみようテキストマイニング自由回答アンケートの分析に挑戦！』朝倉書店、pp.15-35

（3）KH Coder については、注（2）の URL 及び文献を参照。

※ 本研究は、科研研究（B）「道徳教育課題に対応する『特別の教科 道徳』を要とする道徳教育プログラムの開発研究」課題番号 17H02706 の研究の一部である。

※ 押谷のホームページ（http://oshitani.mints.ne.jp/）も参照のこと。

※ 本研究は、科研研究（課題番号 17H02706）の成果の一部である。

学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究（３）

―2019年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―

Research on Actuality of Correspondence to Moral Education Reform in Schools and Teacher's Consciousness (3): Focusing on Statistical Analysis and Free Description Analysis in the 2019 Survey for Schools across Japan

押谷由夫 *・矢作信行 **・齋藤道子 **
木崎ちのぶ **・谷山優子 **
小山久子 ***・醍醐身奈 ****

OSHITANI,Yoshio　YAHAGI,Nobuyuki　SAITO,Michiko
KIZAKI,Chinobu　TANIYAMA,Yuko
KOYAMA,Hisako & DAIGO,Mina

目次

Ⅰ．本研究の目的と方法
Ⅱ．調査結果の統計的分析
Ⅲ．調査結果の特定の自由記述の分析
Ⅳ．テキストマイニングを用いた全体的な自由記述の分析

*　武庫川女子大学教育研究所・副所長、教授
** 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士課程後期
*** 大阪芸術大学・特任教授
**** 目白大学・専任講師

Ⅰ．本研究の目的と方法

1．研究の動機

文部科学省は、新教育課程に先駆け、道徳教育の抜本的改善・充実に取り組んでいる。その中核に「特別の教科 道徳」の設置があり、小学校では 2018 年度から、中学校では 2019 年度から全面実施されている。新しい道徳教育への移行期にあるこの時期に、学校現場の教師の意見や具体的取組について調査し、教師がその意義を理解し、各学校が主体的に取り組み、意図される効果を上げられるようにするための対策を行うことが求められる。

2．本研究の目的と方法

本研究は、道徳教育の変革期にあるこの 3 年間（2017~2019 年度）の学校現場の対応の実態を明らかにし、学校現場の教職員がより主体的、意欲的に道徳教育改善・充実に取り組んでいただけるようにするための提案を行うことを目的とする。

本研究チームでは、第 1 次全国調査を、「特別の教科 道徳」の設置が決定した翌年度の 2018 年 3 月に行い、第 2 次全国調査を、小学校が全面実施された年度の 2019 年 3 月に行い、第 3 次調査を、小学校、中学校ともに全面実施された年度の 2020 年 3 月に実施した。今回は第 3 次の調査の結果を明らかにする。

3．調査の方法

調査対象校は、第 1 次、第 2 次、第 3 次調査とも同一の学校とした。調査対象校の選定は『全国学校総覧 2017 年度』（原書房）より、全国 47 都道府県の全部の小学校・中学校から、およそ 1 割の学校を無作為に抽出し、アンケート用紙を送付するという方法を 取った。発送学校数は、年度ごとに統廃合校があるため若干の変更がある。第 1 次調査では、3336 校、第 2 次調査では 3331 校であった。今回の第 3 次調査では、3325 校であり、回収学校数は 1027 校。回収率は、30.9%であった。

学校種別および回答者の職別、地域別のサンプルは表の通りである。

調査対象データ 1　　データ 2

学校種別　　職階別

全体	小学校	中学校	小、中一貫校（義務教育学校）	全体	校長	副校長（教頭）	道徳教育推進教師（道徳主任）	教務主任、研究主任	それら以外
1027 100%	644 62.7%	362 35.2%	19 1.9%	1027 100%	110 10.7%	158 15.4%	669 65.1%	63 6.1%	27 2.6%

（上段：校数　以下同じ）

データ 3
学校の地域別

全体	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	不明
1027 100%	65 6.3%	126 12.3%	225 21.9%	63 6.1%	30 2.9%	83 8.1%	158 15.4%	93 9.1%	57 5.6%	109 10.6%	13 1.3%	5 0.5%

なお、国・公・私立別学校数を示すと以下の通りである

データ 4
国・公・私立別

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
国立	54 5%	27 4%	27 8%	2 1%	7 5%	10 5%	14 5%	4 4%	10 6%	13 9%	5 4%
公立	886 89%	591 92%	295 82%	220 94%	116 89%	178 94%	248 86%	103 91%	125 80%	128 87%	114 93%
私立	60 6%	23 4%	37 10%	12 5%	7 5%	2 1%	25 9%	6 5%	22 14%	7 5%	3 3%

回答した学校は、小学校が 644 校で 62.7%、中学校が 362 校で 35.2% である。学校の国・公・私立別については、「国立」5 %、「公立」89%、「私立」6 % である。地域別では、学校数の関係で差はあるが、全国の学校から万遍なく回答されている。

（押谷由夫）

Ⅱ・調査結果の統計的分析

1・各校の道徳教育への対応

(1)道徳教育推進教師の特徴

表 1
道徳教育推進教師（道徳主任）はどのような先生がなられていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
ベテランの先生	317 32%	219 34%	98 28%	89 38%	26 21%	72 38%	79 28%	39 35%	45 29%	51 35%	33 28%
中堅の先生	517 52%	314 49%	203 57%	103 44%	74 58%	100 53%	156 55%	54 48%	84 54%	68 46%	61 51%
若手の先生	162 16%	107 17%	55 15%	41 18%	27 21%	17 9%	51 18%	19 17%	27 17%	29 20%	26 22%

道徳推進教師は、どのような教師が割り当てられているのかを尋ねると、「ベテラン」と「中堅」の教師が、84% を占めている。2017 年度・2018 年度調査と同様の結果である。「ベテラン」と「中堅」については、地域別では、「北海道・東北」が 91% で一番高

い。「若手」の教師は、「九州・沖縄」が 22% で高い。校種別、学校規模、地域別を比較して見ると、おおよそ「ベテラン」３割、「中堅」５割、「若手」２割の実態を指摘でき る。

(２) 道徳教育を重視している学校の割合

表２

学校経営において道徳教育が重視されていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
重視されている	351	246	105	93	46	69	92	41	46	57	49
	35%	38%	29%	40%	36%	36%	32%	36%	30%	38%	40%
まあまあ重視されている	566	346	220	123	68	111	162	61	94	80	62
	57%	54%	61%	52%	53%	58%	56%	54%	60%	53%	51%
あまり重視されていない	77	45	32	17	14	10	30	11	14	11	10
	8%	7%	9%	7%	11%	5%	11%	10%	9%	7%	8%
重視されていない	8	5	3	2	1	0	3	0	2	2	1
	1%	1%	1%	1%	1%	0%	1%	0%	1%	1%	1%

学校経営において、道徳教育が「重視されている」「まあまあ重視されている」と回答した学校が９割である。校種別、学校規模別、地域別にみても、ほぼ同様である。この傾向は、2017 年度・2018 年度の結果と同じである。この３年間、ずっと道徳教育が重視されてきたことになる。

２・全体計画について

(１) 道徳教育を推進させるための組織

表３

学校全体で道徳教育を推進するための組織を作っていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
前から作っている	566	348	218	102	90	81	194	53	108	73	67
	59%	57%	63%	45%	73%	46%	71%	48%	70%	50%	59%
今年度作った	33	14	19	7	2	6	10	1	7	4	5
	3%	2%	6%	3%	2%	3%	4%	1%	5%	3%	4%
作っていない	359	249	110	118	31	89	71	56	39	68	42
	38%	41%	32%	52%	25%	51%	26%	51%	25%	47%	37%

道徳教育推進のための組織を作っている学校は、62% である。大規模校（「701 名以上」）の組織づくりの方が進んでおり、小規模校（「200 人以下」）との差は、27ポイントとなっている。小規模校では「作っていない」が５割であるが、学校全体で取り組んでいる割合が高いと考えられる。地域別に見ると、差が大きい。「北海道・東北」「北陸・中部」「中国・四国」の組織づくりが低い。小規模校が多いことが原因とも考えられる。

（２）全体計画に書かれている内容の達成度

表４

全体計画に書かれていることがどの程度達成されていると評価できるでしょうか

	回答														
	だいたい達成されている			まあまあ達成されている			あまり達成されていない			見直しが必要である			全体計画に示していない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1.「特別の教科 道徳」の指導	393 39%	255 40%	138 38%	530 53%	347 54%	183 51%	62 6%	32 5%	30 8%	10 1%	5 1%	5 1%	3 0%	1 0%	2 1%
2. 各学年の道徳教育	335 34%	210 33%	125 35%	589 59%	391 61%	198 55%	58 6%	28 4%	26 8%	16 2%	10 2%	6 2%	4 0%	2 0%	2 1%
3. 各学級の道徳教育	311 31%	197 31%	114 32%	586 60%	385 62%	201 56%	60 6%	32 5%	28 8%	13 1%	9 1%	4 1%	19 2%	7 1%	12 3%
4. 各学校の特質に応じた道徳教育	115 12%	80 13%	35 10%	537 54%	374 59%	163 46%	300 30%	163 26%	137 38%	37 4%	17 3%	20 6%	8 1%	5 1%	3 1%
5. 特別活動における道徳教育	128 13%	93 15%	35 10%	606 61%	396 62%	210 58%	212 21%	121 19%	91 25%	47 5%	27 4%	20 6%	5 1%	3 1%	2 1%
6. 総合的な学習の時間における道徳教育	96 10%	67 11%	29 8%	545 55%	355 56%	190 53%	282 28%	173 27%	109 30%	59 6%	37 6%	22 6%	15 2%	7 1%	8 2%
7. 日常生活における道徳教育	229 23%	159 25%	70 20%	619 62%	402 63%	217 61%	118 12%	63 10%	55 15%	17 2%	9 1%	8 2%	13 1%	5 1%	8 2%
8. 家庭との連携による道徳教育	84 8%	69 11%	15 4%	446 45%	325 51%	121 34%	358 36%	194 30%	164 46%	78 8%	41 6%	37 10%	31 3%	10 2%	21 6%
9. 地域との連携による道徳教育	72 7%	57 9%	15 4%	382 38%	278 44%	104 29%	408 41%	250 37%	158 47%	93 9%	49 8%	44 12%	44 4%	17 3%	27 8%
10. 重点目標の達成	225 23%	156 24%	69 19%	594 60%	385 60%	209 58%	132 13%	74 12%	58 16%	37 4%	21 3%	16 5%	9 1%	3 1%	6 2%

全体計画で示している内容について、教育活動のなかでどの程度達成されていると評価できるかを尋ねた。全体で見ると「だいたい達成されている」「まあまあ達成されてい　る」と回答した学校が、45% ～ 93% となっており、項目間で大きな開きがある。

達成の評価が高い項目は、上位から「各学年の道徳教育」93%、「『特別の教科道徳』の指導」92%、「各学級の道徳教育」91% である。反対に、「あまり達成されていない」「見直しが必要である」の回答が多いのは、「地域との連携による道徳教育」50%、「家庭との連携による道徳教育」44% である。

達成の評価が低い２項目の校種別比較では、中学校の方がいずれも、達成できていないと答えている割合が高い。2018 年度結果との比較では、全体に、「あまり達成されていない」と評価した学校が増えている。期待値が上がっているともとらえられる。

（３）全体計画の見直し（教科化以降）

表５

「特別の教科道徳」が実施されて、全体計画の見直しをしましたか

	全体	校種別		学校規模			
		小学校	中学校	200人以下	201人～500人	501人～700人	701人以上
行っていない	57 6%	31 5%	26 7%	13 6%	29 6%	12 6%	4 3%
少し行った	203 21%	117 19%	86 24%	45 19%	95 21%	39 21%	27 22%
ある程度行った	322 33%	215 34%	107 30%	76 33%	150 33%	58 31%	45 36%
だいぶん行った	132 13%	84 13%	48 14%	26 11%	63 14%	26 14%	21 17%
全体的に見直した	274 28%	185 29%	89 25%	74 32%	120 26%	54 29%	28 22%

「特別の教科 道徳」が 2018 年に小学校で、2019 年に中学校で全面実施となったことを踏まえて、本調査では、2019 年度の実態について、見直しの程度を尋ねた。見直しを「行っていない」のは、6 % に過ぎず、反対に「全体的に見直した」のは、28% であった。程度の差こそあれ、9割以上の学校が見直しを行っている。新しい道徳教育に合わせて、改善を図ろうとしている現場の様子が見てとれる。

(4) 各教科等における道徳教育について

表6

道徳の指導内容項目と関連づけた教育活動を別葉として作成していますか

	全体	校種別		学校規模			
		小学校	中学校	200人以下	201人～500人	501人～700人	701人以上
作成しており、よく活用している	135 14%	105 17%	30 9%	37 16%	52 14%	18 10%	18 14%
作成しており、ときどき活用している	373 38%	268 42%	107 31%	80 35%	171 38%	72 38%	55 44%
作成しているが、あまり活用していない	266 27%	156 25%	110 31%	68 29%	123 27%	51 27%	30 24%
作成しているが、ほとんど活用していない	56 6%	34 5%	22 6%	13 6%	26 6%	11 6%	6 5%
作成していない	155 16%	73 12%	82 23%	33 14%	74 16%	37 20%	17 14%

各教科等における道徳教育を具体的に示した別葉を作成している学校は、84% である。「作成していない」学校が 16% で、小学校より中学校の方が 11ポイント高い。「作成しているが、あまり活用していない」「作成しているが、ほとんど活用していない」が全体で 33%となっている。別葉の作成が定着してきている一方で、活用しきれていないととらえている学校が、3割以上あるということである。

3 ・年間指導計画について

(1) 年間指導計画に書いている内容の変化 (教科化前との比較)

表7

「特別の教科道徳」になり、年間指導計画に書かれていることが変わりましたか

	簡略になった			変わらない			詳しくした			以前も今も書いていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．基本的発想	79 8%	48 8%	31 8%	431 45%	279 45%	152 44%	268 28%	167 27%	102 30%	186 19%	128 21%	58 17%
2．教育計画	57 6%	31 5%	26 8%	366 37%	235 37%	131 38%	185 19%	116 18%	69 20%	372 38%	250 40%	122 35%
3．単元の計画に関すること	46 5%	26 4%	20 6%	454 47%	304 49%	150 44%	186 19%	113 18%	73 21%	286 29%	184 29%	102 30%
4．事後の指導に関すること	41 4%	26 4%	15 4%	448 46%	300 48%	149 43%	212 22%	126 20%	86 25%	269 28%	172 28%	97 28%
5．家庭との連携に関すること	24 3%	16 3%	8 2%	548 57%	346 56%	200 59%	150 16%	113 18%	37 11%	241 25%	145 23%	96 28%
6．地域との連携に関すること	29 3%	20 3%	9 3%	567 59%	359 58%	208 61%	181 19%	99 16%	82 24%	234 24%	140 23%	94 27%
7．各教科等との関連について	37 4%	25 4%	12 4%	510 53%	318 53%	192 56%	304 33%	216 35%	88 26%	85 9%	43 7%	42 12%

年間指導計画に書いている内容ごとに、教科化後の変化について尋ねた。「詳しくした」内容は、上位から、「各教科等との関連について」33%、「基本的発問」28%、「事後の指導に関すること」22% となっている。そのうち「各教科等との関連について」は、校種別で大きな差があり、小学校の方が 10ポイント高く「詳しくした」と回答している。「板書計画」について「以前も今も書いていない」学校が 38% だが、逆に年間指導計画に書いている学校が 62% ということになる。「板書計画」を年間指導計画に書いているのは、2017 年度（24%）・2018 年度（58%）の結果と比較すると、着実に上昇している。

(2) 道徳の教科書以外の教材について (補助教材としても含めて)

表 8

年間指導計画の中に、道徳の教科書の教材以外の教材が、各学年平均して、どの程度入れていますか

	全体											
	入れていない			1～2教材入れている			3～5教材入れている			6教材以上入れている		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．文科省で発行の「私たちの道徳」に掲載されている教材	539	375	164	308	171	137	53	28	24	90	59	31
	54%	58%	48%	31%	27%	39%	5%	5%	7%	9%	9%	9%
2．文部科学省で以前に開発された読み物教材	716	477	238	236	136	100	26	17	9	13	6	7
	72%	75%	67%	24%	21%	28%	3%	3%	3%	1%	1%	2%
3．都道府県や市町村などで開発された道徳教材	451	260	191	388	257	131	118	86	32	36	24	12
	45%	41%	54%	39%	42%	34%	12%	14%	9%	4%	4%	3%
4．民間が発行する副読本の教材	679	468	211	195	97	98	35	18	19	77	49	28
	69%	74%	58%	20%	15%	26%	4%	3%	5%	8%	8%	8%
5．学校が独自に開発した教材	736	533	205	194	78	116	39	12	27	15	7	8
	75%	85%	58%	20%	12%	33%	4%	2%	8%	2%	1%	2%
6．その他の教材	589	392	197	55	26	29	12	8	4	13	8	5
	88%	91%	83%	8%	6%	12%	2%	1%	3%	2%	2%	2%

道徳の教科書の教材以外で、各項目の教材をどの程度入れているか（補助教材としても含めて）について、4 段階で尋ねた。小学校、中学校ともに教科書が使われているが、他の教材も使われていることがわかる。『私たちの道徳』は、3 割の学校で「1 ～ 2 教材入れている」と答えており、「6 教材以上入れている」学校も 1 割近くある。また、「都道府県や市町村などで開発された道徳教材」も「1 ～ 2 教材入れている」学校が 39%、「3 ～ 5 教材入れている」学校が 12% となっている。

なお、「学校が独自に開発した教材」を「1 ～ 2 教材入れている」学校が 20%、「3 ～ 5 教材入れている」学校が 4 % となっており、どちらも中学校が 3 倍以上の割合になっている。道徳の授業は、身近な教材を活用することも大切である。各学校の努力をうかがうことができる。今後さらに、「学校が独自に開発した教材」の開発・活用が求められる。

(3) 一定期間の道徳授業を振り返る授業の効果

表 9

年間指導計画の中に、道徳の授業全体を振り返るような時間を設けた場合の効果はどうか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
効果的であった	146	61	85
	15%	10%	24%
ある程度効果的であった	339	206	133
	34%	32%	37%
あまり効果的ではなかった	28	16	12
	3%	3%	3%
設けていない	482	355	127
	48%	56%	36%

教科化された道徳の授業においては、各時間の学習内容が積み重なって効果を上げていくようにすることが大切である。そのためには、一定期間の道徳授業を振り返る取り組みが必要になる。そのような時間を設けているか、設けている場合はその効果はどうかを尋ねた。結果は、「設けていない」学校が 48%。小学校が 56%に対し、中学校は 36%と大きな開きがある。教科化された意識が中学校のほうが高いのかもしれない。2018 年度調査と比較すると、全体ではほとんど変わらないが、中学校で 16ﾎﾟｲﾝﾄ少なくなっている。つまり、道徳の授業を振り返る「時間を設けた」学校が 1 年間で 16ﾎﾟｲﾝﾄ増えているのである。

「時間を設けた」学校のうち、「効果的であった」と答えた学校が約 3 割、「ある程度効果的であった」と答えた学校が 7 割近くある（表 9 では設けていない学校も含めて割合を出しているので、それぞれを 2 倍にしている）。中学校のほうが、「効果的であった」と答えた学校が小学校の倍近くの割合になっている。

（４）重点的に指導した内容の効果

表 10

重点的に指導する内容項目について、効果的な指導ができましたか

	全体	校種別		学校規模	
		小学校	中学校	200人以下	701人以上
計画的に取組み効果も感じられた	457 46%	304 48%	153 43%	107 46%	61 48%
計画的に取り組んだが、あまり効果的ではなかった	204 21%	131 21%	73 20%	48 21%	30 24%
計画的には取り組めなかったが、効果的だった	178 18%	110 17%	68 19%	47 20%	17 13%
計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった	91 9%	51 8%	40 11%	19 8%	12 9%
行っていない	65 7%	42 7%	23 6%	13 6%	7 6%

重点的に指導する内容項目について尋ねた結果は、「計画的に取組み効果も感じられ　た」学校が 46%、「計画的には取り組めなかったが、効果的だった」が 18% で、計 64%の学校が「効果的だった」と回答している。校種別・学校規模別においてもそれほど差がない。「行っていない」学校が 7 %、「計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった」と回答した学校が 9 %ある。重点的指導は、学校の状況や社会的課題などを考慮して取り組むものであり、より効果的な重点的指導の工夫が求められる。

（５）2019 年度の年間指導計画の見直しについて

表11

今年度、この程度年間指導計画を見直しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
見直さなかった	230 23%	132 21%	98 27%
1回見直した	582 58%	415 65%	167 47%
2回見直した	131 13%	75 12%	56 16%
3回以上見直した	55 6%	18 3%	37 10%

2019 年度に年間指導計画を見直したかどうかについて尋ねると、「見直さなかった」が小学校 21%、中学校が 27%、「1回見直した」が小学校 65%、中学校が 47%となっている。「2回見直した」は全体で 13%、「3回以上見直した」は6%になっているが、いずれも中学校のほうが高くなっている。2018 年度と比較すると、全体的にほとんど同じような傾向にある。年間指導計画の見直しは、教科書使用前と同様に行われているととらえられる。

(6)学校全体で道徳の授業に取り組む体制

表 12

今年度、学校全体で道徳の授業に取り組もうとする体制は機能しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
機能したと思う	296 30%	170 27%	126 35%
だいたい機能したと思う	519 52%	332 52%	187 52%
あまり機能しなかったと思う	129 13%	98 15%	31 9%
来年度見直したい	33 3%	26 4%	7 2%
体制ができていない	18 2%	11 2%	7 2%

2017 年度では、「学校全体で取り組む体制ができているか」という問いに、95% の学校が「できている」と回答していた。2018 年度は「体制ができていない」学校は5%、2019 年度は2%と、ほとんどの学校において、学校全体の体制の中で取り組まれている。なお、2018 年度からは「体制が機能したか」という問いにしたところ、肯定的に「機能したと思う」「だいたい機能したと思う」と回答した学校が 80% であった。2019 年度は、「機能したと思う」「だいたい機能したと思う」と回答した学校が 82% であり、ほとんど変

わっていない。学校別でみると、中学校が、「機能したと思う」と回答した学校が 13ポイント増えている。

（木崎ちのぶ）

４・「特別の教科 道徳」の授業について

（１）教科書による授業

表 13

教科書を使うようになって、道徳の授業はしやすくなったように思いますか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変しやすくなったと思う	138 14%	97 15%	41 12%
だいぶんしやすくなったと思う	279 29%	197 31%	82 24%
まあまあしやすくなったと思う	259 27%	162 26%	97 28%
あまり変わらないと思う	224 23%	150 24%	74 21%
少ししにくくなったと思う	58 6%	16 3%	42 12%
だいぶんしにくくなったと思う	20 2%	7 1%	13 4%

「道徳の教科書を使うようになって、道徳の授業がしやすくなったか」という問いに、全体で、「大変しやすくなったと思う」が 14%、「だいぶんしやすくなったと思う」が 29%、「まあまあしやすくなったと思う」が 27%で、肯定的な回答をした学校が全体で 70%であった。学校段階別では、小学校は 72%、中学校は 64%であった。小学校については、2018 年度も同じ質問をしたが、ほとんど同じ回答であった。ただし、「大変しやすくなった」が、わずかではあるが３ポイント増えている。

なお、「少ししにくくなったと思う」が、小学校３%に対し中学校は 12%、「だいぶんしにくくなったと思う」が、小学校１%に対して中学校は４%になっている。

（２）教科書の活用

表 14

教科書をどの程度活用しましたか

	回答											
	そのまま活用した			少し変えた			ある程度変えた			だいぶん変えた		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．年間指導計画の上題配列（指導の順番が教科書通りであったかどうか）	303 31%	210 33%	93 26%	415 42%	290 45%	125 35%	158 16%	87 14%	71 20%	118 12%	52 8%	66 19%
2．教材	618 62%	424 66%	194 55%	303 30%	175 27%	128 36%	60 6%	35 6%	25 7%	15 2%	6 1%	9 3%
3．ねらい	575 58%	374 58%	201 57%	342 34%	216 34%	126 35%	63 6%	41 6%	22 6%	16 2%	9 1%	7 2%
4．検定の進め方	220 22%	147 23%	73 21%	508 51%	337 53%	171 48%	211 21%	123 19%	88 25%	57 6%	33 5%	24 7%
5．重点的記録	388 39%	269 42%	119 33%	468 47%	293 46%	175 49%	112 11%	61 10%	51 14%	23 2%	12 2%	11 3%

2019 年度「教科書をどの程度活用したか」を尋ねた結果は、年間指導計画の主題配列に関わっては、「そのまま活用した」が小学校で 33%、中学校で 26%であった。「だいぶん変えた」が小学校で 8 %、中学校で 19%であった。使用している教科書を発行している出版社が提供する主題配列をそのまま使うのではなく、7 割の学校において、自校に合う形で修正されている。その傾向は中学校のほうが強い。

具体的な修正内容としては、「教材」に関して、小学校が 34%、中学校が 45%の学校において変えている。「少し変えた」学校がほとんどであり、小学校は全体の 27%、中学校は 36%であった。「ねらい」は、「変えた」学校が小学校 42%、中学校 43%となっており、「少し変えている」学校が多い。

また、「授業の進め方」においては、小学校、中学校ともに 8 割近くの学校において変えており、「少し変えた」が小学校 53%、中学校が 48%である。「ある程度変えた」学校も、小学校で 19%、中学校は 25%となっている。

さらに、「重点的指導」においては、小学校で 58%、中学校で 67%の学校において変えている。「少し変えた」が全体で 47%、「ある程度変えた」が 11%になっている。指導の時期や、重点的に指導する内容や、実際の授業展開においては、児童生徒の状態や学校・学級の状況に応じて、柔軟に対応しているととらえられる。

(3) 授業について

表 15

貴校の道徳授業を全体的に見て、よくなってきていると感じますか

	回答											
	かなりよくなっている			だいぶんよくなっている			ほとんど変わっていない			よくなっているとは感じない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．低学年の道徳授業	177	105	72	648	430	218	163	100	63	6	2	4
（中学校では1年）	18%	17%	20%	66%	68%	61%	16%	16%	18%	1%	0%	1%
2．中学年の道徳授業	163	99	64	657	426	229	168	106	62	7	4	3
（中学校では2年）	16%	16%	18%	66%	67%	64%	17%	17%	17%	1%	1%	1%
3．高学年の道徳授業	157	91	66	642	427	215	184	114	70	11	5	6
（中学校では3年）	16%	14%	19%	65%	67%	60%	19%	18%	20%	1%	1%	2%
4．事前の指導の工夫	84	48	36	465	296	169	434	286	148	9	5	4
	9%	8%	10%	47%	47%	47%	44%	45%	42%	1%	1%	1%
5．導入の工夫	145	97	48	626	398	228	210	139	80	4	2	2
	15%	15%	13%	63%	63%	64%	22%	22%	22%	0%	0%	1%
6．教材提示の工夫	158	106	52	604	391	213	229	137	92	2	2	0
	16%	17%	15%	61%	62%	60%	23%	22%	26%	0%	0%	0%
7．展開の工夫	159	99	60	633	406	229	197	124	73	5	5	0
	16%	16%	17%	64%	64%	63%	20%	20%	20%	1%	1%	0%
8．終末の工夫	127	77	50	599	382	217	262	174	88	5	3	2
	13%	12%	14%	60%	60%	61%	26%	27%	25%	1%	1%	1%
9．教材の多様性	97	53	44	483	316	167	382	249	133	32	18	14
	10%	8%	12%	49%	50%	47%	38%	39%	37%	3%	3%	4%
10．事後の指導の工夫	61	37	24	486	314	172	433	280	153	11	5	6
	6%	6%	7%	49%	49%	48%	44%	44%	43%	1%	1%	2%
11．板書の工夫	168	121	47	555	379	176	263	134	129	8	2	6
	17%	19%	13%	56%	60%	49%	27%	21%	36%	1%	0%	2%
12．子どもたちへの対応	160	101	64	623	411	212	203	122	81	2	2	0
	17%	16%	18%	63%	65%	59%	20%	19%	23%	0%	0%	0%
13．授業の評価	178	98	80	644	422	222	166	106	49	12	7	5
	18%	16%	23%	66%	67%	62%	16%	17%	14%	1%	1%	1%

「貴校の道徳の授業がよくなってきていると感じるか」を、授業を充実させるポイントなど 13 項目にわたって尋ねた。すべてにおいて、「よくなっているとは感じない」という回答が、小学校、中学校ともに１％前後であった。学校現場では、道徳の授業改善に向けて積極的に取り組まれ、効果も実感されている様子を読み取ることができる。

「ほとんど変わっていない」と感じている学校が多い項目は、まず、「事前の指導の工 夫」と「事後の指導の工夫」で、ともに 44％であった。小学校、中学校ともほぼ同じ割合である。次が、「教材の多様性」で 38％。ここでも小学校、中学校ともにほぼ同じ割合である。事前指導の工夫や事後指導の工夫、教材の多様性については、道徳の授業を充実させる大きなポイントであり、より意識的に取り組んでいく必要がある。

なお、これら以外の項目については、「ほとんど変わっていない」と回答した学校は少ないが、「かなりよくなっている」と回答した学校は 15 ～ 18％である。さらにこれらの項目についても、より効果的な指導ができるように取り組んでいく必要がある。また、小学校と、中学校を比較すると、「板書の工夫」については、「かなりよくなっている」と回答した学校では、中学校が小学校より６ﾎﾟｲﾝﾄ低くなっている。中学校における道徳の授業改善の大きなポイントといえそうである。

(４) 授業についての効果

表 16

次のような道徳の授業について、どの程度効果を感じていますか

	回答								
	効果を感じている			まあまあ効果を感じる			あまり効果を感じない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．登場人物への自我関与が中心の授業	250 26%	174 28%	76 22%	642 66%	408 65%	234 67%	83 9%	46 7%	37 11%
2．問題解決的な授業	261 27%	166 26%	95 27%	616 63%	404 64%	212 61%	101 10%	59 9%	42 12%
3．道徳的行為に関する体験的な授業	210 22%	127 21%	83 25%	584 62%	391 64%	193 58%	148 16%	91 15%	57 17%
4．各教科との関連を重視した授業	76 8%	59 10%	17 6%	502 55%	374 61%	128 42%	341 37%	184 30%	157 52%
5．学級活動との関連を重視した授業	181 19%	113 18%	68 20%	631 66%	424 68%	207 61%	150 16%	87 14%	63 19%
6．学校行事との関連を重視した授業	225 23%	138 22%	87 25%	603 62%	394 63%	209 60%	143 15%	91 15%	52 15%
7．総合的な学習の時間との関連を重視した授業	124 13%	82 13%	42 13%	539 58%	357 58%	182 56%	271 29%	172 28%	99 31%
8．学級経営との関連を重視した授業	255 26%	187 30%	68 20%	606 62%	390 62%	216 63%	112 12%	55 9%	57 17%
9．日常生活との関連を重視した授業	296 31%	205 33%	91 27%	598 62%	379 60%	219 64%	77 8%	45 7%	32 9%

道徳の授業について、様々な方法が提案されているが、その効果を９項目にわたって尋ねた。まず、「道徳教育にかかわる評価等の在り方に関する専門家会議」の報告に添付された「道徳科における質の高い多様な指導方法について」で提案された３つの学習について見てみると、「登場人物への自我関与が中心の授業」は、小学校で 93%の学校が、中学校では89%の学校で「効果を感じる」「まあまあ効果を感じる」と回答している。「問題解決的な授業」は、小学校が 90%、中学校が 88%、「道徳的行為に関する体験的な授業」は、小学校が 85%、中学校が 83%の学校において何らかの効果を感じている。

また、学校全体で取り組む道徳教育の要の役割を果たすのに大切な、様々な教育活動や日常生活と関連を図る指導については、次のような結果になっている。最もよく効果を感じているのは、「日常生活との関連を重視した授業」である。小学校で 93%、中学校で91%の学校で「効果を感じている」「まあまあ効果を感じている」と回答している。「学 級経営との関連を重視した授業」でも、小学校で 92%、中学校で 83%であった。

逆に、これからの課題としてとらえられるのは「各教科との関連を重視した授業」である。「効果を感じている」「まあまあ効果を感じている」と回答した学校は、小学校で71%、中学校で 48%である。教科担任制をとる中学校では難しい点が多くあるが、まずは自分の担当する科目と連携することが考えられる。「特別の教科道徳」が道徳教育の要としての役割を果たすためには、各教科との関連をいかに図るかが大きな課題であるといえよう。

「学級活動との関連を重視した授業」では、何らかの効果を感じている学校が、小学校で 86%、中学校で 81%。「学校行事との関連を重視した授業」は、小学校が 85%、中学校が 85%。「総合的な学習の時間との関連を重視した授業」は、小学校 71%、中学校が69%となっている。これらは小学校と中学校の差がほとんどない。特に「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通してよりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力」を養うことを目標とする総合的な学習の時間との関連を重視した授業を、一層取り組む必要がある。

(５) 道徳ノート、道徳ファイル、指導用のノート等の効果

表 17

道徳ノートは効果的でしたか

1．道徳ノート	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	152 15%	99 16%	53 15%
ある程度効果的であった	325 33%	238 38%	87 25%
少しは効果的であった	84 9%	50 8%	34 10%
改善を必要とする	42 4%	28 4%	14 4%
持たせていない	383 39%	219 35%	164 47%

表 18

道徳ファイルは効果的でしたか

2．道徳ファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	126 13%	74 12%	52 15%
ある程度効果的であった	357 36%	229 36%	128 36%
少しは効果的であった	117 12%	64 10%	53 15%
改善を必要とする	28 3%	16 3%	12 3%
持たせていない	359 36%	252 40%	107 30%

道徳ノートと道徳ファイルの効果について尋ねた。道徳ノートは、「持たせていない」という回答が小学校 35%、中学校 47%であった。持たせれば、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が小学校 62%（2018 年度 67%）、中学校 50%（2018年度 40%）となっている（「持たせている」学校のみで評価を計算すると、それぞれの割合がさらに高くなる）。道徳ノートを持たせて活用の仕方を工夫していくことが求められる。道徳ファイルについても同様で、「持たせていないと」いう回答が小学校 40%、中学校30%であった。持たせれば、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が小学校 58%（2018 年度 48%）、中学校 66%（2018 年度 51%）となっている（道徳ノートと同様、「持たせている」学校のみで評価を計算すると、それぞれの割合がさらに高くなる）。道徳ファイルの方が活用されやすい傾向がみられる。特に、中学校では、 様々な資料を配布して授業をし、それらを綴じていくという方法がとられているのではないかと考えられる。

表 19

道徳教育の重点的指導用のノートかファイル（冊子も含む）は効果的でしたか

3．重点的指導用のノートかファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	45	27	18
	5%	4%	5%
ある程度効果的であった	148	97	51
	15%	15%	15%
少しは効果的であった	61	38	23
	6%	6%	7%
改善を必要とする	23	15	8
	2%	2%	2%
持たせていない	703	452	251
	72%	72%	72%

道徳教育の重点的指導用ノートやファイルの効果について尋ねた。まず、そのようなノートやファイルを「持たせていない」という回答が、小・中学校ともに 72% であった。持たせている学校においては、「大変効果的」「ある程度効果的」「少しは効果的」という回答が、26%であった（「持たせている」学校のみで評価を計算すると、約 3 倍の 75%近くになる）。道徳教育の重点的指導用のノートやファイルがあれば、より自覚的に、より集中的に道徳学習に取り組むことができる。今後の課題といえよう。

（６）現在使用している教科書についての意見

表 20

現在使用している教科書について、どのような意見をおもちでしょうか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
このままでよい	628 63%	423 66%	205 58%
少し改善してほしい	286 29%	179 28%	107 30%
かなり改善してほしい	63 6%	28 4%	35 10%
大幅に改善してほしい	16 2%	8 1%	8 2%

現在使用している教科書についての意見を尋ねた。「このままでよい」という回答は、小学校 66%、中学校 58%で、6割である。「少し改善してほしい」は全体で3割、残り1割（小学校では5％）が「かなり改善」「大幅改善」を求めている。9割がおおむね満足している。改善してほしい点は自由記述で尋ねている。詳細は、自由記述の分析で述べる。

(7)「特別の教科 道徳」の評価について

表 21

「特別の教科道徳」の評価について、今年度どのようにしましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
各学期ごとに行った	426 43%	309 48%	117 33%	99 42%	54 43%	58 31%	167 59%	38 34%	73 47%	48 32%	48 39%
年度末にまとめて行った	496 50%	277 43%	219 61%	118 50%	60 47%	109 57%	105 37%	65 58%	73 47%	88 59%	66 54%
その他	75 8%	54 8%	21 6%	18 8%	13 10%	23 12%	13 5%	10 9%	9 6%	13 9%	8 7%

「特別の教科 道徳」の評価の時期について尋ねた。全体でみると「各学期ごと」が43%、「年度末」が 50%、「その他」の回答も 8％であった。2018 年度の調査で、小学校のみに尋ねたが、今回とほぼ同じ結果であった。校種別では、小学校は「各学期ごと」が若干多く（48%）、中学校は「年度末」が多い（61%）。学校規模では、200 人以下と 700 人以上で見ると、200 人以下の学校の方が、若干ではあるが「年度末」が多い。地域別では、「各学期ごと」が多いのは、関東・甲信越が 59%（「年度末」は 37%）、近畿が 47%（「年度末」と同数）である。「年度末」が多いのは、北海道・東北や北陸・中部、中国・四国、九州・沖縄で6割近くである。各教科の評価は学期ごとに行われていることから「特別の教科 道徳」も学期ごとに行うようにすることが求められる。

(8) 学校全体での道徳授業研修

表 22　　今年度、学校全体で道徳授業の研修をどの程度行いましたか

	全体	校種別		学校規模	
		小学校	中学校	200人以下	701人以上
行っていない	174 18%	137 22%	37 10%	48 21%	30 24%
1～3回行った	683 69%	416 65%	267 75%	149 64%	76 60%
4～6回行った	73 7%	43 7%	30 8%	16 7%	15 12%
7回以上	63 6%	41 6%	22 6%	21 9%	6 5%

学校全体での道徳の授業研修を「行っていない」のは、全体では 18%である。学校段階別では小学校が 22%、中学校が 10%である。2018 年度は小学校 10%、中学校 16%であったものが、大きく逆転している。「特別の教科 道徳」が全面実施されて一年目と二年目の違いが出ているのであろうか。最も多いのは「１～３回行った」で、小学校 65%、中学校 75% である。学期に１回あるいは夏休みに研修を行うのが一般的かと推測される。2018 年度、「4～6回行った」は小学校、中学校ともに 14%で、2019 年度はともに半減している。大きな課題を指摘できる。

(９)道徳授業についての話し合い

表 23

各学年や学年段階で、道徳授業の話し合いはどの程度行われていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
よく行われている	161 16%	72 11%	89 25%	35 15%	19 15%	30 16%	43 15%	11 10%	34 22%	25 17%	20 16%
ときどき行われている	530 53%	337 53%	193 54%	106 46%	69 54%	89 47%	156 55%	59 53%	89 57%	75 50%	68 56%
あまり行われていない	219 22%	163 26%	56 16%	59 25%	28 22%	46 24%	62 22%	30 27%	26 17%	32 22%	25 21%
ほとんど行われていない	83 8%	64 10%	19 5%	33 14%	11 9%	24 13%	23 8%	11 10%	6 4%	17 11%	8 7%

では、各学年などで道徳授業の話し合いはどの程度なされているであろうか。2019 年度に「よく行われている」「ときどき行われている」と回答した学校が、全体で 69%（2018 年度は 74%、2017 年度は 61%）であり、2018 年度と比べて５ポイント下がっている。しかし、中学校は 79%（2018 年度は 74%）で５ポイント上昇している。地域別では、近畿 79%、九州・沖縄 71%、関東・甲信越 70%と近畿が高い。道徳の授業について、職員室や学年会議で話題になっていることがうかがえるが、「ほとんど行われていない」と回答した学校が、小学校で 10%、中学校で５%ある。

５・道徳教育に関する先生方の意識

(１)道徳教育に対する先生方の意識

表 24

回答者の勤務する学校における教員の実態についての意識

	回答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．道徳教育の大切さについて理解している	479 48%	323 50%	156 44%	481 48%	296 46%	185 52%	35 4%	18 3%	17 5%	4 0%	4 1%	0 0%
2．道徳教育の目標について理解している	296 30%	200 31%	96 27%	598 60%	386 60%	212 59%	96 10%	48 8%	48 13%	9 1%	6 1%	3 1%
3．「特別の教科 道徳」の大切さについて理解している	398 40%	273 43%	125 35%	536 54%	329 52%	207 58%	56 6%	32 5%	24 7%	8 1%	5 1%	3 1%
4．「特別の教科 道徳」の目標について理解している	252 25%	180 28%	72 20%	629 63%	399 62%	230 64%	109 11%	55 9%	54 15%	8 1%	5 1%	3 1%
5．「特別の教科 道徳」の指導方法について理解している	202 20%	132 21%	70 20%	653 65%	420 66%	233 65%	134 13%	82 13%	52 15%	10 1%	6 1%	4 1%
6．「特別の教科 道徳」の評価について理解している	190 19%	122 19%	68 19%	624 63%	410 64%	214 60%	167 17%	99 16%	68 19%	18 2%	9 1%	9 3%
7．道徳教育に熱心な教師が多い	171 17%	109 17%	62 17%	561 56%	376 59%	185 52%	248 25%	142 22%	106 30%	18 2%	12 2%	6 2%

8．道徳の授業に熱心な教師が多い	163 16%	103 16%	60 17%	543 55%	368 58%	175 49%	273 27%	157 24%	116 32%	18 2%	11 2%	7 2%
9．道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い	121 12%	81 13%	40 11%	515 52%	341 54%	174 49%	330 33%	195 31%	135 38%	24 2%	15 2%	9 3%
10．道徳の授業を楽しんでいる教師が多い	71 7%	44 7%	27 8%	404 41%	286 45%	118 33%	482 49%	285 45%	197 55%	36 4%	21 3%	15 4%

次に、回答している先生から見た、勤務している学校の教員の道徳教育に対する意識について、尋ねた。「道徳教育の大切さ」「道徳教育の目標」「『特別の教科　道徳』の大切さ」「『特別の教科 道徳』の目標」、「『特別の教科 道徳』」の指導方法」については、理解している（「そう思う」「だいたいそう思う」）が 95%～ 86%である。「評価についての理解」は、「あまり思わない」が 17%で、2018 年度 25%であったのが 8 ポイント少なくなっており、理解が進んでいるととらえられる。これらの項目は、小学校と中学校でほとんど同じような傾向にある。

しかし、「道徳の授業に熱心な教師が多い」については、「あまり思わない」「ほとんど思わない」が全体で 29%、小学校では 26%、中学校では 34%であった。「授業を楽しんでいる教師が多い」は、「あまり思わない」「ほとんど思わない」が全体で 53%、小学校では 48%、中学校では 59%であった。小学校と中学校で比較すると、中学校の方がいずれも 10 ポイント前後高い。道徳の授業に熱心なあまり、授業が楽しめなくなっていることも考えられる。どうすれば道徳の授業を楽しくできるかを考えながら、授業の展開を熱心に考えるという姿勢が求められる。

「道徳教育は自分自身のことであると思っている教師が多い」に対し、64%が肯定的に回答している（2018 年度 63%であり、ほとんど変わらない）。道徳教育は、子どもの課題であると同時に、大人の課題でもある。自分自身の道徳教育でもあるという認識で、児童生徒とともに取り組んでいく心構えが求められる。

(2) 教師から見た家庭や地域の人々への意識

表 25

先生から見て、この 1 年を振り返って家庭や地域の様子はいかがですか

	回答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．子どもの道徳教育について熱心な保護者が多くなった	27	17	5	220	188	51	678	398	730	122	53	69
	2%	3%	1%	22%	27%	14%	65%	63%	65%	12%	8%	19%
2．子どもの道徳教育について熱心な地域の人たちが多くなった	20	15	5	193	157	36	680	397	238	151	68	83
	2%	2%	1%	19%	25%	10%	63%	62%	65%	15%	11%	23%
3．地域の人たちの協力が得られるようになった	46	37	9	248	198	50	546	336	210	151	64	87
	5%	6%	3%	25%	31%	14%	55%	53%	58%	15%	10%	24%
4．保護者の協力が得られるようになった	33	27	6	297	225	71	528	328	200	131	53	78
	3%	4%	2%	30%	36%	20%	55%	52%	56%	13%	8%	22%

回答している先生から見た家庭や地域の人々の意識について尋ねた結果を見ると、「子どもの道徳教育に熱心な保護者が多い」では、否定的に答えた先生が小学校 71%（2018 年度 56%、2017 年度 53%）、中学校は 84%（2018 年度 72%、2017 年度 61%）で、大幅に増えていっている。家庭では、いろいろな考えをもつ保護者に育てられており、それぞれの家庭において何らかの道徳教育が行われている。それらを大切にしながらも、共に生きるという視点から学校で学ぶ道徳教育と関連を図っていくことが求められる。

また、「地域の人たちの協力が得られている」や「保護者の協力が得られている」については、肯定的に答えた回答者は３割である（2018 年度は５～６割）。2018 年度と比べて大幅に減少している要因として、学校側の要求や期待が高まっていることも挙げられるかもしれないが、大きな課題である。学校の取り組みを保護者や地域の人々にわかるように広報活動を工夫したり、保護者参観などに道徳のノートを見せて、心を豊かに育んでいる様子を伝えたりすることなどを工夫して、保護者や地域の人々が自発的に協力したいと思える状況を創っていくことが求められるといえよう。

(３)「特別の教科 道徳」になったことについての意識

表 26

「特別の教科道徳」になったことについて、どう思いますか

	全体	校種別		地域の環境	
		小学校	中学校	農山漁村	近郊・新興住宅
よかったと思う	316 32%	215 34%	101 29%	126 31%	149 30%
まあまあよかったと思う	440 45%	278 44%	162 46%	185 45%	228 46%
あまりよかったとは思わない	180 18%	111 18%	69 20%	78 19%	95 19%
よかったとは思わない	46 5%	24 4%	22 6%	20 5%	23 5%

道徳が教科化になったことについてどう思うかを尋ねた。「よかった」「まあまあよかった」という肯定的回答が、全体で 77%であり、小学校では 78%、中学校では 75%であった。地域環境で比較すると、農山漁村にある学校と、近郊・新興住宅地にある学校とでは、ほとんど差がなかった。ほぼ４分の１の先生において道徳の教科化に否定的であるということを、今後の課題として真剣に考える必要がある。自分の考えを聞いてもらえる道徳の授業は好きだという子どもたちも多い。子どもたちの言動が変わってくると手ごたえがあり、毎週授業をすることへの負担感が、期待感に変わるのではないだろうか。

なお、この問いに対する自由記述については、後ほど詳しく見ていく。

(4) 教師の道徳教育に対する意識

表 27

道徳教育に対する先生の意識

	回答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任
1．道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる	946 96%	97 92%	151 96%	637 96%	61 98%	41 4%	9 9%	6 4%	25 4%	1 2%
2．教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと語るべきだ	910 93%	105 97%	143 91%	605 91%	57 92%	80 8%	3 3%	15 10%	57 9%	5 8%
3．道徳教育は、倫理的な道徳性の育成が根幹にあって、自主的な道徳性がはぐくまれる	901 92%	98 94%	144 92%	603 92%	56 90%	76 8%	6 6%	13 8%	51 8%	6 10%
4．どのような子どもたちも、学校に来ればしっかりと成長できる	854 87%	93 86%	136 88%	571 87%	52 84%	132 13%	15 14%	19 12%	88 13%	10 16%
5．学力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	881 90%	95 89%	139 89%	590 90%	57 92%	102 10%	12 11%	17 11%	68 10%	5 8%
6．体力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	700 71%	80 74%	117 75%	460 70%	43 69%	286 29%	28 26%	39 25%	200 30%	19 31%
7．いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される	962 97%	102 94%	155 98%	645 98%	60 97%	27 3%	6 6%	3 2%	16 2%	2 3%
8．道徳教育を充実させることで家庭との連携が深まる	842 85%	99 93%	136 87%	556 84%	51 82%	145 15%	8 8%	21 13%	105 16%	11 18%
9．道徳教育を充実させることで地域との連携が深まる	802 81%	100 94%	129 82%	523 79%	50 81%	184 19%	7 7%	28 18%	137 21%	12 19%
10．「特別の教科 道徳」の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業ができる	391 40%	44 41%	72 46%	251 38%	24 39%	594 60%	64 59%	85 54%	407 62%	38 61%
11．教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	773 79%	79 75%	117 75%	529 80%	48 77%	209 21%	27 26%	39 25%	129 20%	14 23%

次に、回答している先生の道徳教育に関する意識を尋ねた。2018 年度、2017 年度に比べ、どの項目も大幅に肯定的回答が上昇している。特に高いのが「道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる」（2019 年度 96%、2018 年度 91%）や「いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される」（2019 年度 97%、2018 年度 85%）である。ほかにも多くの項目が 9 割を超えている。回答者に注目すると、職階別の回答には、ほとんど差がみられない。道徳と体力との関連については、3 割（2018 年度 5 割）が「そう思わない」と回答しており、2018 年度より 2 割減少している。健康意識の高まりで、体力や健康の維持はよりよく生きることと関連づけられつつあるととらえることもできるのではないか。道徳の授業を年間 40 時間するという意見については、否定的な回答が 6 割（2018 年度 8 割）で、ここでも 2 割減少している。これも、道徳の授業の大切さを実感されている先生方の意識が反映しているとも考えられる。副校長（教頭）の肯定的な回答が高いので、将来校長になられたときに道徳の時間数についてもっと柔軟に対応できていくのではないだろうか。教員養成においても、「もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図る」べきだとする意識に対する回

答が、2018 年度は６割であったのに、2019 年度は８割と大きく伸びている。特に推進教師がそのように考えている傾向がある。道徳教育に関して専門性の高い教員の養成が、大学での教員養成段階から求められているといえよう。

(５) 道徳教育に対する要望

表 28

道徳教育に対する先生の要望

	回答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長（教頭）	推進教師（道徳主任）	教務主任 研究主任
1．道徳教育を充実させるための特別予算がほしい	465 47%	62 57%	76 50%	302 46%	25 37%	519 53%	47 43%	76 50%	355 54%	39 63%
2．道徳教育の指定校を多くしてほしい	196 20%	20 18%	29 19%	142 21%	5 8%	797 80%	89 82%	126 82%	523 79%	57 92%
3．道徳教育の専門教師を加配してほしい	535 54%	50 46%	81 52%	375 56%	29 47%	458 46%	59 54%	76 48%	290 44%	33 53%
4．道徳教育研修の機会を多くしてほしい	673 68%	64 59%	99 63%	474 71%	36 58%	319 32%	45 41%	58 37%	190 29%	26 42%
5．文部科学省は道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	665 67%	54 50%	89 57%	481 72%	41 66%	329 33%	55 51%	68 43%	185 28%	21 34%
6．文部科学省は「特別の教科 道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	696 70%	59 55%	98 62%	496 75%	43 69%	295 30%	49 45%	59 38%	169 25%	19 31%

これからの道徳教育に対する要望では、道徳教育や「特別の教科 道徳」の授業の進め方についての資料がほしいという要望が 70%（2018 年度 79%）と高い。「研修の機会を多くしてほしい」は、68%（2018 年度 79%）、「特別予算がほしい」は、47%（2018 年度 62%）で、予算や資料等への要望より研修がしたいという傾向にある。しかし、いずれも「そう思う」率は低下している。これらについては、自由記述の内容分析で詳細を見ていく。

（谷山優子）

６・教師の道徳教育に対する意識の傾向性 (因子分析による検討)

教師の道徳教育に対する意識（表 28）について、因子分析による検討を行った。回答している教員が 11 項目の意見についてどう思うか、主因子法による因子分析を行った。３因子構造が妥当であると考えられ、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。明確な３つの因子が得られた。累積寄与率は、48.92 であった。

取り出した３因子について、次のように解釈された。第１因子は、「道徳教育を充実させれば、学校教育を高めたり育むことができる」「道徳教育を積み重ねていけば、道徳性が高められる」などが密接に関連しており、「道徳教育有効性・道徳性向上因子」と名付けた。第２因子は、「道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる」「道徳教育を

充実させることで、家庭との連携が深まる」が密接に関連しており、「地域・家庭連携因子」とした。第３因子は、「教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにして充実を図るべきだ」「『特別の教科 道徳』の授業時数を 40 時間くらいにすると、もっと多様な授業が工夫できる」が密接に関連しており「制度充実因子」とした。 これら３つの因子が、教師の道徳教育に対する意識の傾向性の背景にあることが明らかになった。 表 29

教員意識尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

	因子		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
5．学力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	.708	.078	-.014
4．どのような子どもたちも、学校に来ればしっかりと成長できる	.624	-.065	.015
1．道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる	.619	.09	-.051
3．道徳教育は、他律的な道徳性の育成が根幹にあって自立的な道徳性がはぐくまれる	.612	-.033	-.009
6．体力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	.505	.181	.075
2．教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	.499	-.111	.098
7．いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される	.418	.288	-.039
8．道徳教育を充実させることで、家庭との連携が深まる	-.035	.967	.006
9．道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる	-.02	.923	.014
10．「特別の教科道徳」の授業時数を 40 時間くらいにすると、もっと多様な授業が工夫できる	-.066	.071	.715
11．教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	.144	-.06	.526

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 a
a 5 回の反復で回転が収束した。

（木崎ちのぶ）

Ⅲ・調査結果の特定の自由記述の分析

（「教科書について」、「『特別の教科 道徳』について」）

本調査においては、特定の自由記述を、２カ所でお願いした。それぞれについて、以下その内容を紹介し分析する。

１・教科書についての意見

まず、教科書についての意見を見てみたい。設問は、「現在使っておられる教科書につ

いて、どのような意見をおもちでしょうか。（　）内の番号で答えてください。「1 このままでよい」以外の番号を選択された方は、どのようなところを改善してほしいとお考えになられているかをいくつでも結構ですのでお書きください。」というものである。

なお、「1 このままでよい」は 63%、「2 少し改善してほしい」は 29%、「3　かなり改善してほしい」は６%、「4 大幅に改善してほしい」は２%であった。

(１) 教科書そのものについての意見

教科書そのものに対する意見を頻度順に挙げると次の通りである。（　）内は件数。

◆もっと身近な話題や関心がもてるものを取り上げてほしい (33)
◆内容が難しい・児童生徒の発達段階に合わせてほしい (31)
◆教材文の分量を少なくしてほしい・長すぎる (31)
◆子どもがもっと自分で考えられる教材にしてほしい (18)
◆内容項目が目立ち過ぎる・価値の押し付けになっている (18)
◆内容と道徳的価値・ねらい等を合わせてほしい (17)
◆　挿絵のイラストや色彩を工夫してほしい (14)
◆　葛藤のある教材を増やしてほしい (10)
◆　もっと多くの教材から選択できるようにしてほしい (８)
◆　教科書に発問や考える視点等を入れないでほしい (７)
◆　学校や地域の実態に即した教材を使わせてほしい (６)
◆　文中に答えが書いていないものを増やしてほしい (５)
◆　動画や DVD が見られるよう工夫してほしい (５)
◆　問題解決的な内容を増やしてほしい (４)
◆　教材数や説明を増やしてほしい (４)
◆　ソーシャルスキルの内容を増やしてほしい (３)
◆　子どもがもっと議論できる内容を入れてほしい (３)
◆　教材の並び順を工夫してほしい (３)
◆　家族やいのち等の教材は多様な家庭環境に配慮してほしい (３)
◆　登場人物の名前やカタカナの名前をわかりやすくしてほしい (３)
◆　実在の人物の生き方についての教材を増やしてほしい (３)
◆　内容項目を減らしてほしい (１)
◆　もっと多くの教材から選択できるようにしてほしい (１)
◆　誰もが授業ができる内容にしてほしい (１)

以上の意見をまとめると、次のようになる。

1） 内容に関心や興味がもてない・児童生徒の実態に合わない・心に響く感動的な教材が少ない等の理由から、教材をもっと児童生徒にとって身近な話題や関心がもてる内容を求める意見が多い。
2） 特に中学生の教材は一度読んで内容を理解するのが難しい・発達段階に合っていない等の理由から、内容理解がしやすく発達に即した教材を求める意見が多い。
3） 特に高学年・中学校の教材文が長いため考えさせる時間が十分にとれない・取り扱う内容項目が多い等の理由から、教材文を短くしてほしいとの意見が多い。
4） 道徳的価値に対して誘導的・押し付け的・教え込み的な感じがある・もっと児童生徒の多様な意見を引き出せるような内容にしてほしいとの意見も比較的多い。
5） 葛藤のある教材・問題解決型の教材を求める意見等から、児童生徒がもっと考えを深められる教材を求める意見も比較的多い。
6） 教材の内容と道徳的価値やねらいが合致していない・展開が難しい等との理由から、更なる教材の吟味と精選を求める意見も比較的多い。
7） 時代背景が古く、児童生徒が理解しにくかったり、内容に入りにくかったりしている・もっと現代的な課題を取り上げてほしい等の理由から、今の児童生徒の実態に即した教材の内容を求める意見も比較的多い。

（２）指導書に対する意見

指導書に対する意見を多い順に挙げると次のようになる。

◆ 発問が児童生徒の考えから離れている・難しい (16)
◆ 発問がねらいを意識し過ぎている (11)
◆ 一つの教材に様々なバリエーションを持たせた発問や展開がほしい （６）
◆ 発問が多すぎる （６）
◆ 議論できる発問を載せてほしい （２）
◆ 終末では教材から離れて考える発問例や展開例の工夫をしてほしい （２）
◆ 児童生徒の考えが深まるような発問を工夫してほしい （１）
◆ ねらいと指導がつながるような展開を工夫してほしい （１）
◆ 評価に係る児童の反応例をもっと入れてほしい （１）
◆ 内面的資質を重点的に育む指導書にしてほしい （１）

これらを整理すると、次のようにまとめられる。

1） 指導書の展開に準じて授業を行っている教員の意見として、発問が児童生徒の実態にそぐわない・深まらない・難しい等との理由から、発問の更なる吟味と精選を求める意見が多く見られる。

2） 指導書の発問が、ねらいを意識し過ぎるため児童生徒の多様な意見が出にくい・ねらいと発問が合っていない・展開に無理がある・授業の流れが児童生徒の思考の流れに合わない等の理由から、発問がねらいを意識し過ぎていて、児童生徒の思考に合っていないという意見も多く見られる。

3） 指導書に一つの展開や発問例を載せるのではなく、様々なバリエーションを考えた指導例を載せてほしいとの意見も比較的多く見られる。

4） 指導書の発問の数が多過ぎるとの意見も見られる。

5） 終末での教材を離れた展開例や具体的な発問例を求める意見も見られる。

6） 議論できる発問・児童生徒の考えが深まる発問・ねらいと展開が一致する発問・評価に係る児童生徒の反応例の掲載・内面的資質を重点的に育む指導書を求める意見も見られる。

(3) 道徳ノート・学習ノート・別冊ノート・ワークシートに対する意見

最後に、道徳ノート・学習ノート・別冊ノート・ワークシートに対する意見としては、次のものがあった。

◆道徳ノートやワークシート等が使いづらい (40)

◆ ワークシートや教科書への記入欄を工夫してほしい (7)

◆ ワークシートがデジタル教科書以外で使えるようにしてほしい (1)

◆ 応用がきかない (1)

このような意見をもう少し詳しく見ていくと次のようになる。

「道徳ノートやワークシートの使いづらさ」に寄せられた意見には、「道徳ノートに発問が記載されているため教師が考えた発問と異なる時に使えない」「記入欄のスペースが児童生徒の実態に合わせられない」「道徳ノートに発問が書いてあるため誘導的になる」「書くことが多くて話し合う時間が取られる」「自由記述にした方がよい」「教科書と一体型の学習ノートがよい」等の理由から、全体として道徳ノート等は使いづらいとの意見がかなり多く見られた。

（齋藤道子）

2 「特別の教科　道徳」についての意見

次に、自由記述で意見を求めた設問は、「道徳の時間が『特別の教科 道徳』になったことについて、あなたのご意見をお聞かせください。まず、（　　）内の番号を選んで、その理由を、書いてください。」というものである。なお、「1 よかったと思う」は32%、「2 まあまあよかったと思う」は 45%、「3 あまりよかったとは思わない」は

18%、「4　よかったとは思わない」は5%であった。

(1) 断然多い意見

全体の意見を見ると、次の３つの意見が突出している。

- ◆ 評価が難しい・課題がある (159)
- ◆ 教員が道徳や道徳教育を大切に考えるようになった・意識の変化があった (120)
- ◆ 授業の時間数が確保できるようになった・時数が増えた (120)

まず、評価に関する課題を多くの教員が抱えている。この傾向は今後も続くと考えられる。また、道徳教育に対する教員の意識の変化やそれに伴う授業数の確保に対する好意的な意見は、今までの「道徳の時間」における課題が克服されている実態を確認することができる。

(2) 教科化に肯定的な意見

次に、教科化について肯定的にとらえている意見についてまとめると、次のようになる。

- ◆ 授業の質・教師の指導力が向上した・変化した (54)
- ◆ 子どもの意識・道徳性の変化があった (37)
- ◆ 目標・ねらい・評価などが明確になった (33)
- ◆ 教科書ができた・指導がやりやすくなった (26)
- ◆ 年間指導計画がより活用されるようになった (25)
- ◆ 子どもの実態を教師がよくみとれるようになった・把握しようと努力している (21)
- ◆ 授業研修・校内研修・公開授業が増えた、実施しやすくなった (21)
- ◆ 担任やクラスごとの力量差が緩和された・バラツキが減った (11)
- ◆ 評価ができるようになった・評価が入ることで真剣に取り組むようになった (11)
- ◆ 人間理解（人の強さ・弱さ・自己や他者理解など）ができるようになった (10)
- ◆ 保護者との連携がとりやすくなった・理解が得やすくなった (7)

上位３つの意見に次いで多かった意見は、道徳の授業の質に関係する意見であった。道徳の授業や道徳教育を大切にしようとする意識や授業時数の確保が、授業の質や指導力の向上、更に研修の充実に繋がっていると考えられる。

また、「子どもの意識や道徳性の変化」を確認できたことや「人間理解（人の強さ・弱さ・自己や他者理解など）ができるようになった」ことは、授業が順調に行われているということでもある。その大きな要因として、目標・ねらい・評価などが明確になったことや、教科書の使用による指導のしやすさ、年間指導計画のより効果的な活用があるととら

えられる。それらによる教師の授業への姿勢とゆとりが、子どもの実態をしっかりと把握して授業を行うことにつながり、子どもの意識や道徳性の変化へとつながっているのではないかと考えられる。

さらに、保護者との連携もしやすくなったという意見の背景には、保護者が「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の効果を、子どもたちの姿で感じ取っておられることがあるのではないかともとらえられる。

(3) 教科化に否定的な意見や課題についての意見

教科化に対する否定的な意見や課題を指摘する意見として、次のようなものがある。

- ◆ 道徳評価欄が増えるなど、業務が増えた (17)
- ◆ 教科になってもあまり変化が見られない (10)
- ◆ 教科にする意味があったのかわからない (8)
- ◆ 教科としての質・内容についての疑問がある (7)
- ◆ 教科書に課題がある・扱いにくい (7)
- ◆ 熱心に道徳について取り組む教員は増えていない・十分とはいえない (4)
- ◆ 学校の実態と離れてしまっているのではないか (4)
- ◆ 価値の押し付けになっている (3)
- ◆ 授業や指導に自信がもてない (2)
- ◆ 年間 35 時間は長い (2)
- ◆ 現場任せになっている (1)
- ◆ 他の教育課程にしわよせがきている (1)
- ◆ 子どもたちが正解を出そうとしてしまう (1)
- ◆ 教師が授業などの工夫・研究をしなくなった (1)

教科化に否定的な意見としては、指導要録や通知表に記入する「特別の教科 道徳」の評価は、個人内評価による記述方式によることから、どうしても負担感を感じるということである。この部分は、最も多くあった意見である評価に関する悩みと、併せて対応を考える必要がある。また他の記述方式の評価の欄と合わせて調整を図ることも求められる。

また、「教科になってもあまり変化が見られない」「教科にする意味があったのかわから ない」「教科としての質や内容に疑問がある」といった意見は、以前の「道徳の時間」のときの実態と比べてであるとも考えられる。「道徳の時間」でも充実していたのに、「教科化する意味があったのかわからない」という意見になっているともとらえられる。「教科書に課題がある」「熱心に取り組む教師が増えていない」などの意見は、むしろ道徳の授業を充実させるという立場からの批判とも考えられる。

その次からの意見は、件数は少ないものの、これからの道徳の授業の改善にとって貴重な意見であるといえる。「学校の実態と離れてしまっているのではないか」や「価値の押し付けになっている」「授業や指導に自信がもてない」「年間 35 時間は長い」「現場任せになっている」「他の教育課程にしわよせがきている」「子どもたちが正解を出そうとしてしまう」「教師が授業などの工夫・研究をしなくなった」といった意見は、これからの大きな検討課題としてとらえられる。学校の実態に応じて、行政の協力も得ながら（チーム学校体制で）、年間指導計画も魅力的なものにし、研修機会も多く設けて教師が自信をもてるようにし、子どもたちが主体的に学べる授業を工夫することが大切である、といったことをポイントとして挙げることができる。

（矢作信行）

Ⅳ・テキストマイニングを用いた全体的な自由記述の分析

アンケートでは、今回も道徳教育や「特別の教科 道徳」について、全体にわたって自由に意見を述べてもらう欄を設けている。そこに記述されている内容について、テキストマイニングを用いて分析する。今回も、この技法の代表的なフリーソフトウエアで、現在もバージョンアップを続けている KH Coder を用いる。

また、前回同様、主に 3 種類の基本的な分析を行う。それは、①抽出語リスト、②元の文から検索して「語」の使われ方を確認する KWIC コンコーダンス、そして③抽出語間および外部変数との関連性と強さを確認できる共起ネットワークである。

図 1　2019年度 4 項目合同抽出語リスト

1・抽出語リスト (上位 10 語、降順) から読み取れること

まず、どのような語が抽出されているのか、出現回数は何回かを確認する。次に、抽出された上位 10 語がアンケートの各質問項目でどのような意味をもつのかについて推測する。

自由意見の欄は、「1. ぜひ伝えたいこと」「2. 要望」「3. 意見」「4. その他」に分かれている。それぞれの枠に記述されている上位 10 語の中には、共通抽出語が 6 語（「その他」においてのみ 5 語）、各質問項目における独自に存在する抽出語は、質問項目 1 では「時間」「学校」、2 では「研修」、3 では「子ども」「必要」、4 では「担任」である。ここでは、特に、

独自に存在する抽出語について検討する。

※各質問項目 10 位以内において、　　は各質問項目にわたる共通抽出語、__は 2018 年度と比較して新出の抽出語、____は各質問項目独自の抽出語

1．ぜひ伝えたいこと

「道徳」「授業」「思う」「教育」「評価」「時間」「教科」「学校」「教材」「教師」

※「時間」「学校」は、新出語でもある。

2．要望

「道徳」「授業」「思う」「評価」「指導」「教育」「教材」「研修」「資料」「教科」

※「資料」とは、「教材」or「映像資料」or 指導資料（教師の指導や評価等の参考となるもの・子どものワークシート）の意味で使われている。

3．意見

「道徳」「評価」「思う」「授業」「教育」「教科」「子ども」「必要」「感じる」「教員」

※「子ども」は、新出語でもある。

4．その他

「道徳」「思う」「教科」「授業」「教師」「評価」「教員」「指導」「感じる」「担任」

※「教師」は「道徳教育推進教師」or「教員」、「教員」は「教師」「担任」を含む教職を司る者、「担任」は「学級担任のみが授業をすることに無理がある」という文脈で使われており、新出語でもある。

「時間」という語が含まれている意見は、「週一回の授業を大切にしていきたい」「全学級一斉道徳授業の公開」「教科書の効用」「教科化の効用」「総合的な学習の時間との関連させることの重要性」「時数の確保が難しい」「道徳を検討する学年会を開くための時間や研修の時間確保が必要」「35 時間中に 22 項目の指導にゆとりが必要」「子ども達と向き合う時間的・精神的余裕が必要なので道徳の教科には反対」「○○教育が増えすぎ任せっぱなしにされても応える時間がない」等の記述の中で使われている。過重負担がかかっている厳しい学校の状況が述べられている。

「研修」という語が含まれている意見は、2018 年度は、質問 4 項目中 3 項目において上位 10 語の中に「研修」があり、多くの意見が述べられていたが、2019 年度は、「2. 要望」のみに留まっており、件数は減少している。2018 年度は、小学校で研修の効果性について述べられ、中学校では研修を行い全面実施の準備をしているといった、小・中学校共に新しい道徳科に向けて取り組まれている様子が伺われた。2019 年度も小・中学校共に、「授業公開をしながら研修の充実を図っている」「道徳教育や道徳科を充実させることはとても大切なことであり、そのために教員は時間を生み、研修に励んでいるが、研修に費やす時間が限られていることが課題であり、もっと時間がほしい」と、引き続き熱心に取り組んでいるものの、研修時間の確保の難しさを指摘している。

また、「授業の進め方について、研修の機会が多くあるとよい。実践で悩んでいる教師が多い。」とさらなる研修の機会をもつことを望むと共に、クラス担任の限界を感じている表現もある。また、実施してみて、さらに道徳科の授業の進め方、評価・発問のあり方について

悩んだり、大きな負担感を感じたりしている、だから、教科化にはやはり反対と考えている教員もいるという記述もあった。一方、推進していこうとする意見の中では、研修・セミナーの開催・文科省からの指導資料の配信、教科書の充実を強く望む記述が多く見られる。

「子ども」という語が含まれている意見では、「子どもの成長の中でも変化の見えにくい心の部分に大きくかかわる内容なので、まずは方向性の共有ができ授業改善を進めつつあることで今年度はよかったと考えている」「大人の生き方そのものが道徳教育だと思い、子どもたちと一緒に自分を見つめ変わっていきたい」「いろいろな意見や考えがあっていいんだという点で子どもたちの多様性を引き出すことができる教科」「子どもの真の成長に繋がるか評価に懸念」「道徳教育を支える教師集団のあり方、限りある時間の中で効果的に道徳科を進めるための資料等の必要性」等について述べられている。

2・共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れること

まず、質問項目と語の共起ネットワーク分析を行った（図 2-1，図 2-2）。その結果、質問 4 項目において共通抽出語が多いこと、上位 10 位以内には入っていない抽出語も、順位を下げていくとどの質問項目にも存在することなど、両年度とも質問 4 項目と抽出語との関わりが大変強いことから、これ以降、4 項目を一括して分析を行う。

4 項目合同で共起ネットワーク分析を行った結果が図 3-1 と図 3-2 である。一般に、共起ネットワーク図では、抽出語数・抽出語間の関連性の強さを円弧の大小及び線の太さで可視化できる。2019 年度における抽出語と抽出語との関連性を 2018 年度と比較しながら分析・考察すると、以下のような 7 つの語群が見られる。

1「道徳教育、道徳科推進における概要」
2「様々な教育内容の対応による負担感」
3「時間確保の必要性」
4「道徳科推進のための研修」
5「道徳科推進の具体的方策」
6「子どもに関わる評価と所見」
7「道徳科・道徳教育への力の入れ方」

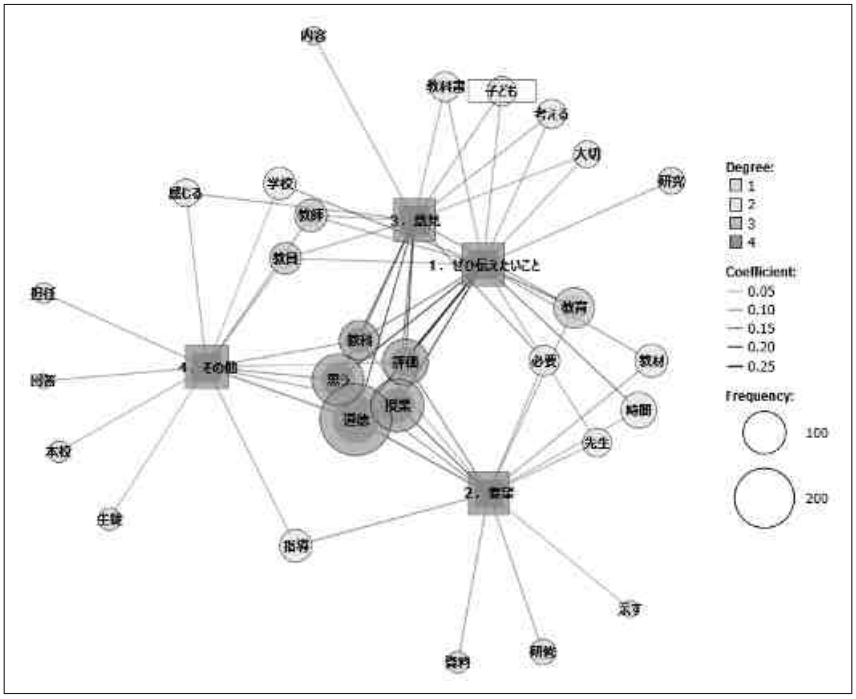

図２-１　2019年度質問項目と語の共起ネットワーク

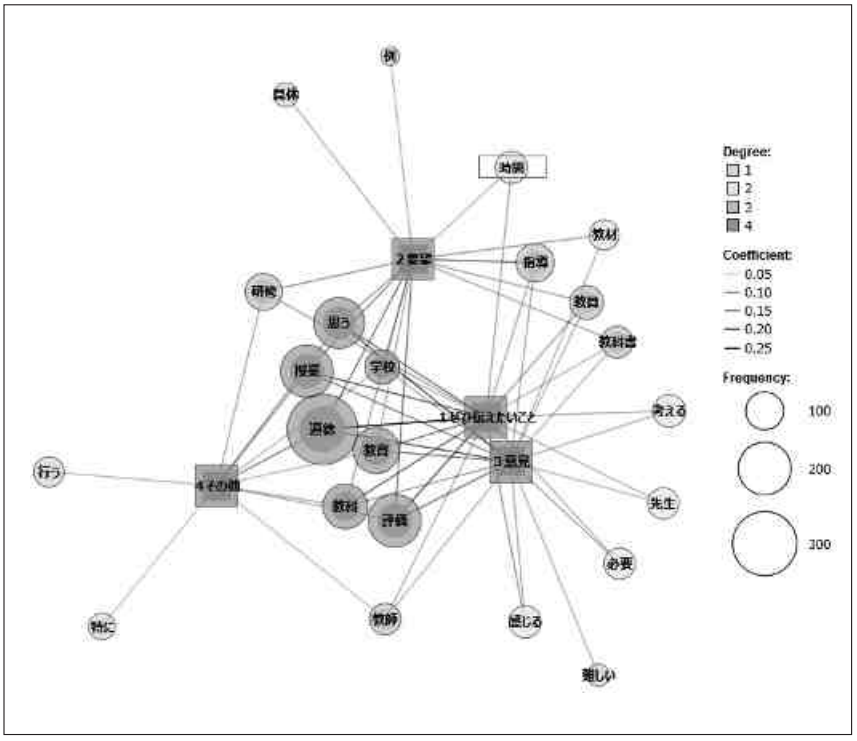

図２-２　2018年度質問項目と語の共起ネットワーク

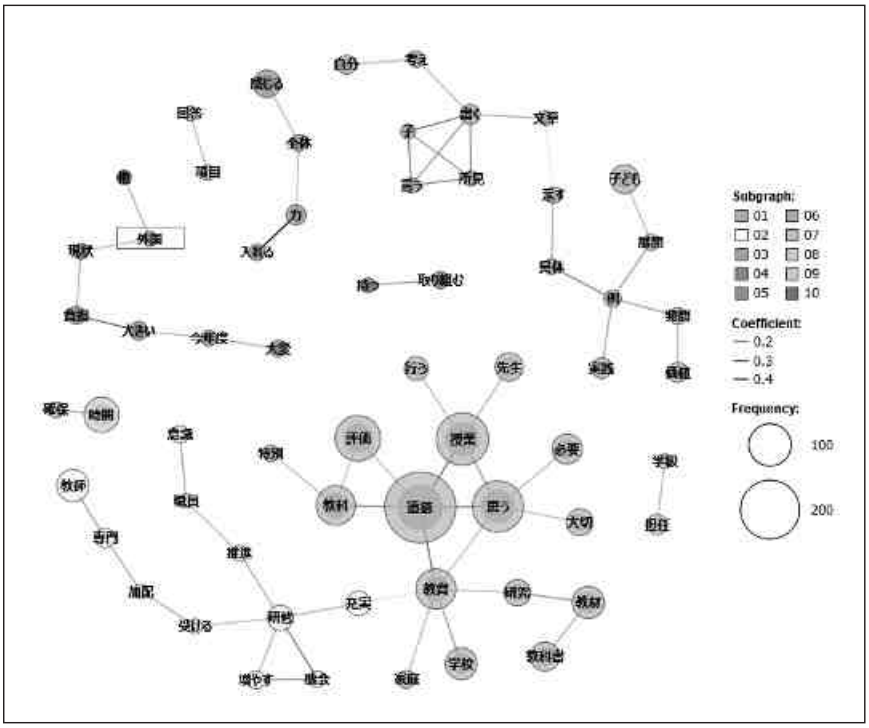

図３-１　2019年度４項目合同共起ネット

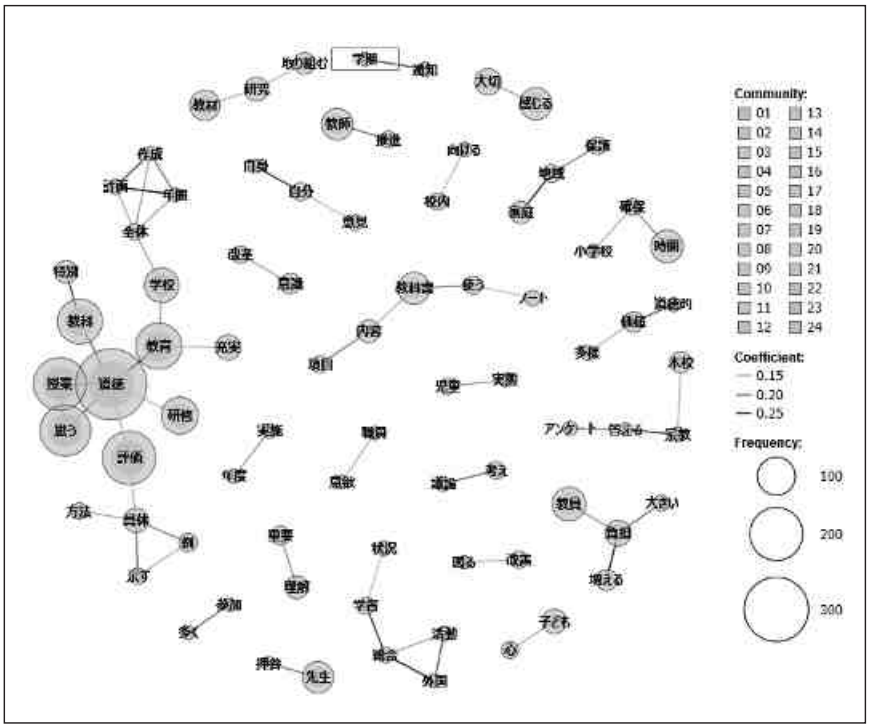

図３-２　2018年度４項目合同共起ネット

2018 年度と 2019 年度には類似した語群が見られる（１～４）が、2019 年度では中学校においても全面実施されたことから、回答内容により具体性が見られる（５～７）。

１の「道徳教育、道徳科推進における概要」では、抽出語リスト上位 10 位の内、特に６つの共通抽出語がその中心に位置している。2018 年度では中心に位置していた『研修』が、2019 年度では中心から離れ、より具体性を帯び、別の語群４を作っているところに変化が見られる。元の文章で見ると「放課後の多くの時間を使って、教材研究・評価の研修を進めている」「道徳の授業づくりを通して教師が互いに良き研修を行えている」「地方の教員にも文科省の研修を受けられる機会がほしい」と、小・中共に熱心な取り組みや要望が見られる。

一方、２、３にも関連するが、道徳・外国語・特別支援・IT　　等、新しい教育内容が次々と現場に求められ、大きな負担を強いられている状況が多く語られている。「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という状況もあることを踏まえ、今後も道徳教育の充実のために、教員の負担軽減のための予算と加配、時間の確保を要望する声も多く挙がっている。

５～７にも、元の文章で見ると、小・中学校における実践を通しての願いや思い、また不安も記述されている。

５では、「子どもは道徳が好き」「道徳科は子どもの変容を見る上で大切な教科、多様性を引き出せる」「子どもの心が動く授業でありたい」「子どもの実践意欲が増してきてい る」という肯定的な思いから、よりよい授業の実現のために、「力のある教材」「展開方法等多くの実践例」「発問の後の問い直しの具体例」を多く知りたいという強い要望が見られる。

６では、「もし自分だったらと考える問題解決型の授業で自分とは違う多様な考えを受け止める資質を育てていく」という思いや「考えや思いを書いたり発表したりする子はある程度見取ることができるが、表出しない子の変容を見取るのが難しい」という、実践から来る悩みが見られる。さらに、「行動の所見をはじめ、通知表で記入しなければならないことが多すぎる」ことから、「教科化されたことにより、教師の意識が授業づくりから評価としての通知表、評価文章がどうあるべきかということにシフトされている」ことを懸念する記述もみられる。

７では、「今年度公開研究会で最も集客したのは道徳科だった。しかし、道徳科研究部の教員は１名。主要教科に比べたら力の入れ方が弱いことは明らか。管理職の考えにもよるが、教育界全体で（特に管理職層での）道徳科への力のかけ方の弱さを感じる。」という研修の必要性と対応のずれを感じている記述がある。このことを含め、「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という記述や、質問４項目中３項目において「研修」という抽出語が上位 10 位以内から消えたことは気になる。スタートしたばかりで各校の研修が軽減されることは、避けなければならない。2019 年度では、2018 年度より今後進めるべき研修の内容（展開の工夫・評価の具体例・学びの姿の共有・学習課題と中心発問との関連）等、積極的な実践を伴ったより具体的な考えが示されていること は、心強く思われる。

３・共起ネットワーク（関連語検索）から読み取れること

①の「道徳教育、道徳科推進についての概観」において中心となる抽出語「道徳」に一番強く関係しているのは、「授業」「評価」である。ここでは、この２つの抽出語を取り上げ関連語検索を行い、内容の把握を試みた。

(１)『授業』について

『授業』では、大きく７つの語群ができた。

１は、授業の「必要性」と「担任」について　　２は、授業に対する教師の「意識」
３は、「加配」の要望　　４は、「教科書」を使ってみて
５は、授業の「大切」さとその「方法」　　６は、「発問」等について
７は、子どもの心の育ちに関わって　　８は、「教材研究」するための時間の確保

ここには、『授業』にかかわる現場の率直な思いが見られる。

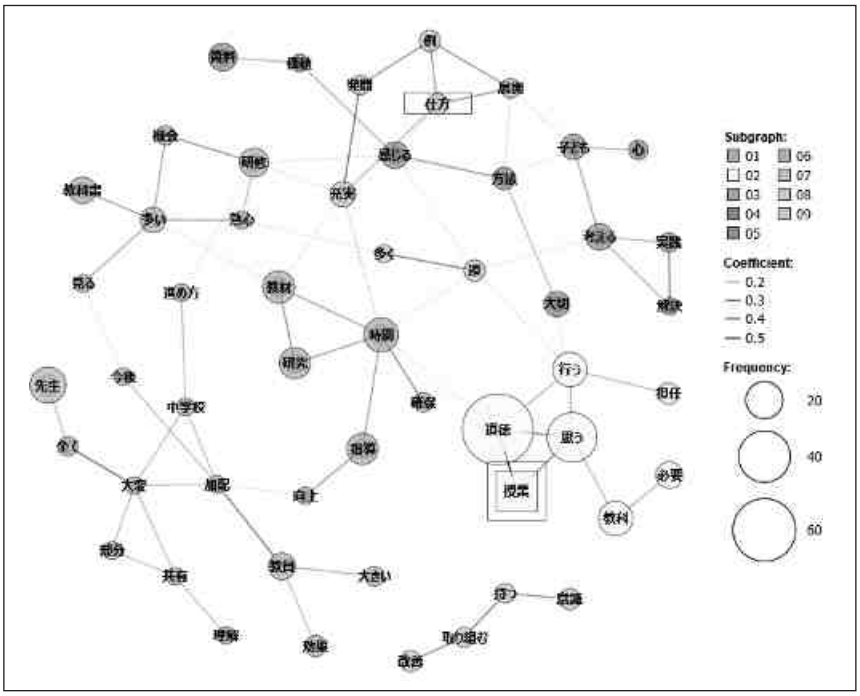

図４　2019年度関連語検索「授業」の共起ネットワーク

語群１には、『授業』の関連語である「必要」「担任」というキーワードが存在する。 まず「必要」の語が書かれている元の文章を見ると、「道徳教育は教育活動に大変必要」だからこそ、担任には「時間的精神的な余裕が必要」であるという思いが伺える。同様に、多忙となる「授業改善は必要だが、（通知表等の）評価は必要ではない」、推進するならば「道徳科専門教師（加配）が必要」という要望が見られる。

一方、よりよく推進するために「しばらく全員対象で研修を行い、より道徳科に対して周知する必要がある」「授業は実施されるようになったが、レベルアップが必要」とい　う。また、担任のみならず、副担・管理職、若手、ベテラン等、立場や経験に関わらず、責任と矜持をもつて取り組んでいる現状を紹介する記述も見られる。

語群２は、小さな語群ではあるが、キーワードが存在している。「もつ」は、関連性・

ゆとり・苦手意識・熱意・意欲を「持つ」という記述内容において使用されている。「他教科等との関連性を持って道徳科を進める」ことの大切さ、「教師にゆとりがあってはじめて新しい取り組みを推進できる」という内容が含まれている。さらに、「意識」は「教科化によってより意識して取り組むようになった」「教えるというより、気づかせるという意識改革を図ってほしい」「苦手意識を持つ先生も少なからずおられるが、多くの先生方が意欲や熱意を持って道徳科の授業に取り組んでいることも知っていただきたい」「教科化されたことにより、我々教師の意識が、授業づくりという観点から、評価として通知表や要録に記載する文言、評価文章はどうあるべきかという観点に大きくシフトしたように感じる」といった内容になっており、大変前向きに取り組んでいる先生方の姿があるものの、本来の評価のあり方とは異なる方向に傾斜しているという気づきも見られる。

語群３では、「大変」「加配」「今後」がキーワードとなり、担任だけに負担がかかっている現状から加配によるサポート体制、学校全体の道徳教育推進体制の必要性を述べている。

語群４では「教科書」、語群５では「大切」、語群６では「発問」、語群７では「子ど も」、語群８では「時間」がキーワードとなり、『授業』について物語っている。

（２）『評価』について

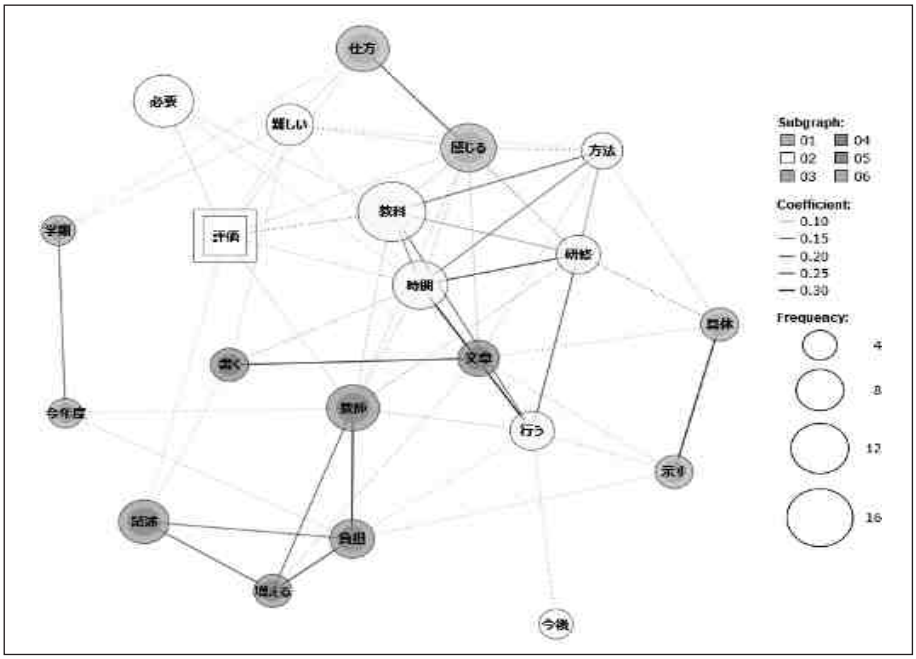

図５　2019年度関連語検索「評価」の共起ネットワーク

次に『評価』について見ていく。各質問項目の抽出語リストを見ると、『評価』は、どの質問項目においても多く抽出される。毎年度、「評価」の必要性については異論が多くある。ここでは、「必要」「感じる」「難しい」「今後」を関連語として挙げることができ る。

例えば、「必要」については、『授業』におけるものと同様であるが、ここに位置づけられている「必要」が含まれている意見は「評価については必要でないとの声が多い」「授業改善、評価は必要だが、教科にする必要はない」「評価をするなら、具体的な成績のつけ方を

提示し、一定の基準を明記し伝達する必要がある」「評価は必要だが、評価のための評価になっている」という一方で、「スタートしたばかりである。成果と課題はこれから練られていくと思う。１年や２年で判断できるものではない。継続した反省と改善が必要」、さらに、「子どもの変容を丁寧に見れば見るほど、評価（文章記述）に力が入る。時間をどのように生み出すのか、学校組織として考える必要がある」との意見もある。多様な思いや考えが入り混じっている。

「難しい」という語が使われている意見は、「子ども達の道徳心や道徳性を授業のみで見取るのは難しい」「考えや思いを書いたり発表したりする子はある程度見取れるが、表出しない子の変容を見取るのは難しい」「通知表や要録に記述するのに、ほとんどの教師が苦労している。教科なので評価するのは当然だが、本人や保護者に伝えるのが難しい」。だから、「評価方法の実践例等、ある程度のテンプレートが必要」「文部省からもう少し具体的な例を示してほしい」「ある程度のガイドラインが必要である」「保護者には具体的な授業の様子がある方が伝わりやすいし、要録には教材や内容項目が載ることはよくないという部分で、NGの見極めが大変だった。やはり文例が必要、現場の判断に任されると厳しい」という道徳科を推進しているからこその困惑も見られる。

４・共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）について

次に、共起ネットワークによる分析において、外部変数と抽出語間の関係性を見てみたい。ここでは、外部変数として「回答者の職階」を取り上げる。「道徳に関する抽出語」に、「回答者の職階」がどのようにつながっているのか、換言すると、回答者の立場（１ 校長 ２副校長（教頭） ３道徳教育推進教師（道徳主任） ４教務主任、研究主任 ５それら以外）による道徳に関する意識の相違が抽出語にどのように反映されるのかについて知ることを目的とする。

図６を見ると、2018 年度同様、回答者の職階１・２・３【校長・副校長（教頭）・道徳教育推進教師（道徳主任)】は、強い共起関係が見られ、職階４・５【教務主任（研究主任)・それら以外】とは異なっている。しかしながら、2018 年度と比べてすべての職階において共起性が強まっている。当然のことではあるが、道徳教育推進教員（道徳主任）は「道徳」との共起関係をはじめ、「授業」「評価」等、どの抽出語、どの職階とも共起性が強い。道徳教育推進の役割を果たすべく、校長の指針を受け道徳教育推進者として、学校組織の中心に位置していることが見て取れる。

道徳教育（道徳科）推進のために、それぞれの職階において、それぞれが果たすべき役割を果たすことによって、課題は多くあるものの、子どもたちのよりよく生きるための道徳性を育むべく、取り組んでおられるととらえられる。

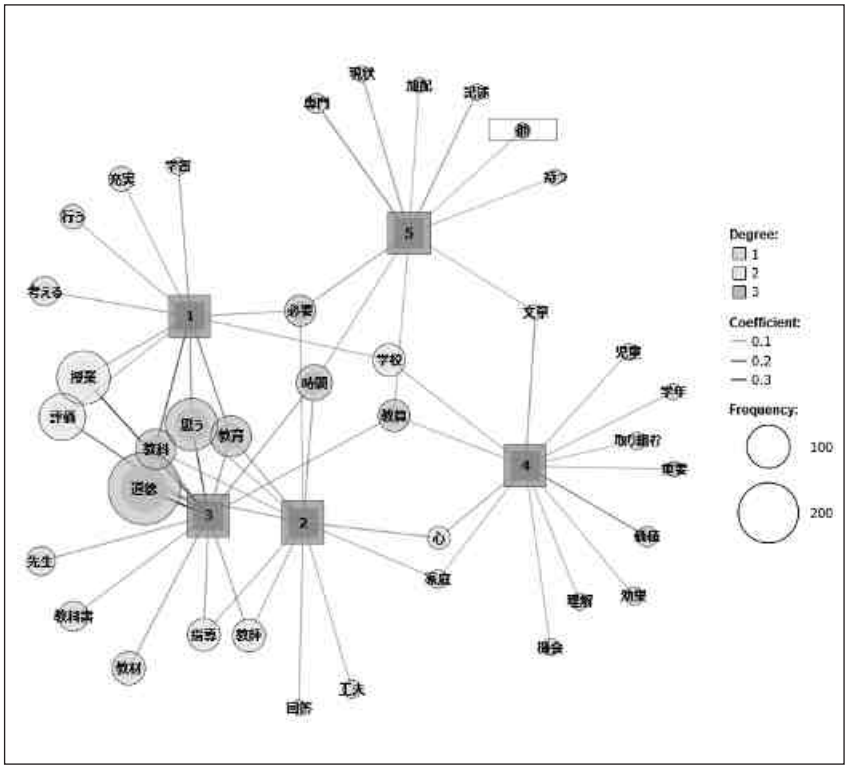

図6　2019年度共起ネットワーク　外部変数「職階」

以上、2019 年度も当該アンケート調査の最後の欄に記された自由記述文について、テキストマイニングを用いて抽出語リストと共起ネットワークをもとに分析し、結果を考察した。当該自由記述から回答者の率直で多様な意識を知ることができた。

『評価』については、今はまだ通知表や指導要録の評価の記述の仕方に関心が向いており、多忙な現場への説明（わかりやすい配信や例示）が必要かと思われる。分析の中でも見られたように、授業にフィードバックするという評価の基本的な在り方に向かえるよう舵を切るべきであると考える。

また、2 共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れることの最後に記載した「研修の必要性と対応のずれを感じている」や、「移行期間は研修が充実していたが、現在では減少している」という記述、さらに、質問 4 項目中 3 項目から上位 10 位の中に「研修」という抽出語が消えたこと等が気になる。道徳教育の抜本的改善・充実の中核となる「特別の教科 道徳」が、全面実施され、新しい道徳教育がスタートしたばかりであるのに、早くも研修体制が低下していくようであれば、これから進められる新教育課程による改革も、十分に成果を上げることが難しくなる。これからの教育改革は、世界的な新型コロナウイルス禍への対応や未曽有の科学技術の発達による社会の変化への対応において、「人

間として自分らしくどう生きるか」を正面から問いかける道徳教育の役割がますます大きくなる。道徳教育や道徳の授業についての「研修」は、継続的・発展的に取り組む必要がある。

2019 年度の自由意見には、2018 年度より今後進めるべき研修の内容（展開の工夫・評価の具体例・学びの姿の共有・学習課題と中心発問との関連）等、積極的な実践を伴ったより具体的な考えが示されていることや「3 共起ネットワーク（外部変数と抽出語間)」の分析における学校の推進体制の活性化の様子を見ると、新しい道徳教育（道徳科）の推進に向けて着実に取り組まれていることが伝わってくる。

そのような研修と実践が継続発展していくためには、教師の働き方改革とも併せて考える必要がある。研究機関等との連携も含めて、今後提案していきたい。

（小山久子）

※ 本研究は、科研研究（課題番号 17H02706）の成果の一部である。

コロナ禍における道徳教育の実態に関する全国調査の結果と分析

―2020年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―

Results and analysis of a survey for schools across the country on the actual situation of moral education in the new coronavirus disaster

-Focusing on statistical analysis and free description analysis of the Year 2020 across the country survey-

押谷由夫＊・矢作信行＊＊・齋藤道子＊＊
木崎ちのぶ＊＊・谷山優子＊＊
小山久子＊＊＊

OSHITANI,Yoshio　YAHAGI,Nobuyuki　SAITO,Michiko
KIZAKI,Chinobu TANIYAMA,Yuko & KOYAMA,Hisako

目次

Ⅰ．本研究の目的と方法
Ⅱ．調査結果の統計的分析
Ⅲ．調査結果の自由記述の分析
Ⅳ.テキストマイニングを用いた自由記述の分析

＊　武庫川女子大学教育研究所・副所長、教授
＊＊　武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士課程後期
＊＊＊　大阪芸術大学・特任教授
＊＊＊＊ 目白大学専任講師

Ⅰ．本研究の目的と方法

１．研究の動機

本研究グループでは、「特別の教科　道徳」が設置され、小学校、中学校において全面実施されるまでの2017年度から2019年度の3年度間において、学校現場でどのように取り組まれているかを、全国調査を基に明らかにしてきた。結果については、その都度本学会で発表してきた。そのような中、2019年末から世界的なコロナ禍に見舞われた。学校現場は、現在もその対応に大変な日々を過ごされている。そこで、今までの調査の延長として、このコロナ禍において、道徳教育がどのように展開されているのかを明らかにしたいと考えた。

２．本研究の目的

本研究は、コロナ禍において、熱心に取り組まれてきた道徳教育が、どのような状態になっているのかを明らかにし、課題とその対応について探究することを目的とする。

３．調査の方法

調査対象校は、継続して行った学校と同一の学校とした。調査対象校の選定は『全国学校総覧　2017年度』（原書房）より、全国４７都道府県の全部の小学校・中学校から、およそ1割の学校を無作為に抽出した。その中で2020年度段階で、統廃合の学校を確認し、廃校は除外した。発送学校数は、小学校2154校、中学校1154校、小中一貫校・義務教育学校8校で、合計3316校であった。回収学校数は小学校554校、中学校306校、小中一貫・義務教育学校8校、その他2校で、合計870校。回収率は、26.2％であった。学校種別および地域別のサンプルは表の通りである。

学校種

全体	小学校	中学校	小、中一貫校〈義務教育学校〉	不明
870	554	306	8	2
100	63.7	35.2	0.9	0.2

（上は実数、
下は%）

学校の地域

全体	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	不明
870	55	93	204	49	24	86	134	76	44	91	13	1
100	6.3	10.7	23.4	5.6	2.8	9.9	15.4	8.7	5.1	10.5	1.5	0.1

Ⅱ．　調査の結果と分析

１．コロナ禍における道徳教育について

（１）コロナ禍における道徳教育の意識

表１　コロナ禍においてどの程度道徳教育を意識しましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
とても意識した	145	97	48	32	23	22	42	18	22	17	25
	16.9	17.5	15.7	15	20.9	15.1	16.6	16.4	16.4	14.2	24
まあまあ意識した	317	211	106	84	38	52	99	43	48	45	36
	36.9	38.2	34.8	39.4	34.5	35.6	39.1	39.1	35.8	37.5	34.6
少し意識した	209	136	73	55	21	32	54	25	41	35	24
	24.4	24.6	23.9	25.8	19.1	21.9	21.3	22.7	30.6	29.2	23.1
あまり意識しなかった	146	88	58	34	23	34	37	22	16	22	15
	17	15.9	19	16	20.9	23.3	14.6	20	11.9	18.3	14.4
ほとんど意識しなかった	41	21	20	8	5	6	21	2	7	1	4
	4.8	3.8	6.6	3.8	4.5	4.1	8.3	1.8	5.2	0.8	3.8

全体でみると、「とても意識した」16.9%、「まあまあ意識した」36.9%、「少し意識した」24.4%で、意識したと答えた学校が78.2%であった。この傾向は小学校と中学校ではあまり差がなかったが、わずかに小学校の方が高かった。学校規模別では「とても意識した」学校の割合が、701人以上の学校が200人以下の学校より6ポイント高くなっている。地域別では、九州・沖縄が「とても意識した」学校の割合が他の地域に比べて8～10ポイント高くなっている。

（２）コロナ禍で感じる今まで取り組んだ道徳教育の成果

表２　　コロナ禍で今まで取り組んだ道徳教育の成果をどの程度感じましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
とても感じた	55	41	14	13	6	8	16	8	8	9	7
	6.4	7.5	4.6	6.2	5.5	5.5	6.3	7.3	6.1	7.5	6.8
だいぶん感じた	310	208	102	90	32	62	86	45	36	39	45
	36.3	37.8	33.6	42.7	29.1	42.5	34.1	40.9	27.3	32.5	43.7
少し感じた	362	226	136	81	45	56	106	41	64	58	41
	42.4	41.1	44.7	38.4	40.9	38.4	42.1	37.3	48.5	48.3	39.8
あまり感じなかった	117	68	49	25	25	18	40	16	23	13	8
	13.7	12.4	16.1	11.8	22.7	12.3	15.9	14.5	17.4	10.8	7.8
ほとんど感じなかった	10	7	3	2	2	2	4	－	1	1	2
	1.2	1.3	1	0.9	1.8	1.4	1.6	－	0.8	0.8	1.9

コロナ禍に直面し、様々な対応をする中で、今まで取り組んできた道徳教育が効果を発揮していると感じたかどうかを尋ねた。全体では、「とても感じる」6.4%、「だいぶん感じる」36.3%、「少し感じる」42.4%と、肯定的に答えた学校が85%になる。小学校と中学校との比較では、小学校が「とても感じる」で3ポイント、「だいぶん感じる」で4ポイント高くなっている。学校規模別では「だいぶん感じる」が701人以上の学校より200人以下の学校が14ポイント高い。地域別では、「だいぶん感じた」で比較すると、北海道・東北、北陸・中部、九州・沖縄が40%を超え

ている。

（３）コロナ禍で休校していた時、「特別の教科　道徳」についてどう対応したか

表３　コロナ禍で休校していた時、「特別の教科　道徳」についてどう対応しましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
具体的な課題を示した	154	99	55	26	26	13	63	20	31	19	9
	18	18	18	12.3	23.6	8.9	25	18.2	23.1	16	8.7
具体的課題は示さなかったが意識するように働きかけた	309	203	106	75	36	56	81	34	50	39	53
	36.1	36.8	34.8	35.4	32.7	38.4	32.1	30.9	37.3	32.8	51
何も触れなかった	393	249	144	111	48	77	108	56	53	61	42
	45.9	45.2	47.2	52.4	43.6	52.7	42.9	50.9	39.6	51.3	40.4

2020年度は、何度初めから5月の中頃まで休校が続いた。その間「特別の教科　道徳」はどのように対応したかを尋ねた。全体でみると、「具体的な課題を示した」が18%、「具体的課題は示さなかったが意識するように働きかけた」36.1%、「何も触れなかった」45.9%であった。小学校と中学校ではほとんど差がない。学校規模別では、「具体的課題を示した」が200人以下の学校に比べて701人以上の学校が11.3ポイント高い。地域別では、「具体的課題を示した」で比較すると、関東・甲信越、近畿が高く、約25%の学校において取り組んでいる。

（４）休校中の「特別の教科　道徳」の補充の実態

表４　休校中の「特別の教科　道徳」の補充をどの程度行いましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
全部補充した	314	241	73	99	34	75	55	44	50	58	35
	36.8	43.9	24	47.4	31.2	51.4	22	40	37.3	48.7	34
一部補充した	304	197	107	67	41	37	112	33	45	38	44
	35.6	35.9	35.2	32.1	37.6	25.3	44.8	30	33.6	31.9	42.7
休校中の課題を出していたので補充しなかった	83	43	40	11	9	6	35	8	22	8	5
	9.7	7.8	13.2	5.3	8.3	4.1	14	7.3	16.4	6.7	4.9
休校中の課題も出さなかったし補充もしなかった	152	68	84	32	25	28	48	25	17	15	19
	17.8	12.4	27.6	15.3	22.9	19.2	19.2	22.7	12.7	12.6	18.4

休校中の「特別の教科　道徳」を学校再開後行った補充の実態について尋ねた。全体では、「全部補充した」が36.8%、「一部補充した」35.6%で、72.4%の学校で補充されている。校種別で小学校と中学校で「全部補充した」を比較すると、小学校が43.9%、中学校は24%と大きな差がある。学校規模別では、「全部補充した」学校が200人以下の学校で47.4%、701人以上の学校では31.2%となっている。地域別では「全部補充した」で比較すると、北海道・東北と中国・四国地方においては半数前後の学校において行われている。

（５）学校再開後の「特別の教科　道徳」の授業は規定通り週1回確保されたか

表５　学校再開後の「特別の教科　道徳」の授業は規定通り週1回確保されましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
週１回の授業を行った	594	405	189	159	78	106	162	80	85	96	74
	69.2	73.2	62	75	70.9	72.1	64	72.7	63.4	80.7	71.2
ほぼ週１回の授業を行った	218	126	92	43	30	39	67	25	42	18	28
	25.4	22.8	30.2	20.3	27.3	26.5	26.5	22.7	31.3	15.1	26.9
週１回は少しできなかった	34	16	18	8	1	2	17	4	5	3	2
	4	2.9	5.9	3.8	0.9	1.4	6.7	3.6	3.7	2.5	1.9
週１回はかなりできなかった	12	6	6	2	1	－	7	1	2	2	－
	1.4	1.1	2	0.9	0.9	－	2.8	0.9	1.5	1.7	－

5月に学校が再開されて、「特別の教科　道徳」の授業を規定通り週1回確保したかどうかを尋ねた。全体では、「週1回の授業を行った」が69.2%、「ほぼ週1回の授業を行った」25.4%で95%の学校でほぼ通常通りに授業が行われている。小学校と中学校で比較すると、「週1回の授業を行った」学校が小学校で73.2%、中学校が62%と11ポイントの開きがある。学校規模別では「週1回の授業を行った」で比較すると、200人以下の学校が75%であるのに対して701人以上の学校では70.9%になっている。地域別では、「週1回の授業を行った」で比較すると中国・四国が80.7%と高い。

（６）学校が再開されて道徳の授業における子どもたちの様子は以前と比べてどうか

表６　学校が再開されて道徳の授業における子どもたちの様子は以前と比べてどうでしたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
活発に話してくれるようになった	65	42	23	16	8	17	21	5	5	8	9
	7.6	7.7	7.6	7.8	7.3	11.7	8.4	4.5	3.8	6.8	8.7
集中してくれるようになった	111	60	51	24	12	17	42	13	17	16	8
	13.1	10.9	16.9	11.7	10.9	11.7	16.7	11.8	12.8	13.7	7.8
以前とあまり変わらない	651	429	222	163	86	107	183	88	105	91	84
	76.6	78.3	73.5	79.1	78.2	73.8	72.9	80	78.9	77.8	81.6
あまり意欲が感じられなかった	22	17	5	3	4	4	4	4	6	2	2
	2.6	3.1	1.7	1.5	3.6	2.8	1.6	3.6	4.5	1.7	1.9
まったく意欲が感じられなかった	1	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－
	0.1	－	0.3	－	－	－	0.4	－	－	－	－

全体で見ていくと、「活発に話すようになった」が7.6%、「集中してくれるようになった」が13.1%、「以前とあまり変わらないが76.6%で、合計すると97.3%となり、ほとんどの学校において従来通りに子どもたちは授業に臨んでくれていると捉えている。学校種別、学校規模別比較においてはあまり差はない。地域別では「活発に話すようになった」が北海道・東北で11.7%、「集中してくれるようになった」では関東・甲信越が16.7%と高くなっている。

（７）コロナ禍により道徳の授業で従来通りにできなくなったことはあるか

表７　コロナ禍により道徳の授業で従来通りにできなくなったことはありますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
たくさんある	38	25	13	2	6	3	17	8	1	5	4
	4.4	4.5	4.3	0.9	5.5	2	6.7	7.3	0.7	4.2	3.9
まあまあある	294	192	102	66	37	41	105	33	45	35	36
	34.3	34.8	33.4	31.1	33.6	27.9	41.5	30	33.6	29.4	35
少しある	246	157	89	61	34	41	70	29	42	39	29
	28.7	28.4	29.2	28.8	30.9	27.9	27.7	26.4	31.3	32.8	28.2
あまりない	170	107	63	53	23	35	41	23	31	26	17
	19.8	19.4	20.7	25	20.9	23.8	16.2	20.9	23.1	21.8	16.5
ほとんどない	109	71	38	30	10	27	20	17	15	14	17
	12.7	12.9	12.5	14.2	9.1	18.4	7.9	15.5	11.2	11.8	16.5

コロナ禍になって道徳の授業でできなくなったことはあるかの設問に対して、できなくなったことがある場合どのようなことかを自由記述してもらっている。それらについては、別に分析する。ここでは数字のみを取り上げる。全体では、「たくさんある」が4.4%、「まあまあある」34.3%、「少しある」28.7%で、合計すると67.7%なっている。校種別では、ほとんど差はない。学校規模別では「たくさんある」と答えた学校が200人以下の学校では0.9%に対し、701人以上の学校は5.5%になっている。地域別では、「たくさんある」と答えた学校が、近畿では0.7%、北海道・東北は2%になっている。

（８）この1年を振り返り、道徳教育、「特別の教科　道徳」の大切さや重要性を感じたか

表８　この1年を振返り、道徳教育、「特別の教科　道徳」の大切さや重要性を感じましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
よくあった	284	196	88	63	43	39	87	32	50	39	40
	33.6	36	29.2	30.4	39.4	26.9	34.8	29.6	37.6	33.1	39.6
ときどきあった	315	195	120	83	40	60	94	47	39	48	32
	37.2	35.8	39.9	40.1	36.7	41.4	37.6	43.5	29.3	40.7	31.7
少しあった	174	110	64	48	16	35	47	19	28	23	23
	20.6	20.2	21.3	23.2	14.7	24.1	18.8	17.6	21.1	19.5	22.8
あまりなかった	54	33	21	12	8	7	15	9	13	5	5
	6.4	6.1	7	5.8	7.3	4.8	6	8.3	9.8	4.2	5
ほとんどなかった	19	11	8	1	2	4	7	1	3	3	1
	2.2	2	2.7	0.5	1.8	2.8	2.8	0.9	2.3	2.5	1

この設問に対しては、自由記述の欄も設けている。その分析は別に行う。ここでは数値のみを取り上げる。全体では、「よくあった」が33.6%、「ときどきあった」37.2%、「少しあった」が20.6%で、肯定的に回答した学校が、91.4%である。校種別では、大きな差はないが、「よくあった」は小学校36%に対して中学校29.2%であった。学校規模別では、「よくあった」を比較すると、200人以下の学校が」30.4%に対し、701人以上の学校が39.4%であった。地域別では、「よくあった」で比較すると、九州・沖縄が39.2%、近畿が37.6%になっている。

２．　学校教育全体で取り組む道徳教育について

（１）今年度、学校経営において道徳教育が重視されたか

表９　今年度、学校経営において道徳教育が重視されましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
重視されている	363	246	117	92	43	70	100	46	44	56	52
	42.3	44.5	38.2	43.2	39.1	47.6	39.5	41.8	32.8	46.7	50
まあまあ重視されている	427	272	155	110	51	72	125	55	74	55	50
	49.7	49.2	50.7	51.6	46.4	49	49.4	50	55.2	45.8	48.1
あまり重視されていない	62	31	31	11	15	4	24	9	14	9	2
	7.2	5.6	10.1	5.2	13.6	2.7	9.5	8.2	10.4	7.5	1.9
重視されていない	7	4	3	－	1	1	4	－	2	－	－
	0.8	0.7	1	－	0.9	0.7	1.6	－	1.5	－	－

全体でみると、「重視されている」が42.3%、「まあまあ重視されている」49.7%で92%になっている。2019年度調査と比較すると「重視されている」と答えた学校の割合が7.3ﾎﾟｲﾝﾄ増えている。校種別でみると、「重視されている」学校の割合を見ると小学校が44.5%、中学校が38.2%で、6.3ﾎﾟｲﾝﾄの開きがある。学校規模別では、「重視されている」学校の割合が、200人以下の学校が43.2%に対し、701人以上の学校は、39.1%。一方「あまり重視されていない」では、200人以下の学校が5.2%に対し、701人以上の学校は13.6%になっている。地域別では、「重視されている」で比較すると、九州・沖縄が50%、北海道・東北が47.6%、中国・四国が46.7%と半数近くになっている。

（２）学校全体で道徳教育を推進するための組織は機能したか

表10　学校全体で道徳教育を推進するための組織は機能しましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
機能した	150	92	58	33	20	26	44	19	26	20	18
	17.5	16.7	19	15.6	18.2	17.7	17.4	17.4	19.5	16.8	17.3
まあまあ機能した	391	240	151	97	52	78	111	40	60	53	51
	45.7	43.6	49.5	45.8	47.3	53.1	43.9	36.7	45.1	44.5	49
あまり機能しなかった	202	143	59	51	29	28	70	31	27	30	20
	23.6	26	19.3	24.1	26.4	19	27.7	28.4	20.3	25.2	19.2
ほとんど機能しなかった	37	25	12	5	8	3	14	3	11	2	4
	4.3	4.5	3.9	2.4	7.3	2	5.5	2.8	8.3	1.7	3.8
組織を作っていない	76	51	25	26	1	12	14	16	9	14	11
	8.9	9.3	8.2	12.3	0.9	8.2	5.5	14.7	6.8	11.8	10.6

学校全体で取り組む道徳教育の組織を作っていないと回答した学校が8.9%であった。学校規模別できると701人以上の学校ではわずかに0.9%である。2019年度と比較すると作っていないと回答した学校が38%であったことから、コロナ禍において積極的に道徳教育推進の組織を作って取り組まれていることがわかる。その組織が実際に機能したかを尋ねると、全体で、「機能した」が17.5%、「まあまあ機能した」が45.7%であり、63.2%の学校において機能していると感じていることになる。校種別では、中学校の方が小学校より「機能している」で

2.3ポイント、「まあまあ機能している」で5.9ポイント高くなっている。学校規模別では、701人以上の学校の方が「機能した」「まあまあ機能した」と回答した学校の割合が200人以下の学校より若干高くなっている。地域別では、近畿が「機能した」が19.5%と高いが「ほとんど機能しなかった」は8.3%と一番高くなっている。

（3）全体計画に書かれている内容の達成度

表11　全体計画に書かれている内容はどの程度達成されていますか

	回答														
	だいたい達成されている			まあまあ達成されている			あまり達成されていない			見直しが必要である			全体計画に示していない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．「特別の教科　道徳」の指導	330	233	97	477	291	186	38	23	15	3	1	2	5	3	2
	38.7	42.3	32.1	55.9	52.8	61.6	4.5	4.2	5	0.4	0.2	0.7	0.6	0.5	0.7
2．各学年の道徳教育	308	218	90	500	304	196	34	21	13	9	6	3	3	2	1
	36.1	39.6	29.7	58.5	55.2	64.7	4	3.8	4.3	1.1	1.1	1	0.4	0.4	0.3
3．各学級の道徳教育	286	205	81	516	312	204	34	23	11	8	5	3	9	5	4
	33.5	37.3	26.7	60.5	56.7	67.3	4	4.2	3.6	0.9	0.9	1	1.1	0.9	1.3
4．各教科の特質に応じた道徳教育	107	85	22	510	344	166	201	105	96	27	14	13	9	3	6
	12.5	15.4	7.3	59.7	62.4	54.8	23.5	19.1	31.7	3.2	2.5	4.3	1.1	0.5	2
5．特別活動における道徳教育	137	96	41	533	347	186	148	92	56	27	14	13	9	2	7
	16	17.4	13.5	62.4	63	61.4	17.3	16.7	18.5	3.2	2.5	4.3	1.1	0.4	2.3
6．総合的な学習の時間における道徳教育	95	69	26	512	336	176	206	128	78	31	14	17	9	3	6
	11.1	12.5	8.6	60	61.1	58.1	24.2	23.3	25.7	3.6	2.5	5.6	1.1	0.5	2
7．日常生活における道徳教育	237	172	65	521	330	191	70	38	32	16	6	10	9	4	5
	27.8	31.3	21.5	61.1	60	63	8.2	6.9	10.6	1.9	1.1	3.3	1.1	0.7	1.7
8．家庭との連携による道徳教育	79	63	16	406	279	127	300	178	122	50	25	25	19	6	13
	9.3	11.4	5.3	47.5	50.6	41.9	35.1	32.3	40.3	5.9	4.5	8.3	2.2	1.1	4.3
9．地域との連携による道徳教育	47	37	10	309	223	86	382	234	148	87	44	43	27	11	16
	5.5	6.7	3.3	36.3	40.6	28.4	44.8	42.6	48.8	10.2	8	14.2	3.2	2	5.3
10．重点目標の指導	206	151	55	524	337	187	95	50	45	17	8	9	11	4	7
	24.2	27.5	18.2	61.4	61.3	61.7	11.1	9.1	14.9	2	1.5	3	1.3	0.7	2.3

全体で比較すると、「だいたい達成されている」と回答した学校の割合が高いのは、「特別の教科　道徳」の指導が38.7%、各学年の道徳教育が36.1%、各学級の道徳教育が33.5%になっている。「まあまあ達成されている」を加えると、「特別の教科　道徳」が94.6%、各学年の道徳教育が94.6%、各学級の道徳教育84%になる。学校種で比較すると、「だいたい達成されている」ではいずれも小学校の方が10ポイント以上高くなっていが、「まあまあ達成されている」を加えると、あまり差はみられない。

2019年度と比較すると、この3項目についてはほとんど変わっていないか若干増えている。コロナ禍においても道徳教育が熱心に取り組まれていることがわかる。「あまり達成されていない」を全体で比較すると、「地域との連携による道徳教育」が44.8%、「家庭との連携による道徳教育」が35.1%と特に高くなっている。さらに、「総合的な学習の時間における道徳教育」24.2%、「各教科の特質に応じた道徳教育」23.5%となっており、これらが今後の課題として捉えられる。

（4）コロナ禍での全体計画の見直し

表12　コロナ禍において今年度どの程度全体計画の見直しを行いましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
全体的に見直した	56	34	22	9	16	7	21	10	9	8	1
	6.8	6.4	7.6	4.5	15.1	4.9	8.7	9.8	7.1	6.8	1
だいぶん行った	61	36	25	12	10	7	20	6	11	7	9
	7.5	6.8	8.7	6	9.4	4.9	8.3	5.9	8.7	6	9.3
ある程度行った	263	169	94	56	29	46	92	29	39	34	28
	32.2	31.9	32.6	27.9	27.4	32.4	38.2	28.4	30.7	29.1	28.9
少し行った	141	91	50	43	23	20	34	19	23	23	23
	17.2	17.2	17.4	21.4	21.7	14.1	14.1	18.6	18.1	19.7	23.7
行っていない	297	200	97	81	28	62	74	38	45	45	36
	36.3	37.7	33.7	40.3	26.4	43.7	30.7	37.3	35.4	38.5	37.1

コロナ禍において全体計画が見直されたのかどうかを尋ねた。全体でみると、「全体的に見直した」が6.8%、「だいぶん行った」が7.5%、「ある程度行った」32.2%、「少し行った」17.2%、「行っていない」は36.3%になっている。「特別の教科　道徳」が小学校、中学校共に全面実施された2019年度調査では、全体的に見直したが28%、「行っていない」が6%であった。コロナ禍における今年度は昨年度の全体計画を継続することを基本として、コロナ禍対応も含めた部分的な見直しが行われていたととらえることができる。校種別では、ほとんど変わらない。学校規模別では、200人以下の学校より701人以上の学校が、「全体的に見直した」で10.6ポイント、「だいぶん行った」で3.4ポイント高い。地域別では、「全体的見直した」で比較すると、北陸・中部が9.8%、関東・甲信越が8.7%である。

３．　「特別の教科　道徳」の年間指導計画について

（１）　今年度「特別の教科　道徳」の年間指導計画の内容に関してどの程度変更したか

表13　今年度「特別の教科　道徳」の年間指導計画の内容に関してどの程度変更しましたか

	回答														
	簡略になった			変わらない			詳しくなった			新しく入れた			書いていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
１．基本的発問	66	35	31	651	424	227	49	33	16	4	4	－	85	55	30
	7.7	6.4	10.2	76.1	77	74.7	5.7	6	5.3	0.5	0.7	－	9.9	10	9.9
２．板書計画	48	21	27	605	394	211	41	31	10	2	1	1	156	101	55
	5.6	3.8	8.9	71	71.9	69.4	4.8	5.7	3.3	0.2	0.2	0.3	18.3	18.4	18.1
３．事前の指導に関すること	63	31	32	632	416	216	36	27	9	5	4	1	118	72	46
	7.4	5.6	10.5	74	75.6	71.1	4.2	4.9	3	0.6	0.7	0.3	13.8	13.1	15.1
４．事後の指導に関すること	58	28	30	633	416	217	45	33	12	4	3	1	114	70	44
	6.8	5.1	9.9	74.1	75.6	71.4	5.3	6	3.9	0.5	0.5	0.3	13.3	12.7	14.5
５．家庭との連携に関すること	86	53	33	608	399	209	50	34	16	6	4	2	103	59	44
	10.1	9.7	10.9	71.3	72.7	68.8	5.9	6.2	5.3	0.7	0.7	0.7	12.1	10.7	14.5
６．地域との連携に関すること	107	66	41	600	394	206	32	22	10	1	－	1	114	68	46
	12.5	12	13.5	70.3	71.6	67.8	3.7	4	3.3	0.1	－	0.3	13.3	12.4	15.1
７．各教科等との関連について	71	45	26	668	429	239	72	51	21	7	4	3	35	20	15
	8.3	8.2	8.6	78.3	78.1	78.6	8.4	9.3	6.9	0.8	0.7	1	4.1	3.6	4.9

コロナ禍の今年度、「特別の教科　道徳」の年間指導計画で変更した程度を尋ねた。全体でみると、各項目において「変わらない」が70～80%以内である。2019年度調査と比べると、「変わらない」が全項目において11～34%増えている。学校種で比較すると「各教科等との関連について」以外はすべて小学校4ポイントほど高くなっている。「簡略になった」を見てみると「地域との連携に関すること」が12.5%、「家庭との連携に関すること」が10.1%になっている。「家庭との連携に関すること」は「詳しくなった」も5.9%で一番高くなっている。

（２）コロナ禍に直接かかわる教材を取り上げたか

表14　コロナ禍に直接かかわる教材を取り上げましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
入れていない	515	357	158	138	62	103	145	57	68	81	67
	60	64.6	51.8	64.8	56.4	70.1	57.3	51.8	50.7	67.5	65
１～２教材入れている	332	191	141	75	45	43	105	51	64	37	35
	38.7	34.5	46.2	35.2	40.9	29.3	41.5	46.4	47.8	30.8	34
３教材以上入れている	11	5	6	－	3	1	3	2	2	2	1
	1.3	0.9	2	－	2.7	0.7	1.2	1.8	1.5	1.7	1

年間指導計画にコロナ禍に直接かかわる教材を取り入れたか（副教材も含めて）を尋ねた。「入れていない」が60%、「1～2教材入れている」が38.7%、3教材以上入れているが1.3%であった。校種別では中学校の方が小学校より「入れている」学校の割合が13ポイント高い。学校規模別では、200人以下の学校より701人以上の学校が、「入れている」学校の割合が8.4ポイント高い。地域別では、「入れている」学校の割合が近畿が一番多く49.3%、次いで北陸・中部で48.2%となっている。

（３）重点的に指導内容項目の効果

表15　重点的に指導内容項目の効果

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
計画的に取組み効果も感じられた	375	242	133	104	42	76	99	55	55	50	45
	43.9	44	43.8	49.1	38.5	51.7	39.1	50.5	41.7	42	43.7
計画的に取り組んだがあまり効果的ではなかった	150	103	47	27	22	19	41	19	29	21	23
	17.6	18.7	15.5	12.7	20.2	12.9	16.2	17.4	22	17.6	22.3
あまり計画的には取り組めなかったが効果的だった	219	143	76	62	20	37	72	22	27	36	26
	25.6	26	25	29.2	18.3	25.2	28.5	20.2	20.5	30.3	25.2
計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった	74	46	28	15	18	13	24	11	14	6	7
	8.7	8.4	9.2	7.1	16.5	8.8	9.5	10.1	10.6	5	6.8
行っていない	36	16	20	4	7	2	17	2	7	6	2
	4.2	2.9	6.6	1.9	6.4	1.4	6.7	1.8	5.3	5	1.9

コロナ禍においても、重点的に指導した内容項目の指導の効果があったかどうかを尋ねた。全体でみると、「計画的に取組み効果も感じられた」が43.9%、「計画的に取組んだがあまり効果的でなかった」が17.6%、「あまり計画的には取り組めなかったが効果的だった」が25.6%、であり、69.5%の学校で効果的であったと答えている。2019年度と比較すると、「計画的に取組んだがあまり効果的でなかった」が3.4ポイント低くなり、「あまり計画的に取組めなかったが効果的だった」が7.6ポイント高くなっている。校種別で比較すると、あまり変わらないが、「行っていない」学校の割合が、中学校の方が3.7ポイント高い。学校規模別では、「701人以上の学校」の方が「200人以下の学校」に比べて「計画的に取組んだがあまり効果的ではなかった」が7.5ポイント、「計画的に取組めなかったし効果も感じられなかった」が9.4ポイント高くなっている。地域別では、「計画的に取組み効果も感じられた」で比較すると、北海道・東北が51.7%、北

陸・中部が50.5%と、半分以上の学校が評価している。

（4）年間指導計画の見直し

表16　年間指導計画の見直しを何回行いましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
4回以上見直した	33	14	19	8	3	5	11	3	8	4	2
	3.9	2.5	6.3	3.8	2.7	3.4	4.4	2.7	6.1	3.3	1.9
3回見直した	302	207	95	70	48	55	88	31	47	42	42
	35.3	37.6	31.3	32.9	43.6	37.4	34.9	28.2	35.6	35	40.8
2回見直した	173	110	63	35	23	30	50	27	22	28	18
	20.2	20	20.7	16.4	20.9	20.4	19.8	24.5	16.7	23.3	17.5
1回見直した	166	117	49	48	20	22	60	16	25	25	20
	19.4	21.2	16.1	22.5	18.2	15	23.8	14.5	18.9	20.8	19.4
見直さなかった	181	103	78	52	16	35	43	33	30	21	21
	21.2	18.7	25.7	24.4	14.5	23.8	17.1	30	22.7	17.5	20.4

今年度、「特別の教科　道徳」の年間指導計画をどの程度見直したかを尋ねた。全体でみると、「4回以上見直した」が3.9%、「3回見直した」35.3%、「2回見直した」20.2%、「1回見直した」が19.4%で、78.8%の学校で見直しが行われている。2019年度調査と比較すると、「3回以上見直した」が33.2ﾎﾟｲﾝﾄ、「2回見直した」が7.2ﾎﾟｲﾝﾄ増えている。校種別では、「4回以上見直した」が中学校が3.8ﾎﾟｲﾝﾄ高いが、「見直さなかった」は中学校が7ﾎﾟｲﾝﾄ高くなっている。学校規模別では、200人以下の学校と比べて、700人以上の学校が、「3回見直した」学校の割合が10.7ﾎﾟｲﾝﾄ、「2回見直した」が4.5ﾎﾟｲﾝﾄ高くなっており、「見直さなかった」学校の割合は9.9ポイント低くなっている。地域別では、「見直さなかった」学校の割合は、関東・甲信越が17.1%、中国・四国が17.5%と低くなっている。

（5）道徳の授業に関する学校体制は機能したか

表17　　道徳の授業に関する学校体制は機能しましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
機能したと思う	227	132	95	58	31	46	65	26	30	34	31
	26.6	24	31.1	27.2	28.2	31.5	25.8	23.6	22.6	28.3	30.4
だいたい機能したと思う	484	319	165	126	57	85	140	60	75	69	57
	56.7	58.1	54.1	59.2	51.8	58.2	55.6	54.5	56.4	57.5	55.9
あまり機能しなかったと思う	98	67	31	21	15	10	34	16	22	11	6
	11.5	12.2	10.2	9.9	13.6	6.8	13.5	14.5	16.5	9.2	5.9
来年度見直したい	34	23	11	8	4	2	10	6	5	5	6
	4	4.2	3.6	3.8	3.6	1.4	4	5.5	3.8	4.2	5.9
体制ができていない	11	8	3	－	3	3	3	2	1	1	2
	1.3	1.5	1	－	2.7	2.1	1.2	1.8	0.8	0.8	2

今年度学校全体で道徳の授業に取り組もうとする体制は機能したかを尋ねた。全体でみると、「機能したと思う」が26.6%、「だいたい機能したと思う」が56.7%で、83.3%の学校において、肯定的である。2019年度調査と比較すると、ほとんど変わっていない。校種別でみると、「機能したと思う」学校の割合が、中学校の方が6.1ﾎﾟｲﾝﾄ高くなっている。学校規模別では、「701人以上の学校」が「200人以下の学校」に比べて、「あまり機能しなかったと思う」

と答えた学校の割合が、3.7ポイント高くなっている。
地域別では、「機能したと思う」で比較すると、北海道・東北が31.5%、九州・沖縄が30.4%と高くなっている。

４．　「特別の教科　道徳」の授業について

（１）今年度の道徳の授業を昨年度と比較してどのように感じたか

表18　今年度の道徳の授業を昨年度と比較してどのように感じますか

	回答														
	かなりよくなっていると感じる			少しよくなっていると感じる			ほとんど変わっていないと感じる			少し悪くなっていると感じる			かなり悪くなっていると感じる		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
１．低学年の道徳授業（中学校では１年）	86	47	39	334	202	132	425	296	129	9	5	4	－	－	－
	10.1	8.5	12.8	39.1	36.7	43.4	49.8	53.8	42.4	1.1	0.9	1.3	－	－	－
２．中学年の道徳授業（中学校では２年）	89	48	41	329	198	131	427	299	128	8	4	4	－	－	－
	10.4	8.7	13.5	38.6	36.1	43.1	50.1	54.5	42.1	0.9	0.7	1.3	－	－	－
３．高学年の道徳授業（中学校では３年）	91	52	39	310	189	121	441	304	137	12	4	8	－	－	－
	10.7	9.5	12.8	36.3	34.4	39.7	51.6	55.4	44.9	1.4	0.7	2.6	－	－	－
４．事前の指導の工夫	50	29	21	279	169	110	520	350	170	4	1	3	－	－	－
	5.9	5.3	6.9	32.7	30.8	36.2	61	63.8	55.9	0.5	0.2	1	－	－	－
５．導入の工夫	83	51	32	354	215	139	414	282	132	2	1	1	－	－	－
	9.7	9.3	10.5	41.5	39.2	45.7	48.5	51.4	43.4	0.2	0.2	0.3	－	－	－
６．教材提示の工夫	92	56	36	357	216	141	401	277	124	3	－	3	－	－	－
	10.8	10.2	11.8	41.9	39.3	46.4	47	50.5	40.8	0.4	－	1	－	－	－
７．展開の工夫	82	50	32	352	215	137	407	278	129	12	6	6	－	－	－
	9.6	9.1	10.5	41.3	39.2	45.1	47.7	50.6	42.4	1.4	1.1	2	－	－	－
８．終末の工夫	73	44	29	321	203	118	454	299	155	5	3	2	－	－	－
	8.6	8	9.5	37.6	37	38.8	53.2	54.5	51	0.6	0.5	0.7	－	－	－
９．教材の多様性	53	30	23	298	176	122	483	331	152	17	11	6	1	1	－
	6.2	5.5	7.6	35	32.1	40.3	56.7	60.3	50.2	2	2	2	0.1	0.2	－
10．事後の指導の工夫	48	32	16	244	151	93	553	363	190	8	3	5	－	－	－
	5.6	5.8	5.3	28.6	27.5	30.6	64.8	66.1	62.5	0.9	0.5	1.6	－	－	－
11．板書の工夫	75	52	23	309	201	108	464	294	170	5	2	3	－	－	－
	8.8	9.5	7.6	36.2	36.6	35.5	54.4	53.6	55.9	0.6	0.4	1	－	－	－
12．子どもたちへの対応	80	55	25	370	229	141	396	259	137	7	6	1	－	－	－
	9.4	10	8.2	43.4	41.7	46.4	46.4	47.2	45.1	0.8	1.1	0.3	－	－	－
13．授業の評価	70	39	31	331	203	128	438	298	140	7	3	4	－	－	－
	8.3	7.2	10.2	39.1	37.4	42.2	51.8	54.9	46.2	0.8	0.6	1.3	－	－	－

今年度コロナ禍の中で行われている道徳の授業は、全体的にみて昨年度と比べてどのように感じるかを尋ねた。項目の１，２，３は小学校と中学校で対象が異なるので校種別でみてみると、中学校の方が「かなりよくなっている」とした学校の割合が高くなっている。他の項目でみると、「ほとんど変わっていない」とした学校の割合が高いのは、「事後の学習の工夫」が64.8%、「事前の学習の工夫」が61%になっている。逆に少ないのは「子どもたちへの対応」で46.4%になっている。校種別でみると「板書の工夫」以外のすべてにわたり、中学校の方が小学校よりも10～2ポイント低くなっている。つまり中学校の方が授業改善に取り組んでいるということになる。2019年度調査と比較すると、全ての項目にわたって「ほとんど変わっていない」が30～2ポイント高くなっている。全体的には授業改善はあまり進められなかったととらえることができる。

（２）　今年度の道徳の授業を見て効果を感じた授業の方法

表19　今年度の道徳の授業を見て効果を感じた授業の方法はどのようなものでしたか

	回答														
	効果を感じている			まあまあ効果を感じる			あまり効果を感じない			ほとんど効果を感じない			行っていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．登場人物への自我関与が中心の授業	132	99	33	552	353	199	163	94	69	2	－	2	3	1	2
	15.5	18.1	10.8	64.8	64.5	65.2	19.1	17.2	22.6	0.2	－	0.7	0.4	0.2	0.7
2．問題解決的な授業	167	116	51	512	318	194	153	102	51	10	5	5	9	5	4
	19.6	21.2	16.7	60.2	58.2	63.6	18	18.7	16.7	1.2	0.9	1.6	1.1	0.9	1.3
3．道徳的行為に関する体験的な授業	124	89	35	435	281	154	191	118	73	23	16	7	77	41	36
	14.6	16.3	11.5	51.2	51.6	50.5	22.5	21.7	23.9	2.7	2.9	2.3	9.1	7.5	11.8
4．各教科との関連を重視した授業	59	47	12	433	299	134	290	166	124	27	13	14	41	20	21
	6.9	8.6	3.9	50.9	54.9	43.9	34.1	30.5	40.7	3.2	2.4	4.6	4.8	3.7	6.9
5．学級活動との関連を重視した授業	131	94	37	507	318	189	185	120	65	7	3	4	20	10	10
	15.4	17.2	12.1	59.6	58.3	62	21.8	22	21.3	0.8	0.6	1.3	2.4	1.8	3.3
6．学校行事との関連を重視した授業	133	86	47	460	278	182	191	137	54	28	23	5	38	22	16
	15.6	15.8	15.5	54.1	50.9	59.9	22.5	25.1	17.8	3.3	4.2	1.6	4.5	4	5.3
7．総合的な学習の時間との関連を重視した授業	89	64	25	440	285	155	262	161	101	20	14	6	37	19	18
	10.5	11.8	8.2	51.9	52.5	50.8	30.9	29.7	33.1	2.4	2.6	2	4.4	3.5	5.9
8．学級経営との関連を重視した授業	166	128	38	500	319	181	164	90	74	9	5	4	13	5	8
	19.5	23.4	12.5	58.7	58.3	59.3	19.2	16.5	24.3	1.1	0.9	1.3	1.5	0.9	2.6
9．日常生活との関連を重視した授業	222	163	59	497	305	192	119	72	47	3	2	1	6	2	4
	26.2	30	19.5	58.7	56.1	63.4	14	13.2	15.5	0.4	0.4	0.3	0.7	0.4	1.3

今年度の道徳の授業を見て、次のような授業についてどのような効果を感じたかを尋ねた。「効果を感じている」を全体でみると、「日常生活との関連を重視した授業」が26.2%、「問題解決的な授業」が19.6%、「学級経営との関連を重視した授業」19.5%となっている。2019年度調査と比較すると、「効果を感じている」は全部の項目において低くなっている。小学校と中学校の差もほとんどの項目で広がっている。校種別でみると、全てにわたって小学校の方が、中学校に比べて10～4ポイントほど高くなっている。「あまり効果を感じない」で比較すると、「各教科との関連を重視した授業」が10.2ポイント、「学級経営との関連を重視した授業」が7.7ポイント高くなっている。

（3）　独自に持たせた道徳ノートや道徳ファイルは有効であったか

表20　独自に持たせた道徳ノートや道徳ファイルは有効でしたか

	回答														
	たいへん効果的であった			ある程度効果的であった			少しは効果的であった			改善を必要とする			持たせていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．道徳ノート	147	100	47	308	212	96	98	59	39	18	12	6	274	163	111
	17.4	18.3	15.7	36.4	38.8	32.1	11.6	10.8	13	2.1	2.2	2	32.4	29.9	37.1
2．道徳ファイル	98	64	34	310	189	121	126	65	61	21	14	7	292	212	80
	11.6	11.8	11.2	36.6	34.7	39.9	14.9	11.9	20.1	2.5	2.6	2.3	34.5	39	26.4
3．道徳教育の重点的指導用のノートかファイル（冊子も含む）	40	25	15	141	95	46	95	59	36	13	9	4	544	351	193
	4.8	4.6	5.1	16.9	17.6	15.6	11.4	10.9	12.2	1.6	1.7	1.4	65.3	65.1	65.6

道徳教育の重点的指導用ノートやファイルの効果について尋ねた。独自の道徳ノートを「持たせていない」学校の割合が、全体で32.4%、学校種別で比較すると、小学校が29・9%で中学校に比べて7.2ポイント低い。「大変効果的であった」は全体で17.4%、「ある程度効果的であった」は36.4%で、小学校、中学校共に肯定的回答が50%を超えている（使用した学校のみで比率を出すと80%近くになる）。道徳ファイルは「持たせていない」学校の比率が全体で34.5%、学校種で比較すると小学校が39%で中学校より12.6ポイント高くなっており、道徳ノートと逆である。「大変効果的であった」が全体で11.6%、「ある程度効果的であった」が36.6%で、ここでも小学校、中学校共に肯定的回答が50%近くになっている（使用した学校のみで比率を出すとここでも80%近くになる）。2019年度調査と比較すると、独自の道徳ノートもファイルも同じような傾向を示している。道徳教育の重点的指導用のノートかファイル（冊子も含む）については、「持たせていない」学校が全体で65.3%、小学校、中学校共に変わらない。

使用した学校では9割以上の学校において肯定的回答をしている。なお、2019年度調査と比較すると「持たせていない」学校の比率が6.7ポイント低くなっている。

（４）今年度の「特別の教科　道徳」の評価がどのようになされたか

表21　今年度の「特別の教科　道徳」の評価がどのようになされましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
各学期ごとに行った	341	241	100	86	31	51	125	32	46	38	55
	40.1	44	33.1	41	28.2	34.9	49.8	29.1	34.8	31.7	55
年度末にまとめて行った	442	256	186	111	67	87	109	67	68	74	41
	52	46.7	61.6	52.9	60.9	59.6	43.4	60.9	51.5	61.7	41
その他	67	51	16	13	12	8	17	11	18	8	4
	7.9	9.3	5.3	6.2	10.9	5.5	6.8	10	13.6	6.7	4

今年度、「特別の教科　道徳」の評価はどのようになされたかを尋ねた。「各学期ごとに行った」が、全体で40.1%、「年度末に行った」が52%である。校種別では、「各学期ごとに行った」は小学校が44%、中学校が33.1%で10.9ポイント中学校が低くなっている。学校規模別では、「各学期ごとに行った」が、701人以上の学校が28.2%で、200人以下の学校に比べて12.8ポイント低くなっている。地域別では、「各学期ごとに行った」が、九州・沖縄が55%。関東甲信越が49.8%となっている。北陸・中部が29.1%と低くなっている。2019年度調査と「各学期ごとに行った」を比較すると、全体はあまり変化はないが、地域別でみると、九州・沖縄が16ポイント高くなっており、近畿は12.2ポイント、関東甲信越は9.2ポイント低くなっている。

（５）今年度、道徳の授業の研修をどの程度行ったか

表22　今年度、道徳の授業の研修をどの程度行いましたか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
行っていない	324	198	126	75	44	55	101	43	57	39	31
	37.9	36	41.4	35.2	40	37.7	39.9	39.1	42.9	32.8	30.4
１～３回行った	458	308	150	120	55	78	129	63	70	67	57
	53.6	56	49.3	56.3	50	53.4	51	57.3	52.6	56.3	55.9
４～６回行った	43	23	20	13	7	5	14	4	2	8	11
	5	4.2	6.6	6.1	6.4	3.4	5.5	3.6	1.5	6.7	10.8
７回以上行った	29	21	8	5	4	8	9	－	4	5	3
	3.4	3.8	2.6	2.3	3.6	5.5	3.6	－	3	4.2	2.9

今年度、コロナ禍の中で道徳の授業の研修をどの程度行ったかを尋ねた。全体でみると、「行っていない」学校の割合が37.9%、校種別でみると中学校が41.4%、小学校が36%で、小学校に比べて15.4ポイント高くなっている。学校規模別では、701人以上の学校が40%で、200人以下の学校の35.2%に比べて4.8ポイント高い。地域別では近畿が42.9%、関東・甲信越が39.9%、北陸・中部が39.1%になっている。「4回以上行った」学校の割合を見てみると、小学校より中学校が多いし、学校規模ではほとんど変わらない。地方別では、関東・甲信越が23%、九州・沖縄

が14%、北海道・東北と中国・四国が13%になっている。2019年度調査と比較すると、「行っていない」学校の割合が、19.9ポイント増えている。

（６）学年や学年段階で集まっての道徳授業の話し合いの程度

表23　学年や学年段階で集まっての道徳授業の話し合いがどの程度行われていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
よく行われている	140	68	72	34	16	25	38	18	22	24	16
	16.5	12.5	23.7	16.1	14.7	17.1	15.1	16.5	16.5	20.7	15.7
ときどき行われている	413	248	165	84	58	64	121	52	67	60	52
	48.7	45.6	54.3	39.8	53.2	43.8	48.2	47.7	50.4	51.7	51
あまり行われていない	195	152	43	64	24	36	60	23	32	24	21
	23	27.9	14.1	30.3	22	24.7	23.9	21.1	24.1	20.7	20.6
ほとんど行われていない	100	76	24	29	11	21	32	16	12	8	13
	11.8	14	7.9	13.7	10.1	14.4	12.7	14.7	9	6.9	12.7

今年度コロナ禍の中で、各学年や学年段階で先生方が集まっての道徳授業の話し合いはどの程度行われたかを尋ねた。全体でみると、「よく行われている」が16.5%、「ときどき行われている」が48.7%で足すと65.2%になる。2019年度調査と比較すると、あまり大きな変化はない。校種別で比較すると「よく行われている」が、中学校が23.7%で、小学校は12.5%で、11.2ポイント高い。「ときどき行われている」でも8.7ポイント高くなっている。学校規模別では、「ときどき行われている」において、701人以上の学校が200人以下の学校に比べて13.4ポイント高くなっている。地方別では、「よく行われている」は中国・四国が20.7%「ときどき行われている」が51.7%で、最も高くなっている。

５．　回答者から見た実態

（１）　教師の様子

表24　貴校の教師方は道徳教育や道徳の授業に熱心ですか

	回答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
１．道徳教育に熱心な教師が多い	146	105	41	514	334	180	178	102	76	17	10	7
	17.1	19.1	13.5	60.1	60.6	59.2	20.8	18.5	25	2	1.8	2.3
２．道徳の授業に熱心な教師が多い	133	89	44	511	344	167	190	105	85	20	12	8
	15.6	16.2	14.5	59.8	62.5	54.9	22.2	19.1	28	2.3	2.2	2.6
３．道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い	117	84	33	477	314	163	241	139	102	17	12	5
	13.7	15.3	10.9	56	57.2	53.8	28.3	25.3	33.7	2	2.2	1.7
４．道徳の授業を楽しみにしている教師が多い	31	17	14	360	264	96	416	246	170	47	22	25
	3.6	3.1	4.6	42.2	48.1	31.5	48.7	44.8	55.7	5.5	4	8.2

アンケートの回答者からみての教師の実態について尋ねた。「道徳教育に熱心な教師が多い」に対して「そう思う」と答えられた先生は17.1%、「だいたいそう思う」が60.1%である。校種別で比較すると、小学校の先生の方が、「そう思う」と答えた割合が5.6ポイント高い。「道徳の授業に熱心な教師が多い」に対しては、同じような傾向であるが、「だいたいそう思う」と回答された先生の割合は、小学校の方が7.6ポイント高い。「道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い」では、「そう思う」が全体で13.7%、「だいたいそう思う」は

56%である。校種別で比較すると小学校の方が合計で8.8ポイント高くなっている。「道徳の授業を楽しみにしている教師が多い」では、全体で「そう思う」が3.6%、「だいたいそう思う」が42.2%になっている。校種別で比較すると「そう思う」は中学校の方が1.5%高いが「だいたいそう思う」では中学校が31.5%に対して小学校は48.1%と、16.6ポイントの差がある。2019年度調査と比較すると、ほぼ同じ傾向にあるが、「道徳の授業を楽しみにしている教師が多い」は、全体で3.4ポイント少なくなっている。

（２）家庭や地域の様子

表25　家庭や地域の人々は道徳教育に熱心ですか、協力的ですか

	回答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
１．道徳教育について熱心な保護者が多くなった	16	10	6	230	160	70	512	334	178	93	45	48
	1.9	1.8	2	27	29.1	23.2	60.2	60.8	58.9	10.9	8.2	15.9
２．道徳教育について熱心な地域の人たちが多くなった	11	8	3	208	147	61	514	337	177	117	56	61
	1.3	1.5	1	24.5	26.8	20.2	60.5	61.5	58.6	13.8	10.2	20.2
３．地域の人たちの協力が得られるようになった	37	31	6	282	211	71	399	241	158	132	65	67
	4.4	5.7	2	33.2	38.5	23.5	46.9	44	52.3	15.5	11.9	22.2
４．保護者の協力が得られるようになった	38	30	8	330	237	93	379	233	146	103	48	55
	4.5	5.5	2.6	38.8	43.2	30.8	44.6	42.5	48.3	12.1	8.8	18.2

「道徳教育について熱心な保護者が多くなった」は、全体で「そう思う」で1.6%、「だいたいそう思う」27%で、肯定的に答えた学校の割合は、28.6%である。「道徳教育に熱心な地域の人たちが多くなった」は、全体で「そう思う」が1.3%、「だいたいそう思う」24.5%で、肯定的に答えた学校の割合は25.8%である。「地域の人たちの協力が得られるようになった」は、全体で「そう思う」が4.4%、「だいたいそう思う」33.2%で肯定的に答えた学校の割合は37.6%である。「保護者の協力が得られるようになった」では、全体で「そう思う」が4.5%、「だいたいそう思う」38.8%で、肯定的に答えた学校の割合が43.3%である。校種別でみると、全ての項目で、「ほとんど思わない」の割合が小学校の倍になっている。2019年度調査と比較すると、肯定的に答えた学校の割合が、全項目において4～6ポイント高くなっている。

６．　回答者から見た意識及び要望

（１）道徳教育の効果や捉え方に対する意見に対する共感度

表26　次のような道徳教育の効果や捉え方に対する意見に対してどう思いますか

	回答														
	そうだという思いを強くした			だいぶんそう思えるようになった			少しそう思えるようになった			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
１．道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる	297	199	98	352	232	120	165	100	65	37	17	20	3	2	1
	34.8	36.2	32.2	41.2	42.2	39.5	19.3	18.2	21.4	4.3	3.1	6.6	0.4	0.4	0.3
２．教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと語すべきだ	198	123	75	321	208	113	215	141	74	108	70	38	13	9	4
	23.2	22.3	24.7	37.5	37.7	37.2	25.1	25.6	24.3	12.6	12.7	12.5	1.5	1.6	1.3
３．道徳教育は、他律的な道徳性の育成が根幹にあって自律的な道徳性がはぐくまれる	116	76	40	321	202	119	285	191	94	118	74	44	11	6	5
	13.6	13.8	13.2	37.7	36.8	39.4	33.5	34.8	31.1	13.9	13.5	14.6	1.3	1.1	1.7
４．どのような子どもたちも、学校に来ればしっかりと成長できる	136	91	45	305	211	94	230	142	88	164	97	67	16	9	7
	16	16.5	15	35.8	38.4	31.2	27	25.8	29.2	19.3	17.6	22.3	1.9	1.6	2.3
５．学力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	124	84	40	278	185	93	278	179	99	156	94	62	16	8	8
	14.6	15.3	13.2	32.6	33.6	30.8	32.6	32.5	32.8	18.3	17.1	20.5	1.9	1.5	2.6
６．体力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる	56	38	18	194	132	62	292	196	96	270	161	109	41	23	18
	6.6	6.9	5.9	22.7	24	20.5	34.2	35.6	31.7	31.7	29.3	36	4.8	4.2	5.9
７．いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される	230	154	76	371	237	134	209	131	78	42	28	14	2	1	1
	26.9	27.9	25.1	43.4	43	44.2	24.5	23.8	25.7	4.9	5.1	4.6	0.2	0.2	0.3
８．道徳教育を充実させることで、家庭との連携が深まる	104	78	26	278	184	94	282	190	92	168	87	81	18	10	8
	12.2	14.2	8.6	32.7	33.5	31.2	33.2	34.6	30.6	19.8	15.8	26.9	2.1	1.8	2.7
９．道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる	93	70	23	255	169	86	280	191	89	188	100	88	34	19	15
	10.9	12.8	7.6	30	30.8	28.6	32.9	34.8	29.6	22.1	18.2	29.2	4	3.5	5

本アンケートに回答されている先生に、道徳教育の効果に対する意見についてどう思うかを尋ねた。「あまり思わない」「ほとんど思わない」という否定的な回答をした学校の割合でみると、一番低いのが「道徳の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道徳性は高められる」では、全体で4.7%、次が「いじめなどの子どもたちの問題行動は、道徳教育を充実させることである程度改善される」で、全体で5.1%、一番高いのは「体力の育成は、道徳教育を充実させることで高められる」で、全体で36.5%、次が「道徳教育充実させることで、地域との連携が深まる」で、全体で26.1%である。これらの結果からここに挙げた全項目に対して道徳教育の効果を感じていることがわかる。2019年度調査と比較すると、全ての項目において否定的な回答をした学校の割合が少し増えている。

（２） 道徳教育充実への要望

表27　次のような道徳教育充実への要望についてどう思いますか

	回答											
	よく思う			まあまあ思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1．道徳教育を充実させるための特別予算が欲しい	114	71	43	316	218	98	359	221	138	66	40	26
	13.3	12.9	14.1	37	39.6	32.1	42	40.2	45.2	7.7	7.3	8.5
2．道徳教育の指定校を多くしてほしい	34	21	13	177	120	57	504	317	187	139	91	48
	4	3.8	4.3	20.7	21.9	18.7	59	57.7	61.3	16.3	16.6	15.7
3．道徳の専門教師を加配してほしい	195	108	87	311	190	121	260	184	76	88	68	20
	22.8	19.6	28.6	36.4	34.5	39.8	30.4	33.5	25	10.3	12.4	6.6
4．道徳教育研修の機会を多くしてほしい	139	86	53	496	317	179	173	113	60	44	32	12
	16.3	15.7	17.4	58.2	57.8	58.9	20.3	20.6	19.7	5.2	5.8	3.9
5．文部科学省は、道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	208	121	87	405	267	138	201	136	65	40	26	14
	24.4	22	28.6	47.4	48.5	45.4	23.5	24.7	21.4	4.7	4.7	4.6
6．文部科学省は、「特別の教科道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	226	131	95	410	274	136	181	121	60	37	24	13
	26.5	23.8	31.3	48	49.8	44.7	21.2	22	19.7	4.3	4.4	4.3

回答いただいた先生に、道徳教育を充実させるために次のことをどの程度要望するかと尋ねた。「よく思う」と「まあまあ思う」の肯定的に答えた学校の割合で各項目を見ると、「文部科学省は、「特別の教科　道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい」74.5%、「道徳教育研修の機会を多くしてほしい」も同じく74.5%である。次が「文部科学省は、道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい」が71.8%、「道徳の専門教師を加配してほしい」59.2%となっている。校種別で比較するとあまり差はないが、「道徳の専門教師を加配してほしい」は、肯定的に答えた学校の割合は、小学校が54.1%に対し、中学校は68.4%である。2019年度調査と比較すると、肯定的に答えた学校の割合は、全部の項目にわたって増えている。特に「道徳教育研修の機会を多くしてほしい」が6.5ポイント、「文部科学省は、道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい」が4.8ポイント、「文部科学省は、「特別の教科　道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい」4.5ポイント高くなっている。

（押谷由夫）

Ⅲ．調査結果の自由記述の分析

本調査においては、４つの設問の中で、自由記述をお願いした。それぞれについて、内容を紹介し分析する。

１．　コロナ禍による休校時の道徳学習の対応についての自由記述

１．具体的な課題を示した（17.9%）・２．具体的な課題は出さなかったが意識するように働きかけた（36%)・３．何も触れなかった（45.6%）で、何も触れなかった学校が約半数。

◆１と答えた回答の自由記述を見ると

＊コロナ禍の中、オンラインで通常通りに授業を行った学校が　7件

＊その他120件においては、何らかの工夫をして道徳の授業を行った。

累計①（102件）…指定した教材・新聞記事・私たちの道徳・その他の課題を教師が出しそれに対してWS・プリント・道徳ノート等に自分の感想や考えを書く

累計②（10件）…NHKの道徳教材・ビデオ教材・こころシリーズを視聴し、その感想や自分の考えを書く

累計③（8件）…道徳に関わるアンケート調査・家の手伝い・学校独自の取組をする・道徳ノートに不安に思うことや伝えたいこと等を書く・ボランティア活動をする・一言日記等を書く

※ 各校の実態に応じて,道徳教育及び道徳科に係る何らかの取組を工夫している

２．　学校再開以降これまでの道徳の授業での子供達の様子についての自由記述

◆今までと変わらず、落ち着いて学習していると答えたのが　140件

◆プラス面で捉えていたのが　174件

・かかわりや話し合いを楽しみ意欲的に発言していた・友達の考えをしっかり聞き考えていた・命の大切さや人権に対する意識が高まった・思いやりや感謝の念をもって生活するようになった・自分事として向き合い、生活の中で実践しようとしている・ルールやマナーの大切さへの認識が高まった等

◆マイナス面で捉えていたのが　64件

・話し合い活動の制限により、発言・学修内容・深まりが不十分となった・マスク着用により発言のしにくさや表情が読み取りにくい等

◆授業以外の様子　23件

・ストレス・窮屈さ・疲れを感じている・かかわりが希薄になった・自己有用感や学習意欲が下がった等

※　教師は色々と工夫して道徳の授業を行ったが、話し合い活動の制限による影響は大きい。また、子供が抱える精神面での課題も捉えられ、集団及び個別対応が求められる。

３．　道徳の授業がコロナ禍によって従来通りにできなかったことについての自由記述

◆特に支障がない等　13件

◆話し合い活動等　491件
◆役割演技・ロールプレイ・SST 等　68件
◆外部講師の招聘・ゲストティーチャーの活用・公開授業の中止等　17件
◆体験活動・学年道徳・歌等　11件

※　臨時休校にならなかった学校もあり、そうしたところは特に支障はないとしているが、多様な価値観に触れ、道徳的価値についての理解や自覚を深める話し合いの場が制限されたことは、道徳の授業を行う上で大きな影響をお呼びしているのが窺える。

※　また、役割演技等も制限されるとともに、そこで使用する用具や教具等の共有ができないという実態も見られた。SSTも子供自身が、実際にかかわりながら行うため、行う上での難しさがあったようだ。

※　外部講師・GTを招聘しての授業や公開授業の中止等により、年間指導計画の予定変更をしながら、対応してきたことが窺える。

※　体験活動・学年の連携による道徳の授業や・終末での歌や聖歌等の合唱等も制限されたことが窺える。

４．　この1年を振り返って道徳教育や「特別の教科　道徳」の大切さや重要性の自由記述

◆差別・偏見・人権・公正公平・いじめ等について考えることの重要性　200件
◆他者の心情を考えたり、思いやったり・寄り添ったりすることの重要性　128件
◆自分で考えて判断したり、行動したり、自己をコントロールしたりすることの重要性　79件
◆命の大切さ・人間の尊厳・家族愛・感謝・生きる喜び等について考える重要性　55件
◆コロナに対応した内容の取扱いの必要性・医療従事者への感謝・感染者や家族への思いやり等　50件
◆コロナにかかわらず、日頃から道徳教育を行うことの重要性　　43件
◆規則の尊重・モラルやマナー・ネット使用（SNS等）のモラルの重要性　37件
◆子供同士や他者とのかかわりやつながりの重要性　31件
◆自分の心や他者の気持ちや立場を多面的・多角的に見つめる重要性　18件
◆子供の心のケア・自己有用感・自己肯定感・心のはきだし・心の教育の重要性　15件

※　コロナパンデミックという世界的な大きな出来事は、子供達そして私たち教師にも、今度どのような道徳教育が求められるのかという視点を与えた。特に個々に上げら内容については、今後の道徳教育及び道徳科における指導に生かしていきたい。

（齋藤道子）

Ⅳ.　テキストマイニングを用いた自由記述の分析

ここでは、アンケートの最後に、「コロナ禍における道徳教育と「特別の教科　道徳」の充実に関して、ぜひ伝えたいことや、ご要望、ご意見、などがありましたら、回答用紙の方に自由にご記入ください」として書いてもらった内容を、「テキストマイニングツール「KH

Coder」で、以下の基本的な機能を使って分析した。

①抽出語リスト(データから抽出された語を度数表示)

②ＫＷＩＣコンコーダンス(元の文から検索して「語」の使われ方を確認)

③共起ネットワーク(抽出語間あるいは抽出語と外部変数との関連性と強さを表現)

④関連語検索(特定の抽出語と関連性の強い抽出語を検索する)

1　抽出語リスト（上位10語、降順）からの読取り

ここでは、「ぜひ伝えたいこと」として書かれていたことについて検討する。

ist

	抽出語	品詞/活用	頻度
1	道徳	名詞	101
2	思う	動詞	56
3	授業	サ変名詞	55
4	教育	サ変名詞	45
5	コロナ	名詞	40
6	教科	名詞	38
7	感じる	動詞	32
8	考える	動詞	32
9	大切	形容動詞	30
10	子ども	名詞	27
11	評価	サ変名詞	21
12	学校	名詞	18
13	多い	形容詞	18
14	先生	名詞	17
15	現場	名詞	16
16	時間	副詞可能	16
17	教材	名詞	15
18	教師	名詞	15
19	充実	サ変名詞	15
20	必要	形容動詞	15
21	差別	サ変名詞	14
22	指導	サ変名詞	14
23	教員	名詞	12
24	心	名詞C	12
25	人	名詞C	12
26	行う	動詞	11
27	本校	名詞	11
28	教科書	名詞	10
29	生徒	名詞	10
30	意識	サ変名詞	9

図１　「ぜひ伝えたいこと」抽出語リスト

ュナ」という語をＫＷＩＣコンコーダンスという原文検を使って探っていくと、［コロナ禍における道徳教育・に関する考え方］［子どもの状況］［道徳科の推進状いうカテゴリーに属する文が見られる。

道徳教育・道徳科に関する考え方］では、例えば、「コロ禍の中であってこそ道徳教育・道徳科が一層必要である、から授業時間の確保も必要」と述べられていた。

ュロナ禍の子どもの状況］では、「コロナ禍の中、その影を受ける子どもの厳しい状況がある一方、その中でも学びける」子どもの姿について述べられていた。

ュロナ禍での道徳科の推進状況］では、通常の子どもどうの交流は困難であったけれど、教師が苦労しながらも着こ授業を進めようとしていた(自作教材を作成したり、実際の状況を教材にしたりする)ことが窺われる。

2　全体の抽出語の共起ネットワーク(抽出語と抽出語との関係性)からの読取り

抽出語と抽出語との関連性を表す共起ネットワークで分析すると、「8つの語の集まり」が見られる。それぞれ語の集まりにはキーワードがあり、それを原文検索して、語の集まりの意味するところを探索した結果、以下のようにネーミングをした。

1コロナ禍の中「道徳教育・道徳科推進の課題」2「各校独自の取り組み」3「今児童にとって大切にすべきことと」4「今こそ必要なこと」5「子どもにとって効果的な教材」6「コロナ対応・新しい教育内容の対応に関する負担感」7「教師の意識(工夫)で子どもは変わる」8「研修について願うこと」である。ここでは、1のみを分析する。「子ども」「大切」「充実」をキーワードとして、語の集まりの意味を探索した。

「子ども」に関わっては、コロナ禍の中、生活習慣の乱れ、心無い言動をとる児童がふえたと懸念する声がある一方、逆に教師の前向きな取組によって変容する子どもの姿が見られた。

「大切」に関わっては、「教科化され、評価も何となく進み、現場ではもうこれでよいのではという空気になっている。」それでも「教科化の意味と道徳の「良さ」「大切さ」を広く

強く伝えていきたい」と奮起する管理職の思いも述べられていた。

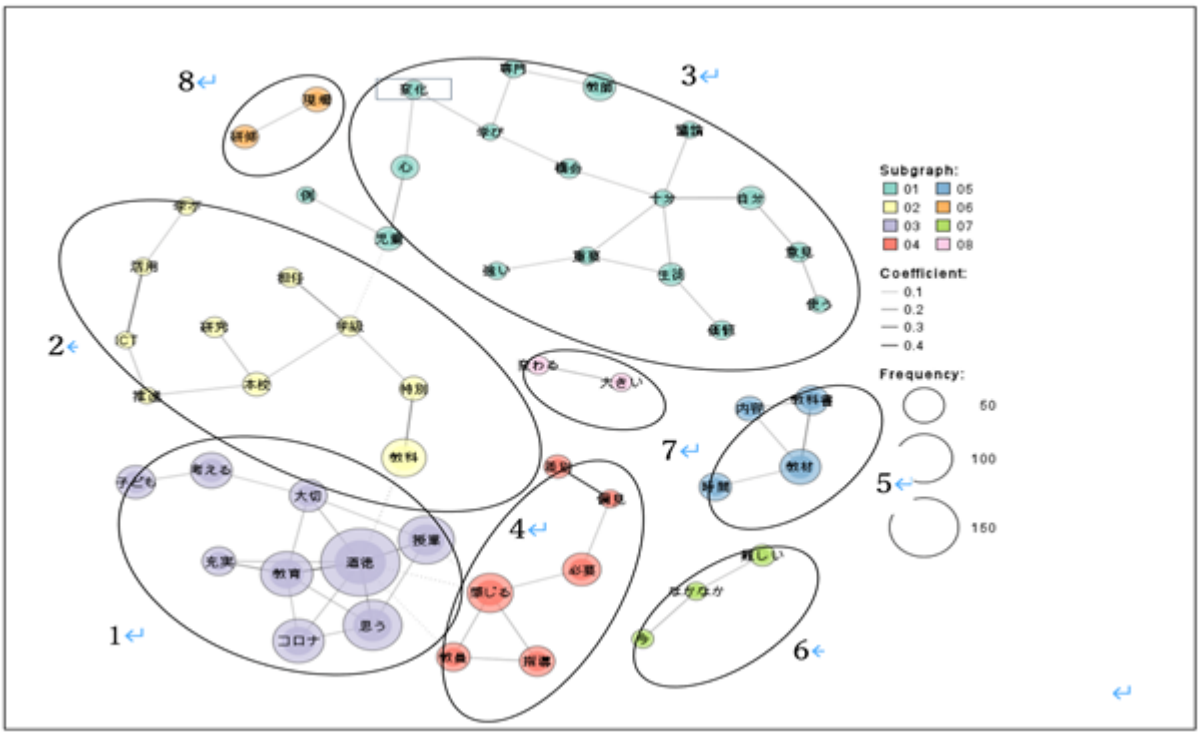

図2　2020年度質問4項目合同抽出語の共起ネットワーク

「充実」に関わっては、加配・時間確保・実態に応じた教材の充実を望む声があった。

以上キーワードから、１の語の集まりには、「コロナ禍の中、道徳教育・道徳科の推進の課題」と名付けた。

3　外部変数「回答者の職階」と抽出語の関係性を表した共起ネットワークからの読取り

外部変数「回答者の職階」と抽出語の関わり探索した。職階【校長・教頭・道徳教育推進教師】は、中心性の高い(他の抽出語とのつながりを多くもつ)抽出語である「授業」「コロナ」「教科」「道徳」などと強い関係性をもっている。【教務主任（研究主任）】も比較的強い関係性がある。【それら以外】は他の職階ほど強い関係性は見られない。しかし、『授業』については、すべての職階に関係性がある。『授業』を原文検索すると、「どの職階においてもコロナ禍においてこそ道徳の授業は大切だ」る」、「通常の授業推進には困難が伴う」、「授業実施の工夫と着実な取り組みが必要」との認識が見られた。

4　まとめ

①「今回はコロナ禍における道徳教育に関する調査である」ことから、子どもや教職員の安

全・安心を守りながらの教育実践、およびその展開にあたり、学校現場の苦労が多く述べられていた。全国のコロナ禍の状況は異なるものの、道徳科をはじめ全教科等において、休校・リモート授業等の影響は大きく、道徳科をはじめ、各教科等の授業時数確保、さらに授業展開での子ども同士の交流等の困難さがあったことは察するに余りある。

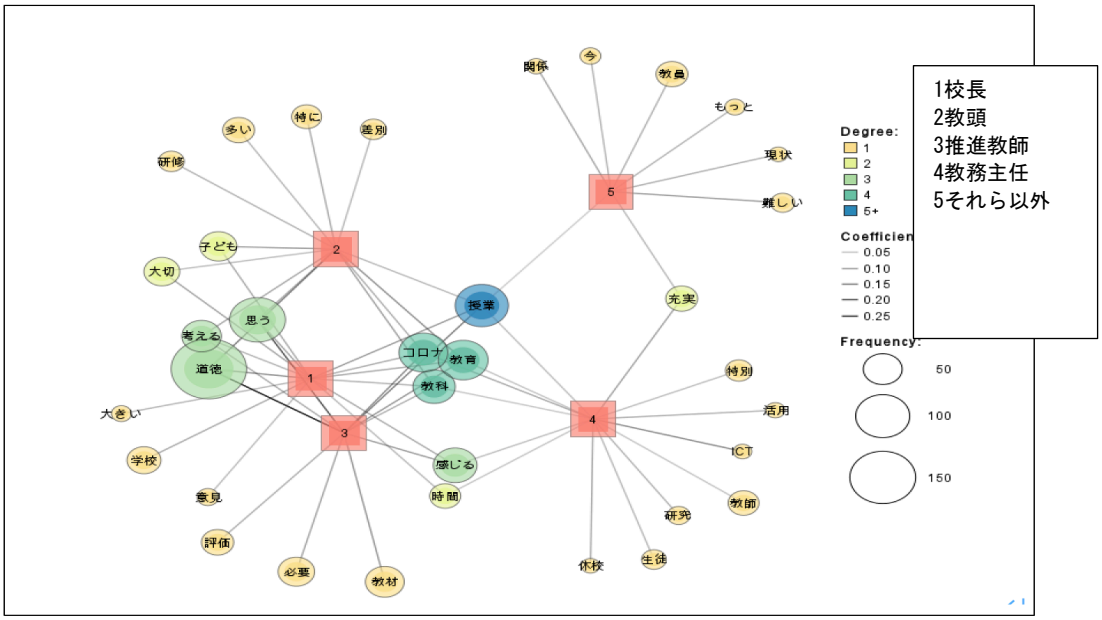

図3　外部変数「回答者の職階」と抽出語の共起ネットワーク

②その中にあって、2020年度のアンケート調査自由記述分析結果を見ると、改めて教師の教育に真摯に向き合う姿が読み取れる。

・コロナ禍の中、改めて道徳教育の大切さに気づいた。

・授業の改善・工夫に取り組んでいる。

・主体的・意欲的に教員が取り組むよう導くリーダーシップおよびマネジメントが必要であるということを校長自らが認識されている。

・道徳教育・道徳科推進の本質はコロナ禍であろうとなかろうと人としての道徳性を育てる重要な時間である。

これらについて多くの回答者が実感されていた。

③新たに工夫した取組(エンカウンター、ICTの活用、『哲学対話』等)を進める学校がある。

④これまでのアンケート結果は、研修内容(授業展開の工夫、評価の具体例、学習課題と中心発問との関連)等、積極的な実践を伴った具体的事実や考えが表記されていた。今回は、そのような記述の仕方は少なかった。また、「授業」の抽出語数が、全体で3位、「評価」は17位、「研修」は31位となっていた。懸念されるところでもある。

（小山久子）

※　本研究は、科研研究（課題番号 17H02706）の成果の一部である。

日本道徳教育学会編『新道徳教育全集』（全５巻）学文社　2021
第１巻　**道徳教育の変遷・展開・展望**

第11章　「特別の教科　道徳」設立までの道のり

押谷由夫

戦後の道徳教育の歴史は、いかに新しい日本を創る礎となる道徳教育を確立するかにあったといってよい。そのために、道徳教育の要となる科目をどのようにとらえ、設置するかが大きな課題として考えられてきた。「特別の教科　道徳」の設置は、その一応の到達点であるととらえることができる。

そのプロセスはどのようなものであったかを、とくに学習指導要領の変遷をもとに見ることによって、改めて「特別の教科　道徳」が目指しているものと課題を明らかにしたい。

１　終戦後の学校教育と道徳教育の押さえ

（１）　日本国憲法と教育基本法において

戦後の新しい日本国を創るうえで最も根幹に位置付けられるのが1946（昭和21）年に制定された日本国憲法である。日本国憲法は、国民主権、平和主義、基本的人権の尊重を3大原則とし、「世界の平和と人類の福祉」に貢献するという「崇高な理想」を掲げて、新しい日本国の建設を世界に宣言した。その「崇高な理想」を実現していくのは国民である。つまり教育の力によってである。そのことを1947（昭和22）年に制定された教育基本法が謳い、教育の目的を「人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」としたのである。戦後の教育と道徳教育の根本が、ここに示されているといってよい。

（２）　学校教育法において

そして、同年に制定された学校教育法では、小学校教育の目標として、第1項は「 学校内外の社会生活の経験に基き、人間相互の関係について、正しい理解と協同、自主及び自律の精神を養うこと」。第2項は「郷土及び国家の現状と伝統について、正しい理解に導き、進んで国際協調の精神を養うこと」と記されている。これらは、中学校教育においても同様である。学校教育において、道徳教育が基盤になることを示している。

（３）　学習指導要領一般編（試案）において

さらに、教育基本法の理念及び学校教育法を、教育課程において具体化すべく作成されたのが、学習指導要領（試案）である。その「一般編」において、教育の目標を、「１　個人生活」「２　家庭生活」「３　社会生活」「４　経済生活および職業生活」の４つに分けて記している。それぞれの第１に挙げられているのは、「１．人の生活の根本というべき正邪善悪の区別をはっきりわきまえるようになり，これによって自分の生活を律して行くことができ，同

時に鋭い道徳的な感情をもって生活するようになること」など、4つの生活すべてにおいて、道徳的な態度の育成が挙げられている。つまり、教育課程全体において道徳教育が根幹に位置づけられるということである。

（4） 学習指導要領社会科（試案）において

そして、戦後の最も注目すべき新教科として創設された社会科は、「従来の修身・公民・地理・歴史等の教科の内容を融合して一体として」学ぶものであるとし、「社会科の任務は，青少年に社会生活を理解させ，その進展に力を致す態度や能力を養成することである」とした。社会生活を理解するには、相互依存の関係を理解することが大切であり、「一，人と他の人との関係　二，人間と自然環境との関係　三，個人と社会制度や施設との関係」を挙げている。そして、「その相互依存の関係を理解するには，人間性の理解がこれにともなわなければならない。」としている。

また、各教科との関係については、「社会科の授業の中に，他の教科の授業がとり入れられ，また他の教科の授業の際に，社会科のねらいが合わせて考慮されることは，当然のことであり，かえってその方が望ましい」と記されている。

つまり、この段階では、社会科は他の教科と密接な関係を持つ教科として考えられており、そのこととともかかわって、学校教育全体で取り組む道徳教育の中核的役割を果たす教科として位置づけているととらえられる。

（5） 終戦後の道徳教育への期待と課題

このような終戦後の混乱の中で次々と制定され公布された、憲法や法律、学習指導要領（試案）を見ると、道徳教育の再建をどのように考えられていたかがよくわかる。教育の目的を「人格の完成」と規定したことに決定的な役割を果たした当時の文部大臣田中耕太郎は、「人格は人間が他の動物と異なって備えている品位ともいうべきもの」であり、「理性と自由の存在を前提」とし、自己の中にある動物的なものを克服して、「人間のあるべき姿」に接近する使命を担っていると述べている（『教育基本法の理論』有斐閣　1961）。「人間のあるべき姿」とは、よりよいものを求めて生きることであり、その根幹に道徳的価値意識がある。つまり、人格の基盤が道徳性であり、「人格の完成」を目指す日本の教育は、道徳教育を中心として行われるということである。

そして、そのことを、学校教育法や学習指導要領の一般編や社会科において、さらに具体的に述べられているととらえられる。つまり、道徳教育は、学校教育の中核であり、全教育活動を通して取り組むものであること。そのことをより充実させるために、中核となるものが必要である（この段階では社会科）ことが提案されているととらえられる。

2　道徳教育の目標と内容についての検討

（1） 1955（昭和30）年改訂の小学校学習指導要領社会科編において

学習指導要領において、道徳教育についての明確な記述があるのは、1955（昭和30）年に改訂された小学校社会科学習指導要領である。そこには、「社会生活において，親切というこ

とがいかにたいせつなことかという一般的な理解や感銘を与えるだけでなく，具体的な時と所に応じてどう行為することが親切なことになるのかということを自主的に考え，実行できるような人間にすることこそ，道徳教育の究極のねらいでなければならない」と記されている。

そして、「社会科で養おうとする態度は，いうまでもなく民主的な社会生活における人々の道徳的なありかたにほかならない」とし、「社会科の目標と児童の望ましい生活態度（社会科における道徳教育の観点）」の項目を設けている。そこには、3つの生活態度の指導の観点が示されている。第1は、「人間尊重の精神と豊かな心情をつねに日常生活の上に具体的に表現していこうとする生活態度」で８項目。第2は、「自主的で統一のある生活態度」で5項目。第3は、「清新で明るい社会主活を営むために必要な生活態度」で8項目が挙げられている。そして、これらは、「児童の具体的な生活経験を中心とした学習を通じて，総合的に身につけさせるのでなければ，決して正しく実現することができない」と記している。ここに学校における道徳教育の基本的な在り方が示されているといってよい。

（２） 1958（昭和33）年改訂の学習指導要領において

このような経緯を経て、学習指導要領に道徳教育の目標や内容が明記されたのは、1958（昭和33）年に改訂された学習指導要領においてである。

① 道徳教育の目標

道徳教育の目標は、第1章総則に次のように示されている。「学校における道徳教育は，本来，学校の教育活動全体を通じて行うことを基本とする。したがって，道徳の時間はもちろん，各教科，特別教育活動および学校行事等学校教育のあらゆる機会に，道徳性を高める指導が行われなければならない。」とし、道徳教育の目標は、「人間尊重の精神を一貫して失わず，この精神を，家庭，学校，その他各自がその一員であるそれぞれの社会の具体的な生活の中に生かし，個性豊かな文化の創造と民主的な国家および社会の発展に努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる日本人を育成することを目標とする。」と記している。

この規定から読み取れるのは、道徳教育は全教育活動を通して行われるのであり、道徳性の育成を図るものであること。その道徳性は、日本国憲法、教育基本法、学校教育法に掲げられている「世界の平和と人類の福祉」に貢献するという「崇高な理想」を追い求めるものであるということである。

② 道徳の時間の目標

そして、新設された道徳の時間においては、「各教科，特別教育活動および学校行事等における道徳教育と密接な関連を保ちながら，これを補充し，深化し，統合し，またはこれとの交流を図り，児童の望ましい道徳的習慣，心情，判断力を養い，社会における個人のあり方についての自覚を主体的に深め，道徳的実践力の向上を図るように指導するものとする。」とし、「日常生活の基本的行動様式」「道徳的心情、道徳的判断」「個性の伸長、創造的な生活態度」「国家・社会の成員としての道徳的態度と実践意欲」の4つの育成を目標に掲げ、それぞれに6項目、11項目、6項目、13項目の計36項目を示している。

中学校では、「道徳教育の内容は，教師も生徒もいっしょになって理想的な人間のあり方を

追求しながら，われわれはいかに生きるべきかを，ともに考え，ともに語り合い，その実行に努めるための共通の課題である。」と明記し、小学校の学習指導要領を考慮しながら、目標を3つにまとめて示し、それぞれに、5項目、10項目、6項目の計21項目を挙げている。
つまり、道徳教育の内容は、内容ありきではなく、日常生活の基本的な行動様式の習得・習慣化・発展及び個性の伸長、よりよい社会の建設を目指して道徳的判断力や道徳的心情、道徳的実践意欲・態度などの内面の指導を行う上で必要な内容ということになる

③　道徳の時間と社会科との関係及び内容のとらえ方

これらの内容は、1955（昭和30年）改訂の小学校学習指導要領社会科編で示されたものを、改善して独立させたとみることができる。つまり、社会科の目的な明瞭になるにつれ、社会科における道徳教育も包み込んだ道徳教育科目が必要になるということである。改訂された学習指導要領社会科には、「社会科の指導を通して育成される判断力が，道徳の時間において児童の道徳性についての自覚としていっそう深められ，この自覚がふたたび社会科における学習に生きてはたらくように指導することが望ましい。」と記されている。

（3）　1989（平成元）年に改訂された学習指導要領において

その後、学習指導要領が改訂されるたびに、道徳教育や道徳の時間の目標や内容については、若干の変更はなされているが、基本的には変わっていない。道徳の内容の表記が大きく変わったのは、1989（平成元）年に改訂された学習指導要領においてである。道徳性が育まれるかかわりを、4つの視点（自分自身、他の人、自然や崇高なもの、集団や社会）として示し、そのかかわりを豊かにするための心構えとなる道徳的価値を含む内容を、学年段階ごとに重点的に示している。

このような道徳教育のとらえ方は、終戦後に出された学習指導要領（試案）や昭和30年に改訂された社会科に示された道徳教育のとらえ方と一致する。つまり、道徳性は、実際の社会生活における様々なかかわりを主体的に持つことによって育まれるものであり、そのことをベースに取り組む必要があるということである。さらに発達段階を考慮した道徳教育がより明確にされている。

（4）　2015（平成27）年に一部改正された学習指導要領において

「特別の教科　道徳」は、2015（平成27）年の学習指導要領の一部改正において明記された。総則には、学校における道徳教育は教育活動全体を通して行われ、その要として「特別の教科　道徳」が位置付けられている。つまり、「特別の教科　道徳」は、各教科と横並びではない。学校の教育活動全体で行われる道徳教育の要としての役割を担うことから、「特別の教科　道徳」とされており、各教科を含みこむスーパー教科として位置づくことになる。

①　道徳教育の目標

新たに設けられた道徳教育の目標は、「自己の生き方（人間としての生き方）を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする」（カッコ内は中学校）と記されている。つまり、道徳教育の目標は道徳性の育成であり、その道徳性は、自分の生き方を主体的に考え、追い求め、自立した

人間となり、みんなでよりよい社会を創っていくことを根底で支えるもの、ということになる。この目標は、終戦後からずっと求めてきた道徳教育の在り方が、明確に示されているととらえられる。

② 「特別の教科　道徳」の目標

「特別の教科　道徳」の目標は、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の生き方（人間としての生き方）についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」（カッコ内は中学校）と記されている。

「特別の教科　道徳」は、まず、「道徳的諸価値について理解」を深めることを求めている。それは同時に、人間理解を深めることになる。そのことを基にして、「自己を見つめる」のである。それは、道徳教育の目標にある「人間としての自分の生き方を考える」基本である。さらに、道徳的諸価値の理解を基に、「物事を多面的・多角的に考え」ることを求めている。それは、道徳教育の目標の「主体的に判断し行動」するための基本であるととらえられる。このような3つことを押さえて、人間としての自分らしい生き方についての考えを深めていくのが「特別の教科　道徳」である。このようにして育まれる道徳性は、日々の生活や学習活動と響き合って、さらに磨かれることになる。

3　道徳の教材について

（1）　道徳の時間が設置されて以降

道徳の教科化にとって、教材の開発は不可欠である。文部省では、1965（昭和40）年に「道徳の読み物資料について」の局長通知を出している。各地方や学校現場においても道徳の教材開発が行われるように、読み物教材の具備すべき要件を示している。この通知と前後して、文部省は、次々と道徳教材に関する冊子を作成している。1962（昭和37）年には、『読み物利用の指導（低、中、高）』を、1964（昭和39）年から1966（昭和41）年にかけては、小学校、中学校ともに『道徳の指導資料』を作成し、1973（昭和46）年から1983（昭和58）年まで、ほぼ毎年道徳の教材を作成し、全国の学校に配布している。

（2）　1989（平成元）年以降

1989（平成元）年の学習指導要領の改訂に合わせて、1991（平成3）年から1994（平成6）年まで、視点ごとに全部の項目に対して、教材を開発している。また、1995（平成7）年から1998（平成10）年にかけて、小学校の高学年と中学校用に、ビデオ教材を作成し、その教材を使った授業も収録したビデオを配布している。都道府県教育委員会での魅力的な道徳教材の開発事業も行われ、読み物教材、郷土教材、紙芝居教材、カセットテープ教材などが開発されている。応募による委嘱事業として、道徳教材ソフトの開発も行われている。

2002（平成14）年からは、『心のノート』が全国の小・中学生に配布された。『心のノート』は、学校教育全体で取り組む道徳教育に活用できる学習ノートとして開発された。道徳の内容全部に対して自分で学べるように編集されている。小学校低学年用、中学年用、高学年用

それに中学生用の４冊である。

学習指導要領の改訂に伴い、2009（平成21）年には、改訂版が作成された。そして、「特別の教科道徳」の設置が決定する前の2014（平成26）年からは。道徳の授業においても使用できる教材を盛り込んで『私たちの道徳』として再編集し、全国の小・中学生に配布された。『私たちの道徳』は、「特別の教科　道徳」の設置に合わせて教科書の開発へとつなぐ役割を果たしたといえよう。

なお、2008（平成20）年の学習指導要領の改訂に合わせて、『読み物資料集』が作成され、全国に配布されている。

４　道徳の指導方法と評価

（１）　道徳教育指導方法の解説書

道徳の教科化にとって、さらに大切なのが、指導方法の確立と評価についてである。道徳の指導方法については、道徳の時間が設置されて以降、最も力を入れて取り組んだものといえる。先ほど述べた教材開発も結局は、指導方法の一環として取り組まれたとみることもできる。

文部省では、1962（昭和37）年に、教育課程審議会から「学校における道徳充実方策について」答申を受けている。とくに、我が国の文化や伝統に根ざした教材の充実、公正な愛国心の育成、宗教的・芸術的な面からの情操教育の一層の徹底、教員の研修、校内の指導体制の確立、家庭や社会の協力等が強調された。そして、毎年、道徳教育の指導資料を作成し、全国に配布するようになった。また、学習指導要領の改訂に合わせて、道徳については、『指導書』の他に『道徳指導上の諸問題』を作成することになっている。

（２）　テーマごとの指導資料の刊行や「道徳教育アーカイブ」の発信

1985（昭和60）年からは、道徳の内容にある項目で、とくに重要な項目を抽出し、小学校、中学校に分けて、指導資料を作成している。「基本的生活習慣」、「思いやりの心」、「郷土を愛する心」、「生命を尊ぶ心」が取り上げられ、1995（平成7）年からは、「真理を学ぶことを愛する心」、「社会のルールを大切にする心」、「文化や伝統を大切にする心」（小学校のみ）が刊行されている。

また、「特別の教科　道徳」が設置されたのを機に、「道徳教育アーカイブ」を立ち上げ、具体的な指導についてインターネット配信している。

（３）　道徳教育推進指定校の委嘱や道徳教育指導者養成講座の実施

文部省では、1958（昭和33）年以降、毎年、道徳教育推進校を委嘱したり、道徳教育指導者養成講座を中央と地方で開催したりして、道徳教育の充実を図っている。2020（令和３）年度予算では、「道徳教育の抜本的改善・充実にかかわる支援」として、「①特色ある道徳教育の取組の支援」「②道徳教育アーカイブの整備」「③社会全体の気運の醸成」を挙げている。「①特色ある道徳教育の支援」には、推進地域や推進校の委嘱、指導者養成講座、地域教材の開発・活用、家庭や地域との連携の取組などがある。

（4）　道徳教育の評価について

評価に関しては、学習指導要領が改訂されるたびに指導要録の記述に関する局長通知で示される。その内容に、行動の記録と所見欄（総合的所見欄）が設けられている。行動の記録には、道徳的価値が挙げられており、道徳教育の行動面に表れる状況を評価するというようにとらえられる。この様式は、昭和33年に道徳の時間が設置されてからも変わっていない。道徳の時間の学習指導要領には、「児童の道徳性について評価することは，指導上たいせつなことである。しかし道徳の時間だけについての児童の態度や理解などを，教材における評定と同様に評定することは適当ではない」と記されており、指導要録には記述の欄はない。

「特別の教科　道徳」においては、学習指導要領に、「児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し，指導に生かすよう努める必要がある。ただし，数値などによる評価は行わないものとする。」と明記されている。そして、2016（平成28）年に出された局長通知では、「児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め，励ます個人内評価として記述式で行うこと」と示している。行動の記録欄と総合所見欄は、従来通り設けられている。

5　「特別の教科　道徳」が目指すものとこれからの課題

最後に、「特別の教科　道徳」が目指すものとこれからの課題についてまとめておきたい。一言でいえば、科学が驚異的な発達するこれからの社会において、学校を人間教育の場にするための人間観、指導観、評価観の変革を提案しているととらえられる。

道徳教育は、だれもがよりよく生きようとしているという人間観を持つことによって成り立つ。その成長を実感することに生きる喜びを見出せるようにするのである。そのためには、よりよく生きようとする心を引き出す指導が必要である。どのように引き出すのか。問いかけを通してである。その問いかけも、その子に寄り添う問いかけである。そのことによって、内なる自分との対話を促し、自分自身の中にあるよりよく生きようとする心を目覚めさせ、成長させていくようにするのである。このような人間観や指導観は、当然に評価観に連動する。子どもたちが本来もっているよりよく生きようとする心を、いかに目覚めさせ、引き出し、伸ばしているかを中心とする評価である。そのことによって、子ども自身が自己を評価し、自己指導へとつなげていけるようにするのである。「特別の教科　道徳」を通して、一人一人をリスペクトすると同時に、自分自身をリスペクトできる人間を育てるのである。

主な参考文献

1　押谷由夫『「道徳の時間」成立過程に関する研究』東洋館出版社　2001
2　貝塚茂樹『戦後日本と道徳教育』ミネルヴァ書房　20
3　西野真由美他『改訂　道徳教育の理念と実践』NHK出版　2020
4　国立教育政策研究所『学習指導要領データベース』
https://www.nier.go.jp/guidline/（2020.1.3検索）

『令和元年度　滋賀県道徳教育振興だより』より

悩んでいる、きみへ

―悩みに向き合うことで、きみは大きく成長する―

押谷由夫

どうしてこのようなことをしてしまったのだろう
どうしてこのようになってしまったのだろう
どうすればよいのだろう
悩みが次々に出てきます
　なぜ悩むのでしょう
　悩むというのは
　自分と対話をしているということです
　つまり自分と向き合っているのです
　　自分と向き合えるのは人間のみです
　　そのことによって
　　心を鍛えていくことができます
　　そして人間として成長していけるのです
　　　悩みには自分で解決できないことも多くあります
　　　そのときには相談することが大切です。
　　　と同時に自分と向き合うことをわすれてはいけません
　　　そうでないと人まかせになってしまいます
悩みをもったとき
その悩みはどうして出てきたのだろうかと考えます
どんな悩みも、つきつめれば
もっとよくなりたいという心があるからだと気づきます
　その心をどのように伸ばしていけばよいのでしょう
　そのことを真剣に考えます
　すると悩みも少しやわらいできます
　そして解決策も見えてきます
　　道徳の授業はこのことを学んでいくのです
　　悩みに向き合うことは自分と対話をすることです
　　いろんな状況にいる人々のことを教材を基にみんなで考えます
　　そこから自分なりの解決策を見出していくのです

『令和元年度　滋賀県道徳教育振興だより』より

「特別の教科　道徳」の目標を深く読み解こう

押谷由夫

新学習指導要領による学校教育が、小学校では来年度から、中学校では再来年度から、全面実施されます。道徳教育改革は、それらを先導する形で、進められています。その中核となるのが、「特別の教科　道徳」です。つまり、これからの学校教育改革を進めていくには、「特別の教科　道徳」の目標について、しっかりと理解することが必要なのです。

「特別の教科　道徳」は道徳教育の目標を実現するためにある

「特別の教科　道徳」の目標は、最初に「第1章総則の第1の2の（２）に示す道徳教育の目標に基づき」と記されています。そして、その基本が「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」と示されています。つまり、「特別の教科　道徳」は、道徳教育の目標を実現していくためのものであるということです。

そして、総則の第1の1の（2）には、「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳を要として学校教育全体を通じて行うものであり」と記されています。学校における道徳教育は、道徳教育の目標の実現を目指して、それぞれの教育活動の特質を生かして全教育活動で行われるということです。つまり、「特別の教科　道徳」は、道徳教育の目標を実現するための要となるものであり、全教育活動における道徳教育と響き合わせた指導を行うことが求められているのです。

「道徳的諸価値の理解を基に」とはどういうことか
―道徳的諸価値と関わらせて人間理解を深めることが基本―

「特別の教科　道徳」の目標は、次に「道徳的諸価値の理解を基に」と記されています。これは、どのようなことを意味しているでしょう。このことばも、道徳教育の目標と関連させて捉える必要があります。

道徳教育の目標は、「自己の（人間としての）生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」（かっこ内は中学校）となっています。このことと関わらせて考えますと、道徳的諸価値は、人間として生きるための基本となるものであり、そのことをしっかりと理解する必要があるということになります。

つまり、道徳的諸価値について詳細に分析し理解を深める、といった各教科において求める知識理解とは異なるのです。ここで求めているのは、人間として生きるということと、道徳的諸価値を理解するということを一体的に考え、人間として生きるとはどういうことかについての思いを膨らませることです。具体的には、例えば、思いやりの心は人間として生きていく上で必要不可欠なものであること。そのことによって心を豊かにしていくことができるし、互いに力を合わせてよりよい社会を創っていくことができること。思いやりの心は、いろんな状況

の中で捉える必要があり、逆の行動をとってしまうこともあること。そのような課題に正対し少しでも克服することで人間として成長していけること、そのことが人間の誇りであること、等を自覚できるようにしていくのです。

「自己を見つめる」とはどういうことか

―道徳的価値に照らして今までの自分、今の自分、これからの自分を見つめるー

「自己を見つめる」とは、自分との対話を意味します。自分について深く考えるということであり、自己理解を深めることでもあります。では、どのように自分を見つめ自己理解を深めていけばよいのでしょう。ここでも、道徳教育の目標と関わらせて捉える必要があります。つまり、人間として自分らしくよりよく生きるということに関わって「自分を見つめる」ということです。そのためには、人間らしさの根幹となる道徳的価値に照らして自分と対話することが求められます。自分の中にある道徳的価値意識や実際の姿を、過去の自分、現在の自分、これからの自分を探っていくことから再確認していくのです。

そして、様々な関わりの中で生きている（生きてきた、生きていく）自分を自覚し、そこから自己の成長と共に、自己の課題を見出し、その克服へと意欲づけられるような見つめ方が求められます。そのことを、ともに行うことによって、よりよい自己やよりよい社会を創っていけるのです。

「物事を多面的・多角的に考える」とはどういうことか

―道徳的事象や状況を道徳的価値の側面から多様に考え対応できるようにする―

物事とは、道徳的事象や道徳的状況と捉えられます。私たちは、生活する上において、また自分の生き方を考えるときに、様々な道徳的事象や状況に出会います。それらにどう対応するかによって、自己が形成されていきますし、社会も形成されます。

よりよい自己やよりよい社会を創っていくには、道徳的事象や状況を道徳的価値の側面から考える必要があります。つまり、道徳教育においては、多面的・多角的に考えることによって、よりよい自己や社会の創造に向かうようになることが大切です。そのためには、人間らしさの根幹である道徳的価値と関わらせて多様に考えられることが不可欠なのです。その中で他者理解も深めていきます

そして、そのような思考を通して、様々な道徳的事象や状況をどう捉え、どう判断し、どう対処すればよいのかについて主体的に考えられるようにするのです。

「自己の（人間としての）生き方についての考えを深める」

―日常生活や様々な学習活動と響かせて、よりよい自己と社会の形成へとつなげていく―

以上に述べました「道徳的諸価値の理解」と「自己を見つめる」ことと「物事を多面的・多角的に考える」こととは、相互に絡み合わせることが大切です。そのことによって「自己の（人間としての）生き方についての考えを深め」ていきます。そのことが「特別の教科　道徳」の目標だということになります。それを、道徳教育の目標と関わらせて捉えると次のよう

になります。「特別の教科　道徳」は「人間としての自分らしい生き方についてしっかりと考える」と同時に、日常生活や具体的な教育活動の中で追い求め、よりよい自己や社会を創っていけるように、つなげていくことが大切なのです。

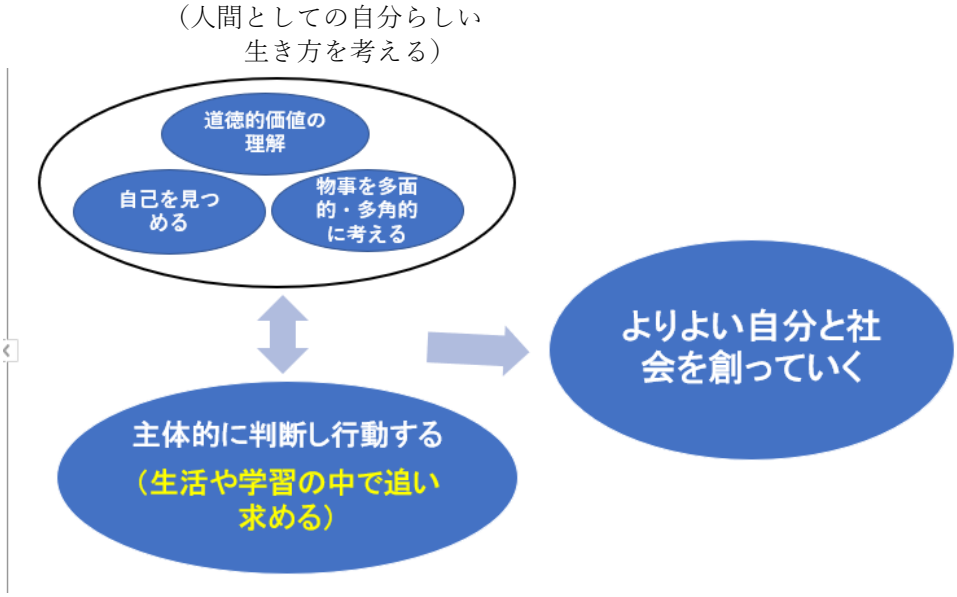

図　道徳教育の目標と「特別の教科　道徳の目標との一体化

『令和3年度　滋賀県道徳教育振興だより』より

コロナ禍を生きる、きみへ

―新しい生き方と社会を創っていくのはきみたち一人一人―

押谷由夫

コロナ禍の中、日々の生活はどうだろう
　手洗い、うがい、マスク、3蜜をさける
　授業や学校行事、クラブ活動などの制限
　土曜、日曜、休日も自由に行動できない
　家庭でも特に祖父母と自由にかかわれない
　すべてにおいて、日常生活が制限される
このようなことを、きみはどのように思うだろう
　いらいらするけどしかたがない
　しんぼうするしかない
　言われるままにしていよう
　できるだけじっとしていよう
　さみしいしむなしくなる
そのように思う「自分と今」を見つめてみよう
　今のきみは受け身的になっていないか
　どんな状態でも時間は確実に過ぎていく
　かけがえのない一日一日
　その一日一日をどう過ごすか
　それがきみの未来を創っていくことはまちがいない
どうすればいいのか
　それを考えるのがきみにとっての道徳教育なのだ
　コロナ禍では自分は関係ないは許されない
　まず自分はどうすればよいかを考えること
　そしてみんなと仲よく楽しく過ごすにはどうすればよいのか
　そのことを真剣に考え新しい自分と社会を創っていく

そう！　コロナ禍を生きるきみたち一人一人が
新しい生き方と新しい社会を創っていく主人公なのだ

コロナ禍をどう生きるかを一緒に考えてみましょう

押谷由夫

冒頭に掲げたメッセージは、私たちの共通の願いです。では、コロナ禍において、具体的にどのように新しい生き方と新しい社会を追い求めていけばよいのでしょう。一緒に考えてみましょう。

1　自分はどう生きるか－「自己を見つめる」－

（1） 自分を律することは自分自身の主人公になること
―「なりたい自分」との対話―

道徳教育は、私たち一人一人が「人間として自分らしくどう生きるか」を考え追い求めていくことです。どう生きるかを考えることは、「自分を律する」こととかかわります。「自分を律する」というと難しそうですが、要は「自分自身の主人公になる」ということです。

分かりやすく言えば、「自分自身と約束をし、それを守ろうとすること」だといえます。そのためには、自分の心の中に「もう一人の自分」を想定する必要があります。それは、「なりたい自分」です。

（2）「なりたい自分」と「ならされる自分」との葛藤

「なりたい自分」をどのように考えるか。小さいころであれば、親や先生の言うとおりにすることが「なりたい自分」でもあります。だんだんと自分で考える力がついてくると、「どうしてそのようにしなければいけないの」と疑問をもつようになります。そこから本当の意味での「なりたい自分」との対話が可能になります。

その中で、「なりたい自分」と、「ならされる自分」との葛藤が生じます。こうなりたいと思っても、それはダメだと拒否されたり、こうしなさいと押し付けられることもあります。それらに、どう対応するか。そのことは、自分との対話を主体的にするかどうかのポイントとなります。強制されたり、押し付けられたりしていることに対しては、自分との対話は受け身的になります。

（3）コロナ禍での自律

このことをコロナ禍の中で考えてみましょう。様々な規制が、外部から強制されています。それをどのようにとらえているでしょうか。自分と関係なく強制されているととらえれば、「なりたい自分」との対話ではなく「ならされる自分」との対話になり、自律へとは向かいません。

①　いのちとの対話

どうすればよいのでしょう。要は、「なりたい自分」との対話を深められるようにすることです。そのためには、なぜそのようなことが求められるのかを問いかけます。コロナ禍がなぜこんなに深刻になっているかと言えば、人間として生きる最も根源にあるいのちと密接にかかわるからです。。私は関係ない、は許されません。誰もが、いのちの危機に直面しているので

す。このような状況においてこそ、実感を伴って、いのちの大切さを自覚することができます。道徳の授業だけではなく、友達同士でも家庭でも、日常的に取り上げ話し合えるようにしていく必要があります。

②　最新の情報を活用する

いのちの大切さの自覚から、コロナ禍で求められていることを「なりたい自分」とのかかわりでとらえられるようになっても、それだけでは納得できないことが出てきます。具体的行動が求められているからです。理念は共有化できても具体的対応や行動は多様であるべきです。しかし、コロナ禍では、一定の行動や生活が強制的に求められます。なぜそのことをしなければならないのか、について納得のいく理解が必要です。それは、最新の信頼できる情報です。コロナ禍においては、道徳の授業においても、最新の信頼できる情報を活用しながら、自分のいのちを守るために何が大切かを考えられるようにする必要があります。そして、求められる規制や生活を「なりたい自分」の中に位置づけ、そのような「なりたい自分」との対話を深めて、新しい行動様式や生活様式を自分のものとして身に付けられるようにするのです。道徳の授業を要として、日常生活や様々な学習活動や家庭、地域においても、情報の提供や様々な投げかけが大切です。コロナ禍においてこそ、一丸となって取り組むことができます。

③　自分のいのちを守ることは周りの人々のいのちを守ることでもある

コロナ禍において自分のいのちを守ることは、同時に、周りの人々のいのちを守ることにもなることを自覚することが大切です。自分が感染することでどうなるでしょう。周りの人々、特に自分をかわいがってくれる人々、お世話になっている人々に感染します。自分のいのちを守ることは、自分だけの課題ではなく、周りの人々へも大きな影響を与えます。このことも、具体的な情報を基に考えることによって、自覚をより深めることができます。

④　どう行動すべきかを多様に考える

さらに大切なのは、どう行動するかをより多様に考えることです。どうすれば自分のいのちが守れるのか、どうすれば周りの人に感染しないようにできるのか、という視点から、どう行動するかを考えます。その際、信頼できる最新の情報を基に、現在求められている行動様式や生活様式を検討すると同時に、さらに新しい行動様式や生活様式を工夫できないかを考えます。それを、これから創っていく新しい社会の行動様式や生活様式へとつなげていくのです。そのためには、「特別の教科　道徳」を要として、学級活動や日常生活、家庭、地域と密接に関連をもたせた道徳学習プログラムの開発が必要です。

2　自分たちはどう生きるか－「自分たちを見つめる」－

道徳教育は、自律が基本であり、「自己を見つめる」ことが大切であることを述べてきました。そのことを、もう一つの視点で考える必要があります。自律の意識を、みんなと一緒になってよりよい社会を創っていくということと結びつけることが重要だからです。コロナ禍における道徳教育においては、いっそう考慮する必要があります。

もう一つの視点とは、「自分たちを見つめる」ことです。例えば、道徳の授業で、特定の個人の生き方に焦点化するだけではなく、その周りにいる人々の生き方にも焦点化して考えられるようにします。そのことによって、どのような社会を創っていこうとしているのかがより明

確になります。それは、一人一人が大切にされ、かかわり合い、協力し合って創っていく社会、つまり共生社会です。

しかし、「自分たちはどう生きるか」を強調しすぎると、相互の監視を強めたり、強制的になったりしかねません。「自分たちはどう生きるか」を考えた後、「その中で自分はどう生きるか」、「もしこのような人の立場であったらどう生きるか」といろんな立場の人々の生き方を考えるのです。そして、「自分たちが求める社会をどう創っていくか」を具体的に考え取り組む必要があります。「特別の教科　道徳」を要として、総合的な学習の時間や特別活動、関連する教科や日常生活、家庭や地域での生活とかかわらせて学びを発展させられる総合単元的な道徳学習プログラムを開発し、取り組むことが求められます。

3　未来への夢、希望をはぐくむ

道徳教育は、道徳的な事象や状況を道徳的価値に照らして多面的・多角的に考えられるように取り組みます。そのとき、道徳的な事象や状況そのものが厳しい状況にあるとき、よりよい自分や社会を創っていくことに向かわず、あきらめや嫌悪感を強めていくようになることも考えられます。コロナ禍においては、そのことをいっそう考慮する必要があります。

そのためには、困難な状況においてもくじけず夢を追い求め実現していった人々を取り上げ、その生き方から何を学ぶかを話し合い、自分の生き方や自分たちの生き方を切り拓いていけるようにすることが求められます。コロナ禍での体験を生かしていくことによって、これからのSociety5.0社会が求める真の「経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」を、創っていけるように思えてなりません。子どもたち一人一人が、「これからの社会を創っていくのは、コロナ禍を生きている自分たちである」ことを自覚し、未来に夢と希望をもって、明るく元気に力を合わせて、生きてほしいのです。

「特別の教科　道徳」設置前後の道徳教育
に関する全国調査
（コロナ禍における道徳教育の実態調査を含む）
（2017年度～2020年度調査）

発行年　　2022年3月31日
編著者　　押谷由夫
発行者　　押谷由夫
（武庫川女子大学教育研究所）
〒663-8558
兵庫県西宮市池開町６－４６
武庫川女子大学教育研究所
E-mail oshitani@mukogawa-u.ac.jp